學生教養新書

学820.7
0239k
00296663

漢文の學び方

魚返善雄

×
複写

至文堂

學生叢書

漢文の學び方

熊澤善雄 著

至文堂

學生教養新書

漢文の學び方

魚返善雄

至文堂

820.7 O239k II

まえがき

まえがきは原稿のできたあとでかくのが普通であるが、この「漢文の學び方」だけはほんとに「まえがき」からかいてゆく。

「漢文」というと、顔をしかめる人が多いだろう。おもしろくない學科、やつかいな試驗問題、それに「シ、イワク：ベシ：ベカラズ」の古臭い思想、等々々、いろいろ不滿があるだろう。だが、漢文はほんとにおもしろくないのだろうか？　漢文の試驗問題はこれ以上どうにもならないのだろうか？　漢文の內容はほんとに古臭いことばかりだろうか？

とにかく勉强してみることである。漢文が、かりにくだらないものだつたとしても、すくなくとも頭の訓練にはなるだろう。世のなかには、漢文は無用だ、漢字はほろびる、などといいながら、「塞翁が馬」だとか、「他山の石」などと、漢文の宣傳をしているような人もある。おもしろいではないか。

わたしは日本のむかしの中學校で漢文をならい、それから在中國の專門學校で中國語と漢文をおそわり、のちにまた日本の大學で中國語と中國文學を教えてきた。それで漢文にはかなり

国立国会図書館
28.5.22
296663

目　次

一　漢文は誤解されている……一
二　話し言葉と書き言葉……四
三　文體のX・Y・Z……六
四　漢文のはじまり……八
五　竹ベラにウルシで書く……一一
六　漢文は暗號である……一三
七　漢文はラテン語以上……一六
八　漢文訓讀の理由……一八
九　漢文とシナ語は別物……二〇
一〇　漢文と國語の關係……二三
一一　學習者の出發……二五
一二　漢文的なもの……二七

まえがき

緣が深いので、漢文とはいつたいどんなものだろうと、ずいぶん首をひねつて考えてきたつもりである。

しかし、妙にモツタイをつけたり世間ばなれのした講釋をするのはおたがいにいやだから、隨筆でもかくような樂な氣もちで筆を進めよう。讀者もそのつもりで讀んでいただきたい。この本を讀めば入學試驗にかならず合格するとは保證できないが、「學生」ばかりでなく社會人の「教養」として漢文の本質を理解し、同時に日本語のすがたをかえりみる助けにはなるだろうと思う。

この本はわかりやすくかかれてはいるが、いままで人の氣のつかなかつた——あるいは、氣はついていてもだまつていた——大事な理論がいくつか織りこまれているから、そのつもりで讀んでいただきたい。もちろん、この本は「學び方」の參考書であるから、專門的な議論をするひまはないが、それはまたほかの場所でくわしくのべるつもりである。讀者からいろいろ建設的な意見を寄せられることを期待する。

一九五二年夏

著　者

一三 漢字を正確におぼえよ……三〇
一四 部首と音訓索引……三三
一五 「形・音・義」「義・音・形」……三六
一六 漢語と「漢語まがい」……三九
一七 中國の連語と日本の漢語……四一
一八 漢文調の日本文……四四
一九 本格的な漢文……四六
二〇 過去の教科書……四九
二一 現在の教科書……五三
二二 教科書の批判……五五
二三 純粹漢文と古典文學……五七
二四 訓讀は幅を廣く……五九
二五 漢文音讀論の批判……六二
二六 漢文の文法……六五

二七 主體語（subjectives）……六八
二八 代名詞（その一）……七一
練習問題（一）……七三
二九 代名詞（その二）……七四
三〇 代名詞（その三）……七七
三一 代名詞（その四）……八〇
練習問題（二）……八三
三二 名詞（その種類）……八四
三三 名詞（その構造）……八七
練習問題（三）……八九
三四 名詞の同類……九〇
三五 說明語（descriptives）……九三
三六 動詞（完全と不完全）……九六
三七 繫詞……一〇〇

練習問題（四）……一〇二
三八　助動詞……一〇三
三九　形容詞……一〇六
練習問題（五）……一〇九
四〇　副詞（その一）……一一〇
四一　副詞（その二）……一一三
練習問題（六）……一一六
四二　連結語（connectives, その一）……一一七
四三　連結語（その二）……一二〇
練習問題（七）……一二三
四四　連結語（その三）……一二三
四五　表情語（ejaculatives, その一）……一二七
四六　表情語（その二）……一三一
四七　表情語（その三）……一三四

四八　漢文のテクスト……一三七
四九　漢文と華語の距離……一三九
五〇　古代の詩の見本……一四一
五一　古代の論說文……一四五
五二　中世の散文の見本……一四九
五三　中世の詩の見本……一五三
五四　近世の文語文……一五七
五五　現代の文語文……一六〇
五六　日本漢文の見本……一六四
五七　中國人と文學……一六八
五八　殷・周の時代……一七〇
五九　漢・六朝……一七三
六〇　唐の文と詩……一七五
六一　宋・元時代……一七九

六三　明・清の小說……一八二
六四　現代中國の文學……一八六
練習問題解答……一九一

一——漢文は誤解されている　ちかごろ日本では「漢文教育の復活」をめぐつて文化人といわれる人たちがいろいろ議論しているが、いうことがとかくトンチンカンなのは、漢文の定義が人によつて多少ともズレているからである。

中國で「漢文」といえば、もともと漢（前二〇六—後二一九）時代の文章の意味であつたが、漢はいろいろな點で中國を代表する名まえであるから、「漢文」はそのまま中國文の意味にも使われる。English-Chinese Dictionary を「英漢辭典」というのはその例である。しかし普通には中國文全體よりはもつと狹い意味に使い、中國文のうち文語體のものをさすのである。現代の中國ではこれを「國文」とよび、それと口語體の「國語」を對立させている。

民國のはじめごろまでは小學讀本もみな文語體であつたが、民國九年（一九二〇）から口語體に切りかえられた。そこで「國語」といえば新しい標準的な口語文をさし、「國文」といえば古い時代の本格的な文語文をさすのである。しかし現代の中國で一般に用いられている文體は口語文と文語文のまじり合つたもので、その關係は日本の口語體と文語體によく似ている。

ところで、古い時代の中國に口語文はなかつたのか、現代の中國に文語文はないのかというと、どちらも大いにある。たとえば「水滸傳」や「西遊記」のように明（ミン）（一三八六—一六四四）

時代に書きあげられた小説は口語文學といわれているし、民國以來の公文書や日常の書きつけなどは古文とおなじ文語體である。これによつても、文語體・口語體という文章の格式は、時代によつては分けられないことがわかる。

つぎに、文語・口語の兩方をふくめた廣い意味の中國文を外國文と對立させたとき、中國人は「漢文」あるいは「華文」「中文」などとよぶ。日本でも「華文タイプ」といえば中國の文章を打つタイプライターのことであるが、こういうよびかたはもちろん學問的なものではない。これはあまりにも廣いよびかたであるが、反對にまたあまりにも狹いよびかたがある。それは一部の日本人の頭の中にある漢文で、その人たちは「詩經」「論語」「孟子」「唐・宋八家文」「唐詩選」などのように、日本人がむかしからシナ古典として習つてきたものや、そのまねをしたものが漢文だと思つている。つまり、時代的には古代から中世までのもので、いわゆる古典的なにおい、時には道德的な色どりのある文章でないと漢文ではないと考えているようである。

その人たちの教える中國と現實の中國の開きがあまりにも大きいのにおどろいた日本の文部省は、日華事變が起こつてから全國の中等學校に「支那時文」という科目をおいて、現代中國に關する知識を得させようとした。「支那時文」の內容は現代中國の公文書や新聞の記事・廣

告、手紙文などで、その文體は古文とおなじ文語體であり、ただ單語がいくらか新しいだけのちがいであつたから、これは漢文の延長であるとも考えられた。

中國には「辭源」や「辭海」のように、文語體を用いて現代の事物を說明したりつばな辭典があつたから、日本の古い漢文の先生たちもほんのすこしの勉强でこの新しい漢文を教えることができたはずである。ところが、「あれはシナ語の領分だ」といつて逃げる先生も多かつた。おまけに、シナ語の先生でシナ時文の教科書をつくつた人が文語・口語の見さかいもなく、漢文の先生のいやがる口語文を持ちこんだりしたものだから、いよいよ持てあまされる結果になつてしまつた。

もう一つおまけに、話し言葉と書き言葉の根本的なちがいを考えない人たちが、「古い漢文も新しい中國語も、中國の言葉(?)であるからおなじものだ」と主張して、學習者の能力や目標にはおかまいなく「論語」でも「唐詩」でも現代中國語とおなじ方法で習わせようとし、それによつて日本の訓讀による漢文を否定しようと試みたことは理論的にもまちがいで、民族の習慣や言語の本質の點からあらためて批判されねばならない。

日本の漢文はこのようないきさつのために、いろいろ誤解されている。わたしたちは各自の

おかれた立ち場や主觀的な目標からひとまず離れて、漢文そのものの本質をハッキリさせなくてはならない。

二——話し言葉と書き言葉

文部省から出ている最近の(一九五一年改訂版)「中學校高等學校學習指導要領國語科編」のうち「國語科における漢文の學習指導」の章を見ると、こんなことが書いてある——

「漢文體の文章はもとは漢民族の書きことばであつたが、訓讀された漢文體の文章は、わが古典の中にはいる。ゆえに、漢文は國語科の中で學ばれなければならない。」

これはだれか國語漢文の先生の書いたものであろうが、この中にはいろいろ問題になる大きな事がらがふくまれている。ここではまず話し言葉と書き言葉の問題からのべよう。この二つは、言葉を表現の方法によつて分類したもので、音聲という方法によつて口で話すから話し言葉、文字という方法によつて手で書くから書き言葉というのである。世間には「話し言葉・書き言葉」と「口語體・文語體」を混同して考えている人もあるが、「口語體・文語體」というのは、その名の示すように文體の分類であつて、一定の格式によつて口語體とか文語體、あるい

は口語・文語混合體などとよぶのである。言葉の分類と文體の分類を混同してはならない。

「言文一致」ということが日本でも中國でもとなえられてきたが、實際において「言」と「文」はなかなか一致するものではない。というよりも、それは本質的にたがいにちがつた面をもつものと見たほうがよい。文化が相當に發達して言葉にたいする自覺の高められた社會においても、人が口に話すことをそのまま字に書くのはけつして樂なことではない。なるほど、錄音機を使つて話し言葉を記錄すれば、もとのとおりに再生することもできるが、それはただ話し言葉のくりかえしであつて、目に見ることはできない。また、演說や談話を速記の記號で寫しとり、それを普通の文字になおせば、どうにかもとの言葉に近くなるけれども、そんな文章はとかく亂れがちで、中にはまるでなにをいつているのかわからないようなものもある。たとえば電話の文句をそのまま文章に書いたらどうであろう——「あのネエ、ぼくネエ、いまネエ、銀座にいるんだけど……。それでネエ、……」と、こんなものが「言文一致」の文章だとしたら、ごめんをこうむりたいものである。

もともと話し言葉と書き言葉は、それぞれ別の場をもつものである。それを一つに合わせようとしても、まつたくくいちがつたり、多少ともズレるのはあたりまえのことだ。くいちがつ

ているものはくいちがつたままに、ズレているものはズレたままに認識するのが科學的態度である。

三——文體のX・Y・Z

「モシモシ、あのネエ、ぼくネエ、いまネエ、……」とか、「ところで、エー、政府といたしましては、アー、このたびの、オー、……」などという、話し言葉そのままの文章は、とかく亂れがちで論理に合わないことをいまのべたが、それでもこれは人間の社會生活にとつては大事なものである。生活ばかりでなく文學においても、ありのままを寫すという意味でたいせつである。また、言語そのものの研究においても、話し言葉のままの形はこれまでとかく輕く見られて、書きものになることともすくなかつたから、それだけに今後は重く見なければならない。どこの國の言語でも、いちばん知られていないのは各時代の話し言葉のすがたである。そこでかりに、この話し言葉が文章として書きとめられた場あいの形を文體の一種と見なし、これを「Xの文體」としよう。

これにたいして、作文や原稿で——「ぼくはいま銀座にいる」とか、「政府はこんどの事件について……」などと書くときの文體は普通に「口語體」とよばれているが、わたしたちはこ

れをかりに「Yの文體」としておこう。この文體は新聞雜誌の記事や小說の地の文章に廣く使われ、日記や作文もたいていこの「である」體で書かれている。もちろん、部分的には人の話し言葉がそのまま取り入れられてもかまわない。全體の調子——格式が口語體であればよいのである。

つぎに第三の文體として、たとえば詩人のように氣どつた調子で——「われはいま銀座にあり」と書いたり、ふたむかしも前の報告書のように——「政府は今回の事件に關し目下鋭意調査中なり」などとカンカンガクガクの漢語を使い、「なり」や「けり」で結ぶものがある。これは「文語體」とよばれ、こういう格式の文章は日本人がものを書きはじめてから千年以上も本格的なものとされてきた。わたしたちはこの文體をかりに「Zの文體」としよう。

Xの文體は世界じゆうどこの國の言語にもある。YとZの區別は日本や中國では特にハツキリしているが、西洋の言語にももちろんある。たとえば、おなじ意味の手紙にしても、普通の人ならただ「あなたにお知らせいたします」と書くところを、外交官社會では「閣下に通知するの光榮を有する」などと書く。これはまつたくの文語體である。それから、書物や雜誌の文章にしても、やさしい言葉で、ほとんど話しをするように書く人もあるが、ととさら古めかし

くむつかしい單語を使い、まわりくどくわかりにくい文章を書く人もある。西洋の言語には口語と文語の差別がないなどというのは、とんでもない認識不足だ。

そこでわかつたが、たいてのい言語の文體は——個人的なクセは別として——X(話し言葉體)とY(口語體)とZ(文語體)の三つに大きくわけられる。この中で、いちばん年數の長いのはZ、現在いちばん勢力のあるのはY、それから言語そのものとしていちばん研究されていないのがXである。

これだけの豫備知識をもつて、漢文や中國語の本質と取つくみ、同時に日本語のすがたをもかえりみることにしよう。

四——漢文のはじまり 文部省の「指導要領」にもあるとおり、「漢文體の文章は漢民族の書きことば」(の一種)である。この「書き言葉」という點に特に注意してほしい。もうすこしくわしくいえば、「書き言葉の中の文語體」であるのだ。

さて、漢文は漢民族の書き言葉の文語體であるとなれば、漢民族がそれをいつ、どのようにして作りだしたかを考えてみなければならない。

歷史や考古學の教えるところによれば、漢民族はいまから四五千年前にはもう、現在の華北の黃河一帶に多くの人口をもつていた。中國の傳說では、はじめに夏(か)という時代があり、つぎに殷(いん)という時代があつたとされているが、紀元前一七六六—前一一二二年に存在したと傳えられるこの漢民族初期の國家——殷は、いまの河南省あたりに現實に存在していたことが證明された。それは一八九九年、河南の安陽というところで殷時代の遺物が發掘されたからである。

「殷墟」とよばれる殷時代の都あとから掘りだされたのは、たくさんの龜の甲らやけものの骨にほりつけられた、古い形の漢字である。これを「龜甲獸骨文字」または簡單に「甲骨文」とよぶ。それは龜の腹甲やけものの肩骨に、小刀でウラナイの文句をほりつけ、それを火にあぶつてできるヒビによつて、いろいろな事がらをうらなつたもので、こんなことは古い時代の社會ではめずらしくない。

甲骨文とよばれる殷時代の漢字は、繪文字と圖案の中間にあるもので、たとえば「虎」や「鹿」「龜」などは、ちようど現代の漫畫のような感じである。しかし、われわれの平氣で使つている現在の「虎」「鹿」「龜」などの文字が、三千五百年のちの人たちの目にどう映るかを考えてみたら、われわれはまだ殷時代のほうに近いことを認めないわけにはいかない。

それはそうと、甲骨文にあらわれた文章はごくみじかい斷片的なもので、ウラナイの年月日や王さまの名まえ、山でつかまえたけものの數などが主であるから、歴史や社會の研究は別として、言語そのものの研究にはあまり手がかりにならない。ただおもしろいのは「四」の字を「三」と書き、それがつぎの周の時代の書きかたとも一致していることである。また「甲乙丙丁……」の「十干」と、「子丑寅……」の「十二支」が、このころもう組みあわされて用いられている。それから、たとえば「五十九」を「五九」と書き、「一百六十四」を「百六四」と書いているなど、字を書く手まをなるべく省略しようとしたことがわかる。また「八十」を「八|」とし、「四十」を「|||」としているなども、一種の省略法としておもしろい。えものの數を「虎一鹿|||」などと記錄しているのは、おもしろいやりかたではあるまいか。

ただおもしろいだけではなく、われわれは漢民族の文章がその出發點からして、もう非常な省略をともなつていたことを知るのだ。われわれは大むかしの漢民族がトラをなんと發音したか、シカをなんと發音したかを知らない。また「一ぴき」といつたか「一ちよう」といつたのかもわからない。しかし「虎一鹿|||」という記號によつて、意味だけはよくわかるのである。この「虎一鹿四十」式の文章こそは、漢文のはじまりの形なのだ。

五——竹ベラにウルシで書く

殷のつぎは周(前一一二二—前四八一)の時代である。孔丘先生(孔子、前五五一—前四七九)は、周がいまの陝西から河南・山東に移つた東周時代(前七七〇—)のすえ、ことに春秋時代(前七二二—)とよばれるころの人であつたが、われわれは孔丘先生があまり熱心に本を讀んだので「韋編三絶」したという話しをきいている。「韋編」とは竹ベラをなめし皮でとじつけたものである。すると孔先生の讀んでいた本は、われわれの臺所にあるスノコのようなものであつたことがわかる。なんべんもひつくりかえしていたら切れるのがあたりまえだ。

竹ベラ——「竹簡」という。いま手紙のことを「書簡」ともいうが、それはもう竹ベラではない——にウルシという一種のペンキで大きな字を書いたのが、周時代の書物であつた。老子という哲學者は周の國の圖書館長をしていたそうであるから、つまりこの竹ベラ小屋の管理人であつたわけだ。のちに秦の始皇帝という荒らつぽい人が天下の書物をあつめて燒きすてたが、なにしろ竹ベラのスノコを積みあげて火をつけたのだから、さぞ氣もちよく燃えたことであろう。

ところで、この竹ベラにウルシで字を書くのと平行して、金屬や石に字をほりつけることも

おこなわれていた。王さまが山遊びをしてイノシシやシカをたくさん取つたり、よその國と戰爭をして勝つたりすると、青い銅でトロフイーのようなものをこしらえ、それに字をほりつけて記念にした。それには「萬代子孫永寶用之」(萬代のちの子孫まで、ながくこれを寶として用いよ)などとほりつけてあつた。こういう文字を「金文」といい、これと石にほつた文字をいつしよにして「金石文」ともいう。

金屬や石にせよ、竹ベラにせよ、字を書くのにあまり適當な材料ではないから、相當に骨がおれてめんどうくさい。もともと人間はなまけ者で、骨をおることがきらいである。だから、書かなくてもわかることはなるべく省略しようとする。たとえば、「カネヲオクツテクダサイタノミマス」と書くのはめんどうだから、「カネオクレタノム」とするようなものだ。それでけつこう用がたりる。話し言葉で「金送れたのむ」などというのはブツキラボウで失禮であるが、書き言葉ではこれでもけつこうである。

もともと漢民族は北中國の黄土地帶の、あまり物資のゆたかでないところに住みついた民族だから、經濟の觀念がたいそう發達している。物質生活において、できるだけ自然のめぐみを利用し、ムダをはぶこうとする氣もちは、言語生活の面にも強くあらわれている。かれらの話

す言葉は、世界のどの民族の話し言葉にくらべても、簡單で要領のよいものになつている。しかもこの態度は、早くも三千年のむかし、いまわれわれがシナ古典とよぶ文獻の書かれだしたころから、もう十分に身につけられていたのである。

六——漢文は暗號である

漢民族の言語は、話し言葉でさえ、ほかの民族の言語よりは省略が多い。いわなくてもすむところは、できるだけいわないのが特色である。それが書き言葉になると、もともと漢字という表意文字を使つているから、途中がすこしぐらい抜けていても、飛び石づたいに意味をさとることができる。おまけに、字を書く道具がモタモタしているので、意識的にもできるだけ手を抜こう抜こうとする。もう一つおまけに、人間には審美感というものがあるから、一から十までさらけだすことをきらい、ほどほどにしておくのがかえつて美術的だと考えられる。しかも、その限度内でなるべく巧みな表現をしようとする。そこで、省略のうえにも省略がおこなわれ、ギリギリいつぱいの、もうこれ以上省略すると意味が誤解されるというところまで切りつめることになる。

できるだけすくない字數で、できるだけ多くの意味をあらわそうとするから、字の順序を變

えてみたり、一つの字に二つ以上のはたらきをさせたり、ある字はいつもある場所に書くという約束をこしらえたりして、それで話し言葉とほぼおなじだけの内容をもたせたのが漢文である。だから漢文は、クジびきのお菓子につけたヒモのようなもので、それをたぐりよせればお菓子があがつてくる——意味がわかる——のである。しかし、そのヒモをなめてもちつともあまくないように、三千年前の「詩經」や二千年前の「論語」の文章を、現代中國語を話すように發音してみたところで、それはまつたくのナンセンスである。おなじ漢字で書いてあるのだから現代語も漢文もおなじだといえば、頭の單純な人をだますのにはつごうがよいが、たとえおなじ漢字が使つてあつても時代がちがえば意味はたいへんにちがうのだし、話し言葉の場あいと書き言葉、とに文語體としての漢文の場あいには、まつたく意味のちがうことが多いのである。漢文と中國語は文字がおなじだから言語としてもおなじだというのは、ラテン語も英語もローマ字で書いてあるから同時に學ばれるというのとおなじで、まつたく言語というものの本質を知らないバカげた議論であり、そうでなければ何かコンタンがあると考えてよい。

中國のすぐれた言語學者で文藝家でもあつた劉復氏は、漢文（漢民族の書き言葉の文語體）は「一種の符號語であり、數千年來の文化人たちが協力して作りあげたものであつて、その性質

は數學の公式や電報の暗號數字と大差なく、ただそれよりももつと手のこんだものである」といつた。大むかしには符號(文字)もすくなく、字を書く道具も不完全であつたから、かりに話すとおりに書こうと思つてもそれは不可能であつた。その後、文字もふえ、道具も進歩し、話し言葉のほうも自然の法則にしたがつて變化したので、ものを書く人たちの文章もすこしずつ變化した。といつても、かれらはその時代の話し言葉に調子を合わせようとしたのではなく、ただおなじ時代の人が目で讀んでわかつてくれればそれで滿足したのである。つまり、話し言葉の進歩的なのにたいして、書き言葉はかなり保守的であつたが、それでも目で見れば意味はよくわかるのだし、そのうえ話し言葉のダラダラしたのとちがつて、齒ぎれのよい簡潔な文語體は、どの時代の文化人にもこのましいものに思われた。一方また、中國人には傳統的に古代のものを尊重する習慣があり、むかしの人の書きものはなるべくそのまま持ち續けることにしている——この態度を「述而不作」(祖述はしても創作はしない)という。だから過去の中國人は、文化人と限らず一般大衆もまた、ものを書くとなれば文語體を標準にしてきたのである。

民國五、六年ごろから「文學革命」がとなえられて、まず文藝方面、やがて學術方面にも口語體（いわゆる「白話文」または「語體文」）が使われるようになつたが、中國人の社會生活に

おいてはまだまだ文語體(いわゆる「文言文」)が廣い面積を占めている。手紙も領收書も廣告文も、多くは文語體で書かれ、今日ただいまの新聞記事でさえ、まだまだ多分に文語的である。

七——漢文はラテン語以上　「漢文は東洋のエスペラントである」と、よくいわれる。それは漢文で書いた文獻が中國の南の人にも北の人にもよく通じるばかりでなく、日本や朝鮮、安南の人にまで理解される點を強くのべたのである。日本人や安南人は漢文を讀むのに中國人とはちがつた發音をするが、それでも漢字の意味はよくわかるので、おたがいに意思を通じることができるのである。その點、漢文はエスペラントよりはラテン語に似ている。エスペラントは人工的な世界語の一種であるが、歷史的に古い背景をもつてはいない。また、國によつてエスペラントの發音がまるきりちがうということもない。ところがラテン語は、二千年以上の文化的背景をもち、ヨーロッパ各國の宗教・學術用語として共通に用いられてきた。有名なラテン語の文句——

Ecce homo (*Behold the man.*「この人を見よ」)

これをイギリス人は「エクスイ・ホウモウ」と發音し、フランス人は「エクセ・オモ」と讀

み、ドイツ人は「エクツエ・ホーモ」というが、どちらにせよ意味には變わりがない。

ラテン語はもと古代ローマ市の言語で、近代のロマンス系諸言語(フランス語・イタリー語・スペイン語など)の出てきたもとであり、宗教家や學者にとつてはどうしても必要な道具であつたが、それが一般人の社會生活にまで組織的に使われることはなかつた。まして近世の「文藝復興」時代になると、各國の學者はそれぞれ自國の言語を重く見て研究するようになつたから、ラテン語はいよいよ特殊なものになり、ギリシヤ語とともに、いわゆる「古典語」のあつかいをされるようになつた。もちろん、ヨーロッパの諸言語の中にはラテン語の文句がかなり多く見られるが、それはいわば外來語として引用されたものであつて、中國の漢文のように、古典時代とおなじ語法をもつた書き言葉が社會全般に使われているわけではない。古いギリシヤ語やラテン語は、むかしの形がこわれて近代のヨーロッパ語に變化し、もとの形はもう紙の上でしか生きていないので、「死語」(dead language)ともよばれている。ところが中國の漢文は、もともと一種の暗號組織としてできあがつたものであり、生きた言葉として口に話されたことはないのだから、死語になろうとしてもなれない道理である。生きていたことのないものが死ぬことはあり得ないのだ。つまり、漢文は出發點からもう、生死を超越した存在であつた。だ

から漢文はラテン語以上である、といつても不合理ではあるまい。

しかし、現在の言語發展の段階にあるわれわれが漢文を取りあつかうときには、ラテン語に似たあつかいかたをしてよい場あいが多い。たとえば發音にしても、もともと漢文は話し言葉とは體系のちがつた暗號なのだから、各國、各自、それぞれつごうのよい讀みかたをしてもかまわない道理である。たとえば「心」とあるのを、北京語のように「シン」といつてもよく、廣東語のように「サーム」といつてもよく、あるいはフランス語で「コール」と讀んでも、日本語で「こころ」と讀んでもかまわないわけだ。——現に廣東人も日本人もそう讀んでいる。これを北京語で「シン」と發音せねばいけないように思うのは、なんとかの一つおぼえであり、話し言葉と「符號語」をいつしよくたにした非科學的な態度である。

八——漢文訓讀の理由　書き言葉の文語體としての漢文は、劉復氏のいう「符號語」の組織であり、一種の暗號體系であるから、これを一時代の話し言葉と同列におくのが根本からまちがつていることは前にのべた。このことはさらに、西洋人の古典語にたいする態度や、中國人の中の先覺者の言葉によつても證明することができる。

現在、西洋の學界ではある程度の古典語の知識が必要で、學校教育にもそれが取りいれられているが、およそ古典語に手とずらされるのは、西洋の學生の場あいも東洋の學生とおなじことである。たとえば——

Mens sana in corpore sano.

という文句が出てくると、西洋の學生は——mens は英語の mind であり、sana は sound, in は in, corpore は body, したがつてこの文句は A sound mind in a sound body. (健全な精神は健全な身體に) の意味だとさとるのである。つまり、かれらも頭の中で機械的な飜譯の作業をやつているわけで、機械的な飜譯の作業とはすなわち訓讀のことである。この程度の簡單なラテン文でもそうであるから、もつと複雜な「格」變化や動詞活用をふくむ文句になると、かれらもそれとそノミ取りまなこで、あつちを押さえこつちを押さえしながら、全體の意味をじぶんの國語になおして理解しようとする。日本人が漢文を讀むのとおなじことだ。

これがあたりまえのことである。言語系統のちがいや、時代の差を考えるならば、こういうやりかたのほうが大多數の學生にとつては自然的であつて、原文を棒讀みしてすぐに意味がわかるなどというのは、ごく少數の例外的な人でしかない。それもたいていは修練の結果、いわ

ば條件反射的に作業速度がはやくなつたまでのことで、母國語同樣にラテン語をペラペラやるなどは、西洋の學者にとつてもそう樂なことではないのだ。

發音についても、古典語は專門の學者にさえ疑問があるくらいだから、一般知識人が自國語の音聲組織にふさわしいように「變則的」な發音をするのは、これまた當然のことであり、そのほうがかえつて自然的で正則的であるともいえる。たとえば、イギリスの作家ステイーヴンスンの「青年男女のために」という本の題名は、ラテン語で(!)"Virginibus Puerisque"となつているが、英語國民はこれを「ヴアーギニバス・プアリスクイ」、あるいはもつとなまつて、「ヴアーヂニバス・ピユアリスクイ」と發音している。有名な人の名にしても、Ciceroは英語讀みではシセロウであり、Caesarはスイーザと讀まれている。「聊齋志異」を「リアオ・チヤイ・チー・イー」、「赤壁の賦」を「チー・ピー・フー」といつて、中國人にも日本人にもわからないヘンな發音をしないことには、腹の蟲のおさまらないのが「シナ學の專門家」であろうが、それはその人たちの道樂で、國民の大多數とは關係のないことである。

九——漢文とシナ語は別物

中國のある國語運動家が、文語體(文言)と口語體(白話)の比較

をした文章の中で、こんなことをいつている——

口語體は現代人の言葉をもつて現代人の氣もちを傳えるもので、直接的であるが、文語體は古代人の言葉をもつて現代人の氣もちを傳えるもので、間接的である。間接的傳達では、書く人も讀む人も、どちらも飜譯の手まをかけなくてはならぬ。ちようど外國にいる本國人から外國語の手紙をもらつたようなもので、これはバカげたことだ。

むかしの人は六歳から二十歳ぐらいまで古文ばかりを讀み書きしたからモノになつたが、いまは學科が多くなつたのでそんなことはできない。

文語體は口語體より簡潔だという人もあるが、讀み書きの時間はみじかくても、頭の中で飜譯する時間はどうなるのだ?

——この議論には、文語體すなわち古代人の言葉だと單純にきめてかかつている不合理な點もあるが、それはそれとして、中國人の中のあるグループの人たちが文語體(漢文)をどんなふうに認識しているかを知る手がかりにはなる。かれは文語體を「間接的な傳達手段」とみとめ、「飜譯の手まのかかることは外國語同然」だといい、これをモノにするには本場の中國人でも十五年ぐらいかかるという。

これは口語(白話)運動のために書かれた文章だから、文語(漢文)をけなしつけているが、けなそうと、ほめようと、文語體の本質には變わりがない。すなわち、中國の書き言葉の文語體

(漢文)は、話し言葉とはまつたく別の體系を形づくるもので、話し言葉とそれとの關係は、ほとんど外國語との關係に近いし、それを讀んだり書いたりするのは中國人にとつても容易なことではなく、ことに學ぶべき學科の多い現代ではなおさらである、とこの人は斷言している。

この有力な證言によつても、漢字の横に發音のルビをつけて粒讀みしながら、現代の中國語といつしよに漢文をやれば——しかも言語系統や文化背景のちがう日本人が、第二外國語程度のわずかな時間數で三年か五年もやれば——それで中國語も漢文もモノになると考えるなどは、いかに現實を離れた空想であるかがわかる。したがつてまた、漢文という特殊な「符號語」を解讀するためには、中國人も外國人も、なにか特殊な方法を必要とすることがわかる。

もう一つたいせつな點であるが、外國人はもとより中國人でも、人間の時間や能力には限りがあり、一般人と專門家ではそれぞれ目標もちがうのであるから、口語體と文語體の兩方を追つかけるのは樂でないばかりか、どちらもモノにならない場あいが多いと考えるべきである。

民國以來の中等教育では「國語」を主にして「國文」を從にし、その後ますます「大衆語」の方向に進んで、文語體はただ引用文程度に目やすをおいているが、これは正しいやりかたである。過去の日本人が「支那語」と「漢文」の二本建てでやつてきたのは、技術の點にはなお

改良の餘地が多いとしても、方法としては——ケガの功名かもしれないが——まちがつていなかつたことがわかる。

一〇——漢文と國語の關係　漢文は中國人にとつても難物であり、外國人——日本人も外國人である！——の場あいにはなおさら、中國人のまねをしても成功の見こみのすくないことがわかつた。そうでなくてさえ中國の學問は、時間的にも空間的にもたいへんなものであるから、研究上の分業という點から考えても、たとえば語學なら漢文と中國語、あるいは古典語と近代語というふうに、本質上あるいは習慣上適當なところで二つに分けて受けもつのが現實的なやりかたである。ところで、漢文と國語の關係はどうであろうか？

研究や教授上の分業という點からいえば、國語と漢文は別にしたほうが無理がないし、いままでの實際を見ても大體そうなつている。國語もまた漢文におとらず範圍の廣い學科で、ことに日本人の場あいには國文學との關連が多いから、國語をさらに時代別あるいは部門別にして分擔することも必要であろう。一人の先生で國語と漢文の兩方をもつことが、個人にもグループにもプラスになるかどうかは保證できない。

「訓讀された漢文體の文章はわが古典の中にはいる。ゆえに、漢文は國語科の中で學ばなければならない。」

「漢文は訓讀されることによつて、はじめてわが國語生活と結びつくものであるから、漢文學習は訓讀の方法によらねばならない。」

——文部省の「指導要領」のこの方針は大體において適當であるが、ただ「訓讀された漢文」とか「古典」というものにとらわれないで、もつと大きく、深く、漢文の本質をつかみ、古典や時代を乘りこえたところに漢文の原理を見いだすことができたら、いつそうよかつたことであろう。しかし——

「漢字・漢語はわれわれの日常の言葉の中にも生きているものであるから、漢文學習および訓讀的なものの學習については、現代語の學習の中ででも行える部分があり、……」

「漢文の訓讀はわが國語の中にいわゆる漢文口調の文體を生み出し、漢文でしるされた内容がわが文學にも影響したことが多いから、漢文的なものの學習は、一般國語學習においても必要である。」

「今日の國語の中にも、文字・語い・文法・文體などに多くの漢文的要素が生きており、これを無視しては國語學習は完全には成り立つまい。」

——とのべていることによつて、實際においては古典と同等に現代語の中の漢文的要素を重く見ていることがわかる。教授者あるいは專門の研究者としては、國語と漢文、さらにそれぞ

れの内部において、分業の必要があるにしても、學習者としては國語・漢文の一方をまつたく無視することはできないわけである。それどころか——

「わが國は古くから漢文や漢文調の文章を書きことばとして用いて來た。そうして、それらの中にはわが國の重要な古典となつているものもある。」

「國語は、文字・音韻・語い・文法・文體などのあらゆる面で、漢文と深い内面的な連關を持つており、新しいことばが作られるときなどにも、漢字・漢語を用いることが多い。したがつて、國語の知識・理解・技術・能力・鑑賞・理想を高め、また國語の發達を圖ろうとする態度を作るためにも、漢文の學習は必要である。」

一一——學習者の出發　以上十項目の豫備知識をもつて學習者は出發する。ここに一つ、道中の用心までに心得ておきたいのは、漢文と「修身」(倫理・國民道德など)は本質的に無關係なことである。過去の日本では固有の宗教や倫理に有力なものがなく、中國の儒教倫理を借用したために、その道具としての漢文自體にまで、なんとなく倫理的なひびきが感じられたが、漢文は本來ただ特殊な語學、あるいはいわゆる古典學であつて、それ以上でもなければ以下でもない。漢文が不死不滅であるためには、一種特別な暗號體系——「符號語」という性格を守り

とおすほかはないのである。暗號帳が修身教科書や會話書になることは不可能だ。それをやろうとして失敗したのが、過去の一部の道學者や中國語の先生であつた。漢文を學んだために「東洋文化の背骨が通る」ことがあつたとしても、それは漢文によつて運び傳えられた道理や社會知識や文藝などが十分に理解されたおかげであつて、漢文そのものの効能ではない。しかし、人類の思想を表現する一つの手段としての漢文が、人の頭をきたえるのに役だつことは、前にものべたとおりである。

さて、日本の文部省は學校教育の中の漢文になにを期待しているか？　「漢文學習指導の目標」として擧げられた項目は——

1　漢字・漢語の構造や發音や意味を理解し、かつこれを正しく効果的に用いる技術と能力とを高める。
2　漢文體・漢文口調の言語・文章の特質を理解し、それを國語の効果的な使用に役だてる。
3　漢文の文章の構造を理解し、これを讀みこなす能力を伸ばす。
4　わが國の文學と漢文との關係を理解し、廣く文學の鑑賞に資する。
5　わが國の古典としての漢文を理解して、われわれの生活を豐かにする。
6　日本文化・東洋文化に貢獻した漢文の意義を理解する。

——文部省のこの試案にかかげられた目標は、押しつめていえば、「漢字・漢語・漢文的國語、および本格的漢文を理解し、應用し、日本文學と漢文の關係、それから日本古典としての漢文を知り、さらに漢文と東洋文化の關係を認識する」ことで、つまり「言語・文學・文化の三方面から漢文を學べ」というのである。これは常識的ではあるが、適當な見解といつてよい。

目標はそれでまずよいとして、つぎに材料はどうかというと、「(一)漢民族によつて作られた文語體の詩文、(二)それを學んで日本人が作つた詩文、(三)日本語を混じた漢字のみの文」と文部省案にあるように、中國人の書いたものばかりでなく、日本人が中國の方式によつて書いた漢文、それから、完全な漢文でなくてもそれに近いものもふくまれる。なおまた、中國人の書いたものは、すでに日本人によつて訓讀されたものばかりでなく、これから訓讀されるものや、これからのち中國人の書く文語體の文章、あるいは口語體の中にふくまれた文語的な部分も當然取りいれられてよいことは、さきに「シナ時文」に關連してのべたとおりである。

一二——漢文的なもの

われわれ日本人に身近というよりは、身のうちに入りこんでいるも

のに、「漢文的なもの」がある。それは海草のように深いところに根をおろしているので、よく氣をつけて見ないとわからない。漢文的なものは日本人がまだ文字をもたない時代からもう入りこんできたので、日本人の言語生活や文學生活はもとより、社會生活から思想生活にまで、それは大きなはたらきをしている。これはもう過去の事實であるから、どうにもならないことである。漢文古典の中のあるものは、國文の古典よりもはるかに多く讀まれた。その結果、わるい影響ももちろんあつたが、とにかく日本人の知能を高め、感情を練り、意志をきたえて、いわゆる日本的性格を形づくるのに役だつたこともたしかである。ことに明治の開國以來、西洋の近代科學や制度を取りいれるのに、漢語という便利なものが大きな助けになつたことは——これにももちろん行きすぎの害はあつたが——否定できない事實である。もし新しい漢語だけでも取りあげられてしまつたら、國會の演說もできないし、學生のレポートも書けなくなつてしまう。

漢文的なもののうち、たとえば「ものの考えかた」のような、目に見えないものはことでは取りあげないで、ただ漢字・漢語と、漢文調の日本文だけを問題にしよう。現在の日本では、ひとくちにいえば、無學な者や半可通の者、それから、人にエラく見せたがる者ほど漢語を多

く使うようだ。小說家でも、大衆小說家ほど漢語がすきらしい。ナニワぶしや講談もそうだ。インチキ政治家の演說なども、ナニワぶしや講談に似たところがある。時代感覺がズレているのだ。

明治初年には、やたらに漢語のはやつた時代があつた。そのころの都都逸（どどいつ）という歌の文句にこんなのがある——

今は壓倒されては居れど、やがて起きます雪の竹

「壓倒」なんて漢語を歌に入れるのはヘンなものだが、その時代にはヘンでなかつた。それとおなじように、明治の文學者高山樗牛（ちょぎゅう）が、「吾人は須（すべ）らく現代を超越せざる可からず」と、わかつたようなわからないようなことをいつた時にも、みんなはただ感心するばかりで、ヘンだとは思わなかつた。

大正時代に、あの「羅生門（らしょうもん）」や「鼻」などの作品を書いて有名になつた芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）は、三十四五の若さで自殺したが、かれの「支那遊記」の文章を見るとまるで六十、七十のおじいさんのようだ——

……待つこと一分ならざるに眼光烱烱（けいけい）たる老人あり。闥（たつ）を排して入り來り、英語にて「よく來た。ま

あ坐れ」と云う。

大正十年ごろには、こんなふうの字の使いかたをするのが「文人趣味」であつた。大正どころか、昭和になつても、たとえば、一風變わつた風格があるというので評判になつた中島敦という作家の文章を見ると——

隴西の李徴は博學才穎、天寶の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。

——と、こんな調子であるが、これが昭和十七年に三十四歳で死んだ、東大國文學科卒業生の文章だからおどろくではないか。

だが、おどろくのはやめよう。日本の文學者の中には、まだまだこういう文章を書く人はほかにもあるのだ。現代の日本文學でさえそうであるから、明治・大正の小説や、歌や俳句や評論を讀もうとするには、個人のすききらいにかかわらず、こうした文體や用語をひととおり學ぶことはどうしても必要である。

一三——漢字を正確におぼえよ

「當用漢字」が千八百五十字、「教育漢字」が八百八十一

字というふうに、字數がへらされてくると、世間ではとかく漢字の値うちを輕く見るようになり、「なあに、漢字なんてものはいまになくなるから、いいかげんにおぼえておけばいい」などと考える人もあるが、そんな人は、學問はもちろん、日常生活でもずいぶん損をするにちがいない。ヒニクなことに、漢字制限にどんなに熱心な先生でも、じぶんの子どもが漢字を一字でもよけいに知つていることをよろこんでいるのだ。

氣をまわされてはこまるからことわつておくが、わたし自身も、書きものをするときにはできるだけ漢字を使わないようにしている——というより、できるだけやさしい日本語を使うようにしている。やさしい日本語を使えば、漢字の數は自然にへつてくるものだ。わたしは新聞雜誌の評論でも隨筆でも、千字以下の漢字でけつこう書けると思う。隨筆ばかりでなく、學術的な書物でも、著者がモツタイぶりさえしなければ、やさしい日本語で、だれにもわかるように書けるはずだ。一方では國語問題を論じていながら、平氣でむつかしい漢字や漢語を使う人があるが、まつたくおかしなことである。

ものを書くには、第一にやさしい日本語を使うこと、第二には漢字の意味をよく知つて使うことが必要である。漢字の意味がよくわかつておれば、數はすくなくてもけつこう役にたつも

のだ。反對に、漢字の意味を正確に知つていないと、たくさんの字を知つているつもりでも、それほど能率があがらない。たとえば、「しかしながら」というときに「併し乍ら」などと書く人があるが、これはまつたく無意味なことである。「やはり」を「矢張り」と書くなども、ほんとにバカげたことだ。

では、どうしたら漢字が正確におぼえられるか？　それにはまず、漢字の數や、大體の性質を知らねばならない。漢民族の發明した文字といわれる漢字も、殷のような初期の國家の時代には、まだ數がそう多くなく、構造もわりあいに單純であつたが、周から秦を經て漢の時代になると、もう現在の古典に使われているような漢字がすつかりそろつた。漢の許愼（きよしん）という人の作つた「說文（もん）解字」という字引きには九、三五三字の漢字がある。くだつて唐の時代の「廣韻」という本には、二六、一九四字もある。近世になつて、淸（シン）の「康熙（こうき）字典」には、四二、一七四字という多數の漢字が出ている。現代においても、いちばん大きな字引きには四萬字以上もあり、日本の普通の漢和字典にも一萬から一萬五千字あるが、それはちよつと變わつた形のものまでふくめての數で、實際に使われるのは七千字以下と見てよい。中國の印刷工場の活字母型は、戰爭前には六、八五七字、華文タイプライターは五、三七二字をもつていたが、そのうち

一般的に多く使われるのは二千三四百字であつた。

口語體（白話文）に使われる字と文語體（文言文）に使われる字はくいちがつている——たとえば、「犬」という字は中國では文語文にしか使わず、口語文では「狗」という字を使う（「狗」は文語文にもたまに出てくることがある）。だから、中國で常用漢字をきめるには、口語文と文語文の兩方の場あいを別別にしらべなければならない。もつと理想をいえば、「話し言葉」體を漢字で書く場あいの字數をしらべることである。わたしは友だちといつしよに、世界各國の中國語の本についてそれを調査したが、その結果、普通に使われる地名や人の姓まで入れても、二千三四百字でよいことがわかつた。いわゆる口語文（白話文）には話し言葉體と文語體がまじつているから、統計がとりにくいが、純粹の文語文では約三千字あればよい見こみである。兩方合わせても五千數百字であるが、その中にはダブつた字も多いから、まず四千字もあれば普通の話し言葉體と文語體の兩方を書きあらわせると見てよい。

一四——部首と音訓索引

一九三二年に出た「國音常用字彙」という中國の標準的な現代語發音字典には、約七千六百の漢字があるが、とれには俗字や略字もふくまれ、そのうえ文語體

用と口語體用の兩方がいつしよにぶちこまれている。中國でもなるべくムダな字はへらそうとしてきたし、一方また、大衆や小學生が字をおぼえるときの能率をよくするために、常用文字の研究がされている。ごく最近(一九五二年六月末)に發表された中國の「常用字表」には、わずか千五百の漢字しかないが、それでも日常生活の必要を八、九十パーセントまで滿足させることができるといつている。

現代のわれわれには、物ずきにたくさんの漢字をおぼえるだけの時間はない。だが、中國の古典や日本の古典、それに近代の文學作品までも、どうにか理解するためには、「當用漢字」よりはもつと多くの漢字を知らねばならない。現に日本の社會で使われている漢字は、けつして千八百五十字以内ではない。

さて、漢字を知るには字の形と發音と意味をおぼえねばならないが、小學校から中學校・高等學校と、十年以上もおそわつているのだから、いまさら漢字の形など、と思う人もあるだろう。しかし、實際には字引きが引けなかつたり、ウソ字を書いたりする人が多いようだから、大事なことだけでも復習しておかねばならない。

日常生活や入學試驗のためなら、日本で出ている普通の漢和字典でたくさんである。漢和字

典は「部首(しゅ)」の順になつており、はじめに「部首索引」がある。部首はみなで二百十四あるが、丶やーのような漢字の部分品のほかに、「人」や「土」のような、まとまつた漢字をふくんでいる。これを英語にたとえると、a b cのほかに man, earth などがいつしよになつているわけで、あまり科學的なやりかたではない。そこでいろいろ部首の改良が試みられているが、これまでの習慣もあるから、とにかく一應は現在のままでおぼえることである。西洋人は部首の一つ一つに番號をつけて、その名稱から意味までシラミつぶしにおぼえ、それらを組みあわせてむつかしい字をおぼえるようにしている。日本人のやりかたはどうも西洋人にくらべてもズボラなようだ。

漢和字典には、おわりに「音訓索引」があつて、たとえば「ア」で「阿」を、「あい」で「藍」を引けるようになつているから便利である。これは日本人だけの特權(?)であるが、西洋でもたとえば 'indigo' から「藍」の字を引きだす字引きが作れないことはない。しかし西洋人は日本の「吳音」や「漢音」のように組織的なものをもつていないから、その點は日本人にかなわない。漢音・吳音などを漢字の「字音」といい、實用的なものが約三百種ある。訓のほうは四五千もあるようだ。字音には「唐音」といつて、たとえば「普請」(ふしん)「行脚」

(あんぎゃ)のように、漢音・呉音とはちよつとちがつたものが近古時代から使われているが、その數は多くない。また「華音」といつて、たとえば「麻雀」(マージャン)のように、現代中國語の音が日本化されて通用しているが、これもマージャン用語や中華料理の名まえなどに限られ、一般的なものではない。

漢音と呉音についていえば、坊さんの讀むお經などは、(漢音のこともあるが)普通は呉音で、たとえば「如是我聞」という文句を「ジョシガブン」とはいわないで「ニョゼガモン」と讀んでいる。だが漢文では、その名のとおり漢音を使うのが普通で、たとえば「言語」など、ゲンギョと讀むのが漢音としては正しい。

一五——「形・音・義」「義・音・形」 中國の場あいは日本とちがつて、使つている文字は全部じぶんの國で作られたものであり、自國語の性質にピッタリしているせいでもあろうか、文字を重くみることは世界にも類のまれなほどである。中國が「文字の國」といわれるのも道理で、中國人は「ただひとことといつた」というときに「ただ一字の話しをした」といい、話しが「ちつともわからない」というときに、「一字もわからない」という。

だから言葉そのものよりも、文字のほうに興味や趣味をもつてきた。むかしから書道に熱心なことによつてもわかるように、中國人は字の形には特別に氣をくばる。これまでの中國では、ウソ字やヘタな字を書くと尊敬されないことが多かつた。

學問として言語を研究する場あい、中國人は「形・音・義」という術語を使つてきたが、「形」は文字學、「音」は音韻學、「義」は訓詁學として、それぞれ特色のある發展をした。しかし、中國の文字學は現實の話し言葉との關係を重くみない缺點があり、音韻學は文字の分類ばかりしてカンジンの單語の發音を打ちすて、訓詁學もまた書き言葉としての古典の文字ばかりをセンサクして、眞の意味の文法學にまで發展しなかつた。

言語の理論から見ていちばん大事なのはむしろ意味(義)であり、意味をもち運ぶ音韻がそのつぎに大事、そして文字(形)は、ある場あいには無視することもできる。たとえていえば、酒や油を買うのに瓶をもつてゆくようなもので、中身の酒や油——意味——こそはいちばん大事なもの、瓶——發音——はその中身を運ぶのに大事というわけ。もし瓶のそとがわにアミ——文字——があれば、運ぶのに便利であり安全でもあるが、それは、なければなくてもすむものである。

日本人が漢文を學ぶ目的は一つではないが、意味内容を理解することこそ、いちばん大事であろう。意味もわからないのに「シ、イワク、チンプンカンプン……」などと大きな聲をだしたところではじまらない。まして中國人のまねをして「ツーユエ、チーフーチョーイエー……」などと氣どつてみたところで、ヘタな中國語ではまつたくのナンセンス、じようずな中國語で讀んでも、耳で聞いただけでは意味のわからないのが、中國文語文の性格である。まして、「詩經」にたつた一カ所、「論語」にたつた一ぺんしか出てこないような字を、無理しておぼえたところでどうにもならない。

そうはいつても、とにかく理解できるところまで一心に意味を追つかけてゆくだけの熱意は必要だ。また、漢字の音や訓なども、日常の生活や教養のために必要なものは、正しくおぼえておかねばならない。そのうえ、字の一點一畫までゾンザイにしない習慣をつけることは、漢文の學習というよりは人間的訓練としても望ましいことである。

人によると、「日本と中國では漢字の意味がちがうから、おぼえてもしかたがない」などというが、漢文すなわち文語文に使われる漢字の意味は、中國も日本もそれほど大きなちがいはない。口語文では、たとえば「娘」という字が中國では「おふくろ」の意味だつたりするが、

それでも「母親」は「おかあさん」だし「電車」は電車だから、意味の共通の場あいのほうが大多數を占めているのだ。なにか別にたくらんでいるような人たちの、作りばなしにだまされしはならない。

一六——**漢語と「漢語まがい」** 日本人がこしらえて使つている「鰯・樫・瓩・粁・込・笹・嶄・癪・辻・糎・峠・凧・襷・燵・鱈・狆・栂・辻・褄・働・栃・鞆・凪・匂・畑・畠・噺・鋲・枡・俣・麿・瓩・粍・雀る・杢・籾・匁・軈て・枠」その他これに類するものを「和字」というが、これは「漢字まがい」のものである。和字は中國人の目にはめずらしいが、數はそう多くない(めつたに使わないのを入れても、百五十字ぐらい)。日本人は中國人ほど文字道樂でなかつたし、漢字のほかにカナもあるのだから、「本字」(漢字)を知らないときはカナで書いた。かえつて中國人のほうが、ヘンな字をたくさん製造している。たとえば、方言をあらわす文字など、ずいぶんヘンなのがある——廣東語で「ない」の意味をあらわす「モウ」という語には、「有」の字の中の二本の棒を取つてしまつて「冇」と書く。また、化學元素のような新しい名まえをあらわす文字も、日本人から見るとずいぶんおかしい。たとえば「鐳」と書くと

「レイ」と發音して、ラジウムのことである。

日本の和字すなわち和製漢字は、數がすくないが、和製漢語すなわち「漢語まがい」のものは實にたくさんある。たとえば學校の中だけについていつても、「門番・小使・手洗・便所・控室・受付・本箱・書類・建物・屋根」など、みなメイド・イン・ジャパンの漢語である。「手洗・便所」などは中國人にもよくわかるし、「門番・小使・控室・本箱・建物」などもどうにかわかるが、「受付・書類・屋根」などはすこし誤解されるかもしれない。しかし「校長・教員・職員」をはじめ、學科目などはたいてい日本と共通である——ただ「教頭」というのは、中國ではむかしの武術師範のことだから、教頭先生にはお氣のどくだ。

日本人は和製漢語になれてしまつて、ほんとの漢語との差別が意識されないまでになつている。たとえば「電報爲替」というときに、「電報」はほんものの漢語で「爲替」は和製漢語だ——などと考える人はまずないだろう。日常生活にはそれでもかまわないが、ただ學科として の漢文を學ぶときには、もつとこまかい神經をはたらかせねばならない。それにはまず漢語の成りたちを考えてみることが必要だ。

漢語といつても、長いのやみじかいのがあつて、いちばんみじかいのは、たつた一字の語で

ある。たとえば「天」「地」「人」のような名詞から、「有する」「說く」「與う」などの動詞、そのほかいろいろの語があり、音讀するのもあれば訓讀するのもある。漢語には音で讀むのが多いけれども、音で讀まないから漢語でないとはいえない。たとえば「爲人」と書いて、日本語では「人となり」(性格)とか「人のために」あるいは「人の……となる」などと、意味によつていろいろに讀みわけ、どの場あいも訓で讀むけれども、これはやはり「爲」「人」という二つの漢語の組みあわさつたものと見ることができる(「人となり」と讀むときには、「爲人」の二字で一つの漢語と見るべきである)。要するに、漢文の文章を形づくる一語一語が漢語である。

しかし漢語の中で多數を占めるのは、やはり「天下」とか「國家」のように漢字二字でできた語である。日本ではこれを熟語といい、中國では「成語」などというが、語原的に見れば「複合詞」であり、また「連語」とよぶこともできる。

一七——中國の連語と日本の漢語　日本の漢語の中にも、「天下」や「國家」のように、中國と共通のものが多く、共通でない「門番」や「本箱」、「受付」や「書類」も、どうにか意味の理解されることは前にのべた。しかし、英語とフランス語ではおなじ綴りで書いても意味が

ちがうように——たとえばフランス語で phrase と書けば、英語なら sentence を意味するように——意味のズレは、どこの國の言語にもある。いや、おなじ國の言語でも、時代がちがえば語の意味が多少ともちがつてくることが多いのだ。たとえば、現代の日本人は、「いさぎよい」といえば「キツパリしている」「あきらめがいい」などの意味に使うが、むかしは「いさぎよき庭」とか「いさぎよき雲」などと、客觀的な清らかさの意味に使つた時代があつた。

これまで日本で出た漢和字典は、そういう微妙な意味のちがい——ニユアンスというもの——にあまり注意していない。中國の連語と日本製の漢語をいつしよにして、おなじ見だし字のところにならべている。たとえば、「見」という字のところを見ると、まず(一)ケン(二)ケン・ゲンと字音を示し、ついでに漢詩を作る人のための古典的發音記號(反切とか平仄というもの)を示している。それから、(一)に屬する意味として「見る」「…られる」「現に」などを示し、(二)に屬する意味として「あらわれる」「あらわす」などを示して、それぞれ中國の古典に出た用例をみじかく引用している。字引きによつては、漢字のくずしかた(草書)や、日本人の名まえに使われる場あいの特別な讀みかた(名乘り)——たとえば「見」をアキとかチカなどと讀むこと——まで示している。

ここまでは親切なようであるが、さてそのつぎには、二字の連語・三字の連語・四字の連語といつた順で、まつたく機械的に漢語がならべられている。中には和製漢語に「國(語)」とか「邦(語)」などと、ことわり書きを入れている字引きもあるが、そこまで親切でないのもある。だから學習者は、ウツカリすると中國の連語と日本の漢語の見さかいがつかなくなつてしまう。「見本」は日本の漢語で、「見習」は中國の連語だ、などの區別もむつかしい。「見當」などは、ケントウと音讀しているのに、これはほんものの漢語ではなく、そうかと思うと、「見說」(「見るならく」と讀んでいる)などは、訓讀していながらチヤンとした中國の連語である。

「どうせみな國語になつてるんだから、そんな區別はどうだつていいじやないか」という人があるかもしれない。しかし、これはどうだつていいことではないのだ。日本人が漢字の正しい使いかたを知らず、無意識に當て字を書いているのは、こういうところにあまり注意しなかつたからである。だから「見世物」とか、「仲見世」などと平氣で當て字を書く。いちばんヒドいのは、日本の芝居や歌の題名である。たとえば「色彩間苅豆」と書いて「いろもよう、ちよつと、かりまめ」と讀ませるなど、日本人でさえ「ふざけるない!」といいたいところだか

ら、外國人にはそれこそ見當もつかないだろう。

「漢字は日本の文字も同様だから、自由に使つていい」とはいうものの、「亂雜に使つてもいい」という法はないはずである。

一八——漢文調の日本文　さきに(一二の項で)のべたように、日本人の書く文章は明治から大正を經て昭和になつても、あいかわらず漢文調のものが多く、有名な文學者で、しかも三十いくつで死んだ人のにさえそれがあつた。それでも、明治時代の文筆家はまだ漢文の教養があつたから、漢語の使いかたにしても、あまり出たらめなことはやつていない。ところが、大正九年から新聞の記事も口語體になり、一方また人文科學・社會科學・自然科學の書物がたくさん飜譯されたことも手つだつて、日本の現代文には明治の文筆家が見たら目を白黑させるような、ギクシャクしたものや、ガタピシしたものがあらわれてきた。たとえば——

自然科學は經驗を沒價値的普遍化の立場から發展構成して生ずる認識の系統であるが、其目的を完全に果す爲めには感覺的要素を排除し其代りに計量的概念の組織を置くことを要する。(ある科學概論から)

我々の認識にとつて規範的意識は依然として、我々がその緣を攝むに過ぎない一の理想である。人の

思惟は、經驗的科學として、與へられた個體が因果的に聯關し價値的に規定されてゐるのを理解するか、或は哲學として、絕對的評價の自明な原理を經驗それ自身によつて導かれて省察するか何れかをなし得るに過ぎない。(ある哲學書の譯文)

——とういう文章になると、いくら漢和字典を引つぱつたところで「處置なし」である。讀者は頭の中で、著者が頭に考えていることを想像し、あるいは譯者が取つくんだ外國語の原文を連想しながら、これらの「何何的何何」を何何的に何何するほかはないのだ。

この種の文章は、もはや漢文調とばかりはいえない。なるほど漢語はかなり多く使われているが、その漢語の意味がもはやズレてきている。そのうえに、歐文直譯の新漢語、たとえば「沒價値的」「普遍化」「規範的」などや、歐文的ないいまわし、たとえば「認識の系統」「概念の組織を置く」「與へられた個體」「經驗それ自身」などが、つぎからつぎにあらわれる。これはもう漢文的というよりは、漢文の原理を利用して新語を作り、それを歐文脈の中にはめこんだ、一種の新しい書き言葉である。それは口語體のようなそぶりを見せているが、じつは多分に符號的性質をもつもので、どちらかといえば文語體に近い。おしまいが「ある」や「する」で終つているからとて、安心はできない。

このように、ちよつと見たところ口語體のようで、じつはカムフラージュされた一種の文語體——「思想の符號」ともいえるもの——が現代日本の書き言葉の代表的な文體の一つになつている。學術的および評論的な文章には、これがいまなお多數を占め、いわゆる「かたい」文章として、小說や隨筆のような「やわらかい」文章と區別される。この種の「かたい」文章は、よほどヒイキ目に見ても「文語口語混合體」の程度であるにもかかわらず、世間が「ある」や「する」にだまされて、これを口語體の中に入れかねないところに問題がある。こんなものを口語體として承認していたら、日本の書き言葉はいつまでたつても改善される時はあるまい。

一九——**本格的な漢文**　「漢文體・漢文口調の言語・文章の特質を理解し、それを國語の効果的な使用に役だてる」という文部省案の目標は、逆說的でなかなか味があるが、現代の漢文調の文章の特質は前にのべたとおりで、それは國語の新しい文體の一種であるから、國語の現代文として學習すべきものである。漢文はただ、そういう文章に發生の原理をあたえたに過ぎないし、しかもこれには歐文脈という役者も一枚加わつているのであるから、漢文ばかりが責任をとるわけにはいかない。

なお、このほかに漢文直譯のいわゆる「書きくだし文」があり、明治時代の日本文には、漢文を飜譯したわけでもないのに、ほとんど漢文の書きくだしと一致するものも多かつた——たとえば「教育勅語」の文體などがそれである。しかし、書きくだし文、あるいはそれに類するものは、原形のままの漢文を學習した人には自然に理解されるものであるから、特に書きくだし文だけを先に學習する必要はない。必要がないばかりか、それはかえつて現代國語の書き言葉を亂すことにもなる。ただし、國語の中によく見かける漢文からの引用文は別で、それらは原形の漢文を中だちにしなくても、國語自體の特殊な文體として學べばよい。

われわれはもうこのあたりで、本格的な漢文の正體をあきらかにし、それを學習する方針をたてなくてはならない。いままで「漢語まがい」のものや「漢文まがい」のものについてあまりにも長く講釋しすぎたようでもあるが、じつは日本人としてこれくらいの知識は最低限度のものであつて、これだけのことさえ理解していないようでは、漢文をやつてもその特質がよくわからないで、かえつて國語のため害になるであろう。

さて、日本の高等學校程度の學生ならば、いままでに普通の日本文・日本語に譯された中國の文章・漢文調の「かたい」文章・古典的漢文の書きくだし、等等を、多かれすくなかれ讀ん

できているであろうが、それらは「漢文まがい」のものである。本格的な漢文學習の資料としては、つぎにかかげる文部省案が一つの參考になる——

(甲)漢民族によつて作られたもの

一　經書(四書・五經など)
二　史書(二十四史・戰國策・資治通鑑・十八史略など)
三　子書(莊子・荀子・韓非子・說苑など)
四　名家の散文(唐宋八家文・やさしい駢文など)
五　傳奇小說(唐ごろからの文語體の小說小話)
六　その他の散文(蒙求・小學・近思錄・日記など)
七　古今の有名な詩

(乙)日本人によつて作られたもの

一　史書(日本書紀・大日本史・近古史談など)
二　名家の文章
三　その他の散文(愼思錄・言志錄など)

四　漢詩
五　漢字ばかりで書かれたもの(古事記・風土記・吾妻鏡・明月記・往來ものなど)

——この表は部分的に增減すべき點もあるが、大體適當なものと思われる。「日本人によつて作られたもの」も、それが漢文の法則に從つているならば當然漢文の中に入れるべきであつて、「日本人の書いた漢文は國文だ」などというのは論理に合わない。實際において、なかなかすぐれた作品もあるのだから、なおさらである。また、「シナ時文」といわれてきたものも、じつは新しい時代の漢文に過ぎないのだから、これも適當に加えなければならない(高等學校の時間數ではそこまで手がまわりかねるかもしれないが、とにかく文部省のこの案に出ていないのは、理論的には缺點である)。

二〇——過去の教科書　江戸時代には、そのころようやく盛んになつた國學や、わずかばかりの蘭學もありはしたが、日本人の學問の大部分は漢學であつた。そこで漢文漢詩の古典を讀むことはもちろん、作ることまでも要求された。その傳統は明治の開國以後にも持ち續けられ、文章はカナまじりで書きながらも、單語の多くは純粹の漢語であり、したがつて調子は漢

文調であつた。森鷗外や夏目漱石など、明治文化の中に育つた人たちが、日本文學や西洋文學の教養のほかに、漢文に深く通じていたからとてすこしも不自然ではない。

大正から昭和にかけての日本の中學校や高等學校(舊制)の教科書は、まだ江戸時代のおもかげを多分に殘していた。それは、精神的には儒教道德を中心にし、それにいわゆる日本主義的・武士道的なものを加え、また技術的には漢文・漢詩、すくなくとも漢文調の書き言葉を身につけることを目標にしていた。舊制中學校五年間の各學年に一冊の漢文教科書を見ると、「天照大神・伊勢神宮・櫻花國・聖德太子・楠正成・豐太閤・二宮尊德・乃木將軍」などが、「孔子・孟子・司馬溫公・文天祥」などとならんで卷一や卷二にはいつている。「二重橋・明治神宮・清廉呂忠節・元寇・肉彈三勇士」などの題名を見ると、これでは「修身」「國民道德」科の兄弟分と考えられてもしかたがなさそうである。

舊制中學でも四・五年になると、日本人の漢文のほかに中國の哲學的・文學的古典から多くの文例が取りいれられていた。しかし、その編集方法はたいてい精神主義的であり、漢文そのものの言語學的本質などは考慮されていなかつた。思想的な原文も多くは儒教的・道學的であり、文學的な原文があつてもあまりにも古風で、文人趣味的であつたことは否定できない。

このように編集された漢文教科書は、特殊語學の教科書としてはまつたく無價値であるか、あるいはほとんど効果がない。それはあまりにも無組織であり、非科學的だからである。學習者の自由にえらぶ修身あるいは倫理の副讀本としても、この種のものは問題になるであろうが、もし必修的な漢文の教科書として、このようなものがそのまま「復活」することは、たとえ時勢がどんなに變化してもこまつたものである。しかも過去の中等學校の漢文讀本は、全部この調子のものであつたといつてもよい。——それには文部省の檢定基準がモノをいつたからで、編集者の責任とばかりはいえないけれども。

舊制の高等學校になると、唐・宋八家文その他、中學の漢文に輪をかけて古典的なものを教え、また「四書」その他のマル本も講讀させたから、道理からいえば舊制大學卒業生は、中國文學專攻でない人も漢文の實力があつてよいはずである。ところが實際は、なにを習つたのか、いつこう要領を得なかつたというのが大部分の人たちの告白である。——もつとも、舊制の高等學校では漢文と限らず、ドイツ語でもフランス語でも滿足におぼえてはいなかつたのだから、かまわないようなものではあるが。それにしても、漢文の先生が東洋文化の指導者氣どりで、アゴヒゲなんかをしごいていて、じぶんの教える學科目の特殊語學的性質を深く考えよ

うとしなかつたのは、いまから考えるとまつたくおかしい。

だから、「漢學やシナ學のふるわないのは、漢文の教えかたがわるいからだ」という議論も出た。もちろん、根本の原因はそんなところにはないのだから、責められた漢文の先生たちはすこし氣のどくであつた。

二一——現在の教科書　戰時中の舊制高等學校では、漢文その他東洋古典に屬する科目は「道義科」としてあつかわれたこともあつたので、ますます修身・倫理的な色彩が濃くなつていたが、敗戰後の民主化によつて日本の漢文教育はかなり大幅に變化した——といつても現在の漢文教科書は、本質的に見てまだまだ中途半ばなものである。

現在のところ、中學校ではただ國語の一部分として「漢文調」の文章や中國原典の飜譯をすこし取りいれているだけで、特に「漢文」という題名の教科書は高等學校の各學年に一冊ずつ使われているに過ぎない。それらは檢定制度のもとに、かなりこまかい基準が定められ、「平和の精神・眞理と正義の尊重・個人の價値の尊重・勤勞と責任の重視・自主的精神の養成など、日本の教育目的と一致すること」「特定の政黨や宗派にかたよつたり、あるいはそれらを非難

したところのないこと」「日本の文化、ことに言語・文學に影響を與えた點や、日本文化の源流を理解させ、自然や人生についての鑑賞眼を養わせること」などの「絶對條件」のほかに、「必要條件」として、「教材は各時代の道德的・政治的・社會的なもので、國語學習の補助になり、文學的で、しかも時代や作者を代表するようなもの」「內容は現代の進歩に應じ、國語整理の方針にもかない、生徒の興味や個人差・男女兩用の場あい・上級學校との關連などが考えられていること」「配列は難易の順に、また季節や他の教科、特に國語・東洋史との關連が考えられていること」などが要求されている。過去の教科書は漢文を作ることをも要求していたが、その意味の「復文」は新しい基準では重くあつかわないように定められ、そのかわり「序說」や「注」「研究問題」「參考資料」「さし繪・寫眞・地圖」などによつて生徒の理解を助けることが望まれている。

この檢定基準は常識的なもので、大體において適當であるが、それでも教科書を編集する人の立ち場としてはいろいろな困難があるにちがいない。たとえば儒教的・道德的な文章をどの程度に取りいれるか、などは內容的に困難な問題である。また、漢文の本質とその國語國文學への影響を合わせて說くことは、資料の點でも相當に困難がある。

現在わたしの手もとにある新制度の高等學校漢文教科書(各三册)を見ると、Aの教科書は三册とも、まず漢文の性質と漢文學習の目的・方法(同文)をかかげ、つぎに中國風俗への手がかり、それから古代の詩・故事熟語・書簡・論說・逸話(以上一年)、古代人の社會批評、唐詩・日本漢詩・莊子などの寓言・歷代の隨筆評論・笑話(以上二年)、近世の藝術論、詩話、唐・宋の詞、六朝の小說、宋・明の語錄、近代人の論文、元曲の文例(以上三年)を取りいれ、附錄に「在來の訓讀によつて誤られやすい用語例」(同文)をかかげている。

Bの教科書は「俗諺・故事、地志(中國年中行事)、唐詩、歷代筆記小說、日本隨筆」(以上一年)、「唐・宋の詩、六朝・唐・宋の文、史傳(史記・漢書)、傳奇小說、論語・孟子」(以上二年)、「詩經、漢・唐の詩、傳奇小說、諸子(老・莊・荀・韓非)、日本漢文(風土記・本朝文粹など)」(以上三年)となつており、卷末にはそれぞれ漢字の特殊な讀みかたの表が出ている。

Cの教科書は各册それぞれの「序說」のあと、故事熟語入りの文例、和漢歷代の文章、論語・大學の一部(以上一年)、中國歷代の文章、詩(五言絕句)、孟子・中庸の一部(以上二年)、歷代の文と詩、日本漢文(記・紀、風土記、萬葉、古語拾遺、本朝文粹、東鑑)、墨子・莊子・荀子・韓非子、說林(以上三年)となつており、卷末に語注がついている。

二二——教科書の批判　以上三種のほかにもなお一、二の漢文教科書が出ているが、その組織を見ると、嚴密に歷史的でもなければ樣式別でもなく、ただ大體の見當で材料を三つに分け、三册にしたものといつてよい。中にはかなり文學讀本的に組織だてようとしたものもあるが、それも三年という學年制度にあてはめる必要から、せつかくの組織をこわされている。

文學的にさえそうであるから、言語的に特殊語學としての漢文を、難易の順に、あるいは體系にしたがつて、教えようと試みたものはまつたくない。それどころか、編集者の漢文にたいする見かたそのものが、言語的に徹底していない場あいが多い。

日本人のいう漢文が、漢字ばかりの原文と、日本文による訓讀との兩面をもつことはいうまでもないが、漢文ばかりの原文はなにも「中國の原文」と限つたことはなく、日本人の書いたものでも、西洋の宣教師の書いたものでもかまわない道理である。

「外國語科のうち中國語としては中國の現代文(!)が取りあつかわれる」とか、「漢文は廣い意味では現代文(時文や白話文)をもふくめた中國語のすべてをさす」などという考えはまちがつている。また、「狹い意味ではわが古典における特殊な文章の一體」という見かたも適當でない。漢文の原理はそのように現代とか古代とか、わが國とか中國とかいうところにはない

ことが、この本の讀者にはもうわかつているはずである。

前にあげたCの教科書では、漢文の定義を「一、訓讀されたシナの文語文。二、日本人が作つた文語體の華文」としている。これは西洋の百科事典や華文學の書物に出ている常識的な說明であるが、このうち一に、「ただし原文をともなう」とし、二を「日本人」と限らず西洋人でもよいことにすれば、この定義はまず漢文の本質をつかんでいるといえよう。しかし、眞の意味の漢文はそういう小分けをしなくても、「符號語としての華文（およびその同類）」といえば、それでたくさんである。現在漢文教師の職にある人が、「漢文とは日本人獨得の……」なんとかかんとかとヘンにこねまわすことは、かえつてヤブヘビの結果になるであろう。

なお、新しい試みとして、現代の國語の用法とくいちがつた訓讀のしかたを改めて平易にした教科書もあるが、それも改良された訓讀が一貫して口語體であればともかく、そうでなくてただ部分的に「漢學者ばりの古くさいところ」を多少改めた程度のものならば、それは中途半ぱなもので、現代の國語にとつてあまり役にたたないばかりか、現代以前の文獻に出てくる文句を理解するのに、かえつてさまたげとなるであろう。たとえば「不入虎穴、不得虎子」を、「トラの穴にはいらないとトラの子は得られない」と、完全な口語で讀ませれば、それは新し

い訓讀であり、飜譯としてもそのまま通用するけれども、そこまで行かない中途半ぱな訓讀はかえつて二重の手まになる。

二三——**純粹漢文と古典文學**　修身・國民道德や文學的修練を目的としない純粹の漢文は、「符號語の體系」であり、一種の暗號組織であるから、完全に特殊語學として學ぶことができる。初步的な文例から順を追うて進み、あらゆる場あいをふくめたテキストを卒業すれば、ちようど無電技師やタイピストとおなじように——もちろん、うまい人とヘタな人の差はあるにしても——一人まえになることができる。

むかしから中國の兒童は、意味もなにもわからないままに、ちようど坊さんがお經を讀むように漢文をおぼえさせられた。それがかれらの大きくなつてからの、作文や作詩の形式を規定したのである。西洋から來た宣教師はまた、まるで代數式でも解くように漢文と取つくんで、その暗號組織の要領を身につけたのであつた。

三四十年前までの中國では、文章といえば文語體（漢文）のことであつたから、中國人は各自の日常生活に使う話し言葉とは材料も組織も大幅にちがう文語體をおぼえるほかなかつた。ち

かごろになつても、中國の學校では中學以上に文語體の「國文」を教えてきたから、たとえ文人趣味の家庭に育たなかつた人でも、およそ知識人はみな二種類の言語をもつているわけである。また大衆にしても、長いあいだの民族生活によつて傳えられた文語的なものを、相當に多く身につけている。だから中國人の場あいには、話し言葉と平行して漢文をも、外國人とちがつてわりと樂におぼえることができる。

西洋人は、いわば二つの言語を、新規に學ばねばならない。ただ日本人は、漢文というものを自國の古典や書き言葉の一部としてもつてきた(たとえば「候文」)——また、藝能はもとより日常の話し言葉の中にまで漢文的なものが入りこんでいるので、たとえ母國語として中國語をもたないまでも、中國人とはまたちがつた意味で、漢文をわりと樂に學ぶことができる。

ところで、およそ學ぶということには、理論ばかりでなく、實用と興味が必要であり、そのうえにおぼえやすくできていなければならない。日本人が漢文の內容によつて精神修養をし、あるいは詩を作り、詩吟をうなつたのもその例であるし、現代の漢文教科書が古代・近代の文學作品や故事逸話を取りいれて、おもしろく學習させようとしているのも、單に傳統の尊重ばかりでなく、學習上の條件を考えているからである。

そのことはよいとして、さて特殊語學と古典文學がそのように掛けあわされた場あい、兩方ともうまく目的を達するのはなかなか困難なことである。漢文教科書の理想はそれを實現することにあるのだし、そういうすぐれた教科書のあらわれることは望ましい。しかし、ゆつくり時間をかけていられない場あいや、特に漢文の純粹文學的な面、あるいは古典文學的な面だけを組織的におぼえたい場あいには、それぞれ別の方法によることも考えられる。

この「漢文の學び方」では、これからあとの幾項目かを、おもに特殊語學としての漢文の研究にあて、古典文學的および近代の應用的な面はそのあとで取りあげることにした。

二四——訓讀は幅を廣く 日本の歷史によれば、二八四年に天皇の子が百濟(クダラ)の人阿直岐(アチキ)について學び、二八五年には王仁(ワニ)が「論語」と「千字文」を傳えたとある。その事實はともかくとして、漢から六朝にかけて、朝鮮を經て日本に傳わつた漢字音は、いわゆる吳音(南方音)であり、のちに隋・唐のみやこ長安から傳わつたのが漢音(北方音)であるといわれる。しかし、南方音も北方音も、外國語の音であるから、傳わつたとたんにもう日本人の口に合うように變化させられたことは、カールグレン(スエーデンのシナ學者)の斷定したとおりである。近代の外來

語を見ても、たとえば英語の stick は日本ではじめから「ステツキ」で、けつしてはじめは「ステイツク」といつて、のちに「ステツキ」に變化したのではない。漢字の發音も、はじめ中國の音で讀んでいて途中から變化したのではなく、變化した程度はせいぜい歴史ガナと發音ガナの差ぐらいのものであろう。

文章にしてもおなじことで、現代の日本人がヨーロッパ語を見て、たとえば What is this? は「これ である なに?」だから「これはなにであるか?」の意味に解し、Que sais-je? は「なに 知る わたし?」だから「わたしはなにを知つているか?」の意味に解するように、古代の日本人もまた、朝鮮人から漢字の意味を教えられると、たとえば「我讀書」は「われ よむ ふみ」だから「われはふみをよむ」というふうに、もうすでに頭の中で訓讀していたにちがいない。訓讀の符號の完成して文献に殘つているのがもつとあとの時代だからとて、それまでは音讀していたと考えるのは理由にならないことで、それは不自然である。外來語はもともとそんなふうにあつかわれるものではない。

訓讀は最も機械的な一種の飜譯法として、古代からもうあつた。(中國人が古文を讀むときにも一種の訓讀をやつているのだ!)それが日本ではだんだん訓練をかさねて、統一した讀みかたをす

るようになり、「ヲコト點」といつて、漢字のまわりに點をつけて讀みかたの符號にした。平安朝時代の博士家の寫本などにそれが殘つているが、やがてカナが發明されると、とんどはカナのほうを利用するようになつて、「ヲコト點」がすくなくなつた。一方ではまた、「一二三」「上中下」や「レ」などの符號が、返り讀みのために使われ、鎌倉から室町時代になると、ひととおりの組織ができあがつた。「一二三」「上中下」(ときには「甲乙丙」「天地人」まである)や「レ」(レ點またはカリガネ點という——むかしはガンの飛ぶようにYと書いたからそういう)を「返り點」といい、漢字の左下につける。漢字の右下につけたカナを「送りガナ」(または「捨てガナ」「添えガナ」)とよび、これが「ヲコト」點にかわつて助詞(テニヲハ)を示し、また動詞・形容詞・副詞その他の語尾をも示した。送りガナはかなり荒らつぽくつける人もあるので、國語の文法から見ると無理なことが多い。

西洋語のコンマにあたる「、」を讀點(とう)とよび、ピリオッドにあたる「。」を句點(く)という。「句讀訓點をつけよ」という問題が出ると、。や、のほかに返り點と送りガナを全部つけねばならないからヤツカイである。このほかにも並列點(い)(・)といつて、名まえを列擧するときの點や、人名地名に傍線や中線をひくやりかたもあるが、それらは普通には「句讀訓點」のほかである。

江戸時代の儒學者は「伊藤點」とか「後藤點」などといつて、(そのほかたくさん「何何點」というのがあり、まるでおキユウのすえかたみたいだ！)それぞれ流派をたてたが、これらはつまり飜譯方法論のちがいである。その中で佐藤一齋の「一齋點」などは、音讀が多すぎるので亂暴だと非難された。しかし、現代のわれわれが「後藤點」とか「佐藤點」などというものにとらわれるのはバカげたことだ。われわれはただ漢文の本質をよく研究して、正しいと思う讀みかたをすればよい。つまり訓讀に幅をもたせることである。しかし、すでに固定してしまつた讀みかたは一應そのまま保存して、古い文獻(ことに古典からの引用など)を解くときの手助けにすることが必要である。

二五——漢文音讀論の批判　王仁(ワニ)先生は朝鮮人だつたから、漢文を朝鮮語の語順になおして理解していたであろう。ウジノワキイラツコは日本人だから、日本語の語順になおして漢文を理解したにちがいない。マテオ・リツチはイタリー人だから、イタリー語かラテン語の語順になおして漢文の意味を知つたであろう。それでよいのである。外國と中國は(日本も外國だ！)言語系統がちがうのだから、いくら「おれは中國人とおなじだ」と威ばつてみたところで、要

するに飜譯作業の速度がすこしはやいだけのことだ。中國の知識人でさえ、漢文を讀むときには「頭の中で(話し言葉に)飜譯の手數を要する」といつているではないか。

中國人がペラペラと話し言葉をシヤベリながら、途中で文語體の故事熟語を引用するときには、話しのリズムが變わつて、ゆつくりと、一字一字をおなじ比重で發音する。そこには話し言葉特有の、輕聲(輕いアクセント)の現象が見られない。このことは、書き言葉の文語體としての漢文が、かれら中國人の話し言葉とは、まつたく別の體系の言語であることを證明している。

まつたく別の體系の言語であるから、語彙や語法のちがうのは當然で、たとえば「賢賢易色」(賢を賢として色に易(か)う—「論語」)などは、話し言葉ではとてもこの長さではいえないし、「問孝於我」(孝をわれに問う—同上)なども、話し言葉ではこの語順でいうことはできない。

これはなにを意味するか？——漢文を中國の音で棒讀みしても、中國人にさえチンプンカンプンなのだ。ただ本人がいい氣になつているだけで、はたの者には無意味である。あの魯迅(ろじん)の小說に出てくる孔乙己(いつき)先生のまねをするようなものだ。

ただ、詩の場あいだけはすこし事情がちがう。詩の言葉の音や調子、ことにリズムの美しさ

を知るためには、音讀するのがなによりである。ただし、それにはまずその國の言語の實地に練達していることが必要で、驅けだしの人が字引きを引いて讀むのでは問題にならない。まして外國の古代の詩の研究は、いつたい、一般人の教養として要求されることであろうか、それとも少數の專門家のしごとなのか？　——もちろん、ごく少數の專門家がそれをやればたくさんである。その人たちこそは、原文をそらにいえるくらいに「棒讀み」して、りつぱな飜譯を提供する義務があろう。それもできないで、ただ「粒讀み」をしながら——「棒讀み」とまで行かないのに——一般人にまでアホダラ經のお相伴をさせるのは罪なことである。

ついでながら、詩の場あいにも日本の漢字音で讀めば——もともと日本の字音は中國音の影であるから——リズムの鑑賞には役にたつ。ただアクセント(聲調)だけは別であるが、アクセントの點になると、中國人の發音からして方言によつて大きな差があり、そのうえ中國詩のアクセントそのものが多分に人工的な、紙の上のものであるから、どこまで自然さを主張できるか怪しいものである。

日本の奈良・平安時代のいわゆる「讀音」では、なるほど一應は漢字の原音(らしいもの)を口にだしたであろうが、すぐその口の下で日本語に飜譯していたらしい。つまり音訓兩讀法

である。しかもその「音」は、けつして中國語そのままの音ではなくて、日本化された漢字音(今日われわれのいう吳音・漢音の類)であつたことは、言語學者の斷定したとおりである。

漢文音讀論を大いにとなえたのは德川中期の荻生ソライ(名まで中國風に物茂卿と改めてよろこんでいた人)であつたが、かれは「けつして和訓廻環の讀をなさず」とタンカを切りながら、琉球から「六諭衍義(えん)」という修身書がはいつてくると、事もあろうに白話體の原文に返り點送りガナをつけ、「日本廣しといえども、これの讀めるのはわしばかりだ」と得意になつていた。そのかれが中國人の僧悅峯に會つたときなど、「わたくしには中國の話し言葉はチイチイパツパで、とんとわかりません」と、筆談で(!)あやまつているしまつである。たいへんな音讀論者があつたものだ。

二六——漢文の文法　漢文は「符號語」だから、その法則をつかみさえすれば、どういう讀みかたをしようと結果においてはあまり差がない。もともと外國語の書物を正しく發音しながら讀むことは容易でなく、日本であれだけ英語がはやつても英米の書物を正しく「直讀」できる人はそうザラにはいない。まして、音そのもののほかにアクセントの複雜な中國の字音を、

しかも語學學習の時期を過ぎた人たちがヘタにやつてみたところで、そう簡單にはモノにならない。ただ字音だけでもそうであるが、それに話し言葉という、さらに複雜なものが一枚加われば、その困難は幾倍するかわからない。わたしなども、十六歳のとき中國に渡つてから、三十年近くも中國語を學んでいながら、まだわからないことのほうが多い。けつして食わずぎらいからこんなことをいつているのではないのだ。

なにごとにせよ、それをメシの種にしたり、それに夢中になつている人のいうようには、事は簡單でないものだ。各自の年の若さや個性、才能、それに社會の要求などをよく考えたうえで取りかかるがよい。半可通をふりまわして得意になりたい人は別として、どこまでも事の眞相をつきとめようとする人には、うつかりすすめられないのが漢文であり、中國語である。

だが、もはや漢文に相當深入りしている人は、なんとかして能率をあげるようにしなければならない。そこで、音讀・訓讀のつぎに問題になる文法のことを取りあげよう。漢文は「符號語」的性質のものではあるが、それを表現する道具は（幸か不幸か？）、速記の記號や暗號數字ではなくて、中國の話し言葉や口語體の文章を書きあらわすのとおなじ漢字である。その點、漢文は軍隊の暗號や商業用のコード（電報略號）ほどには壓縮されておらず、暗號的性質とと

もに言語的性質をも相當にもつている。——もともと言語は記號を用いて書かれるのだから、幅はずいぶんちがうけれども、漢文も暗號も、ただ記號の程度の差ということができよう。

漢文という記號の體系は、まだまだ文法規則が全然適用できないというところまでは行つていない。しかし、だからといつて話し言葉の規則がそのまま適用されるものではもちろんない。書き言葉の中でも高度に洗練され、單純化されたのが漢文であるから、時には話し言葉の中のある要素に相當するものが全然なくなつていることもある。話し言葉體の文章が野道だとすれば、漢文は石だたみ道であり、時には飛び石でしかないこともある。

もともと中國の言語は、一音節を單語の根本的な單位とし、ほとんど語尾變化がなく、バラバラに分析することのできるもので、いわゆる單音節的（monosyllabic）分析的（analytic）な言語である。それと平行した漢文もまた、その性質を持つているばかりか、中國語の場あいよりはもつと極端に單音節的で、分析的である。たとえば、「わたしたちの家にはめし使いはいない」という文句を、中國語では「我們家裡沒有底下人」というが、漢文では「家無僕」と、ただの三語で表現することができる。「わたしたちの家には」の「には」にあたる「裡」などは、漢文では必要がない。また、「家」といえばこの場あい「じぶんの家」をさすという了解

が成り立つので、「わたしの」と、ととわる必要はない。「孔子が周に行つた」という文句なども、中國語では「孔先生到周國去」といわねばならないが、漢文ではただ「孔子適(ゆく)周」とすればそれでよい。この「簡單」な、符號語の規則を學ぶのが、漢文の文法である。

二七——主體語 (subjectives) 文法は論理學ではない。文法は文の體系それ自體にふくまれた法則である。文の體系とは、ある同性質の書き言葉の集まりで、漢文ももちろんその一種である。

漢文の文章はもともと簡潔であるが、それがさらに省略されると、ただの一字か二字で一つの文章になることも多い。しかし省略のない場あいや、省略があつても、推測できる場あいには、一つの文の主體がなんであるかはすぐにわかる。たとえば「孔子適(ゆく)周」という文では、もちろん「孔子」が主體である。この文が長くなつて、「孔子適周、將問禮於老子」などとなつても、「孔子」という語はやはりこの文の主體である。文の主體になる語を主體語(subjectives)という。

主體語として使われる單語は、これまでの文法の書物で「代名詞」といわれてきたものと、

「名詞」および「名詞相當語」である。漢文では名詞も代名詞もただ發音と意味がちがうだけで、形の上の區別はほとんどない。また、名詞を個有名詞・普通名詞・抽象名詞・數量名詞などと分けるのがこれまでの習わしであるが、漢文では英語のように個有名詞を大文字で書くこともなく、普通名詞の複數にSをつけることもない。抽象名詞も使いかたは普通名詞とおなじである。數量名詞などは、物の單位をあらわす特殊な單語として、暗記すれば便利なこともあるが、それは語彙の問題であつて語法というほどのことはない。だから、主體語をさらに小分けして說明するのは、ただ學習の便利のためであつて、本質的な意味はすくないと考えてよい。

まず、比較的すくない代名詞をおぼえよう。代名詞はこれまで「人稱代名詞・指示代名詞・疑問代名詞・關係代名詞」などに分類されているから、參考する便利のため、その順でのべよう。まず人稱代名詞の例をあげると——

君意若何。(あなたのお考えはどうです?)

僕有同感也。(わたしも同感ですね。)

——日本語で毎日「きみ」とか「ぼく」といつている、その「君」「僕」が漢文でもそのまま

使われる。ただし、漢文の「君」「僕」は日本語の「あなた」「わたくし」ぐらいのていねいな言いかたである。

彼何人哉。(あの人はだれですか?)

——日本語では「彼」といえば男性で、女性なら「彼女」といつている——「あの人」といえば共通である——が、漢文では男女とも「彼」であらわせる。なんと簡單ではあるまいか!「僕」(實際には「我」のほうが多く使われる)「君」「彼」というこの三つの形は、多少意味のちがいはあつても、日本人にはすぐにのみこめる。ところが、現代の中國語ではどうなつているかというと——

(漢文)	(華語)
我	我
君	你
彼	他

というふうに、三つに二つまでちがつている。「わたし」を話し言葉で「我」というのは標準語で、山東あたりでは「俺」というし、江蘇では「儂」というのだから、三つが三つちがつ

ているともいえる。中國人だから、あるいは中國語ができるから、漢文はお手のものだと思うのは不合理であることが、この一例によつてもわかる。

二八——代名詞 (その一)

人稱代名詞で漢文に普通用いられるものは——

(一人稱)「我・吾・余・予・僕」など——ほかに「卬・朕・台」などもあるが、これらは古代の書物に見える少數の例である。

(二人稱)「爾・汝(古代には「女」とも書く)」——ほかに「若・戎・而・乃(あとの二つは主格と所有格に限る)・子・君・公・卿」などもある。「夫子・先生」などの身分的な呼びかたをも入れると、二人稱ももつとふえる。

(三人稱)「彼・其(所有格)・之(目的格)」——古代には「夫(彼)・厥(其)」の例もあり、すこし俗な文章には「渠・他・伊」も使われている。

このほか、一人稱の特に身近な場あいの「身・躬・親・自・己」や、「おたがい・全體」をさす「爾我・彼此・吾人・吾屬・衆」、それから「だれ・どれ」という疑問代名詞的な「誰・孰」や、だれと定まらない「人」、「あるひと」と讀ませる「或」、「なにがし・それがし」の「某」も

人稱代名詞の中に入れられないことはない。

人稱代名詞が複數の人をさす場あいには、「—等・—輩・—曹・—儕・—屬」などの接尾詞を加えて「我等・爾等、爾曹・若曹・彼輩・吾儕・吾屬」などとする。——ただし、「而・乃・其・之」はその性質上、これらの接尾詞を加えることができない。

もともと漢文の人稱代名詞は英語などとちがつて、單複數の差別がきびしくない。單數か複數かは前後の關係によつて判斷されるので、わざわざ複數のしるしをつけないことも多い。たとえば——

以吾一日長乎爾（わが一日なんじより長ずるをもつて。「論語」）

この「爾」は「きみたち」の意味で複數であるが、單數の形になつている。なお複數をあらわす特別の方法として、「諸君・諸公・各位」などもあるが、これらは形容詞のついた複合詞であつて、第一次的な代名詞ではない。

第二次的な代名詞にはなお儀禮的な、あるいは身分上の呼びかたがある。さきに一人稱・二人稱の中に出てきた「僕・君・子・公・卿」なども半分は儀禮的で、封建時代のにおいのするものである。儀禮的、つまり社交的な呼びかたには、相手を持ちあげるのと、こちらがへりく

だるのとあつて、「夫子・先生」はもちろん「君・君子・閣下・足下・執事・左右」などや、書簡文に使う「台駕・台端・吾兄」その他はみな尊敬をあらわす二人稱の特別な呼びかた、反對に「僕・臣・走・敝人・學生・弟」などは謙讓の氣もちをあらわす一人稱である。むかしは帝王や諸侯もまたじぶんのことを「寡人・孤」などと呼んだ。「朕」は日本では天皇に限るように思つているが、むかしの中國では身分に關係なく使つた。それを皇帝の自稱ときめたのは秦の始皇帝で、のちの世の人もそれに從つた。

人稱代名詞の「特別稱呼」は、中國や日本のような國にはたくさんあり、文語と口語ではそれぞれちがうのでヤッカイである——もつとも西洋にも Your Excellency（閣下）とか、Your Ladyship（貴婦人の尊稱）などがある。世のなかが平等になるにつれてだんだん合理化されてゆくけれども、中國の文語、ことに書翰文では、三人稱にまで尊敬と謙讓の特別稱呼がまだ使われているから、一應はおぼえなければならない。

練習問題（一）——代名詞をえらびだせ。

一　吾少也賤、故多能鄙事。（「論語」）

二　女爲君子儒、無爲小人儒。（「論語」）
三　夫差、而忘越王之殺而父乎。（「左傳」）
四　彼、丈夫也。我、丈夫也。吾何畏彼哉。（「孟子」）
五　欺他孤兒寡婦、狐媚以取天下。（「晉書」）
六　禍福無不自己求之者。（「孟子」）
七　士爲知己者死、女爲悅己者容。（「史記」）
八　卿曹努力。（「後漢書」）
九　執事以高才盛名作牧於此、蓋亦嘗有以相馬之說告于左右者乎。（蘇軾「上王兵部書」）
一〇　社人敬慕吾兄、擬邀請入社、囑弟介紹。（豐子愷致趙景深函）

二九——**代名詞**（その二）日本語で「コ・ソ・ア・ド」の體系をなしているもの、つまり「これ・それ・あれ・どれ」「こと・そこ・あそこ・どこ」「これら・それら・（あれら）・（どれら）」「この・その・あの・どの」「こんな・そんな・あんな・どんな」などは、ひつくるめて指示代名詞と呼ぶことができる。——このうち、「ド—」の系列はいわゆる疑問代名詞にも所屬する

ことは人稱代名詞の中の「だれ」と同樣であるが、もし「どれ・どの・どんな・どこ」を指示代名詞の中に入れ、さらに、いわゆる疑問代名詞のうち殘る一つの「なに」をも指示代名詞の一種と見なせば、「疑問代名詞」という項目はなくてすむわけである。（「なに」はむしろ名詞とも見られる。）

漢文の指示代名詞（疑問代名詞をふくむ）のうち、手近な「これ」から例をあげて行こう——

（これ）此・之・是・焉・諸

例。此、壯士也。（これは男いつぴきだ。——「史記」）
賢者亦樂此乎。（さとつた人もこれはすきですか。——「孟子」）
今者吾喪我、汝知之乎。（いまわたしはわれを忘れているが、きみこれがわかりますか。——「莊子」）
此之謂大丈夫。（これ「これ」がりつぱな男というものだ。——「孟子」）
是良史也、子善視之。（これはすぐれた歷史家です。よくごらんください。——「左傳」）
人富而仁義附焉。（人は金ができて、規律がこれにともなう。——「史記」）

ほかにも「箇・故・以」などを「これ」と讀むことがあるが、例はすくない。また、「諸」

（これ）は、特別の場あいを除けば「之於……」（これを……）の省略であるから「諸於」とは書かない。——ときには「之」だけで（「於」を省略して）「諸」とおなじ意味をあらわすこともある。

君子求諸己、小人求諸人。（できた人はじぶんをあてにし、バカは人をあてにする。——「論語」）

注諸海……注之江。（これを海にそそぎ、……大川にそそぐ。——「孟子」）

「これら」という複數には、人稱代名詞とおなじように「一輩」をつけて「此輩」（また「斯輩」「若輩」）とすれば、そのままで「これらの人」となる。また「此等」（あるいは「斯等」）「此種」などの下に「人」や「物」をつけてもよい。

つぎに「こと」と讀む代名詞の文字には、「玆・斯・此・是」などがある——

文王既没、文不在玆乎。（文王がなくなつては、文教はここにないのか。——「論語」）

歌於斯、哭於斯。（ここに歌い、ここになげく。——「禮記」）

今又遇難於此。（いままたここで災難にあつた。——「史記」）

今其人在是。（いまその人がここにいる。——「史記」）

漢學者は「是以」を「ここをもつて」「於是」を「ここにおいて」と讀ませ、「由是」は「これによつて」「以是」は「これをもつて」「是故」は「このゆえに」「如是」は「かくのごとし」などと讀みわけているが、「ここにおいて」は一般化しているからよいとして、「ここをもつて」は國語の立ち場から見るとよくない。しかし、こういう形は國語が平易化され、漢文が口語譯されるにつれて自然になくなるであろう。

さて、「この」は代名詞から形容詞になつたものであるが、漢文では「此・玆・斯・是・之」などの字をそう讀む。おなじく「こんな」の意味には「此・斯・是・若」を「かく」と文語讀みし、また「爾・然・若・云」などを「しか」または「しかく」と讀ませている。「くわしい事情」のことを「かくかくしかじか」というのはその名ごりである。明治初年生まれの人が祝辭や弔辭を書くと、シツポに「云爾」（しかいう）の二字をくつつけたがる。

「この・こんな」は純粹の代名詞でないし、すこしややこしいから例は擧げないでおく。

三〇——代名詞（その三）指示代名詞のうち「それ」と「あれ」（近稱・遠稱）の二つの系列は、中國の話し言葉では一つ（「那」）になつているが、漢文でも「彼」だけである。しか

し、「それ・その」に相當する「其」や「これ・この」に使われた「之」が、「それ・あれ」の兩方に共通する幅の廣いはたらきをしていることに注意せねばならない。

彼一時、此一時。（あの時はあの時、この時はこの時。——「孟子」）

在彼無惡、在此無斁。（あちらも氣に入り、こちらも氣に入る。——「詩經」）

彼蒼者天、曷其有極。（あの青い空には、どうしてはてがあろう。——韓愈「祭十二郎文」）

使其知之。（それに知らせる。）

其愚不可及也。（ソノ愚ヤ及ブベカラズ。ああしてバカで通した點はまねができない。——「論語」）

將欲奪之、必固與之。（それを奪おうとするには、しばらく〔それを〕與えねばならない。——「老子」）

學而時習之、不亦樂乎。（學ビテ時ニコレヲ習フ、マタ樂シカラズヤ。——「論語」——ういうときの「之」は形式的なものだから譯しださなくてもよい。）

之子于歸。（あの子はとつぐ。——「詩經」）

疑問代名詞といわれるものは、實は人稱代名詞や指示代名詞にふくめられることを前にのべ

た。「どれ・どこ・どの・どんな」「なに」「だれ」などがその種類であるが、まず「だれ・どれ・なに」の例を擧げよう——

吾誰欺。欺天乎。（わたしはだれをだまそう？　天をだますか。——「論語」）

孰謂子產智。（だれが子產を知惠者だというか。——「孟子」）

是可忍也、孰不可忍也。（これがガマンできるくらいなら、どれだってガマンできないことがあろうか。——「論語」）

非諸侯而何。（大名でなくてなんですか。——「論語」）

「どこ」は「なんのところ」という複合語として「何處」「何許」の形もあるが、普通には「いずく」「いずこ」または「いずれ」と讀んでただ「何」の字あるいは「安」の字を使い、「何在」（どこにあるか）「安至」（どこに行くか）などとする。

「どの」は「なに」（何）「いずれ」（孰）によつてあらわされるが、「どんな」「どんなに（どうして）」は「如何」「若何」「奈何」「何如」「何若」（みな「イカン」と讀む）によつてあらわされる。「どうして」が反語になるときは「イヅクンゾ・ナンゾ」と讀んで、「何・盍・曷・胡・侯・奚・安・焉・惡・烏・巨・詎・鉅・渠・奈・寧・那・庸・怎」などいろいろな字を書くが、こうな

るともう代名詞というよりは副詞である。これらの中には「何爲・曷爲・胡爲・奚爲」（みな「ナンスレゾ」と讀む）のように、二字の複合詞になつて「どうして・なぜ」を意味する反語になるものもある。

この種のものをひろつて行けば、「いつ」「いくつ」など、普通の疑問詞まで取りあげねばなるまいが、そうなるとますます代名詞の性質から遠ざかつてしまう。代名詞としては、ここに擧げただけでも多すぎるくらいである。

三一——代名詞（その四）代名詞にはもう一つ、關係代名詞がある。中國の話し言葉で「花賣り」を「賣花的」というが、文語體（漢文）ではそれが「賣花者」となるように、「者」の使われる場あいは非常に多い——

竊鈎者誅、竊國者侯。（釣り針をぬすむ者は殺され、國をぬすむ者は貴族になる。——「莊子」）

賢者避世。（かしこい人は世をのがれる。——「論語」）

士爲知己者死。（士ハ己レヲ知ル者ノタメニ死ス。——「史記」）

これらの文の中の「者」は英語ならば the man who…に相當するであろう。もう一つ、

that which…に相當するものとして「所」という關係代名詞がある——

己所不欲、勿施於人。（己レノ欲セザルトコロヲ人ニ施スナカレ。——「論語」）

師者所以傳道、授業、解惑者也。（先生というものは「それで」道を傳え、技能を授け、疑問を解く「ところの」ものだ。——韓愈「師說」）

虎無所措其爪。（トラもツメをたてるところがない。——「老子」）

——この最後の例などは、まだ where の意味が殘つている感じで、關係代名詞とも見られるし、名詞と見られないこともない。また、指示代名詞の「其」が「その」の意味に使われて關係代名詞の役をすることもある。

以上で、ひととおり代名詞を終つたから、つぎに漢文の主要な代名詞とシナ語（中國語、華語）のそれを對照してみよう。讀者は漢文と中國語がまつたく語彙のちがつた別系統の言語であり、これを「同日に論ずる」ことは、語學的には不合理で、實用的にも不利益であることを知るであろう。

（漢文）

吾・我・余
汝・爾
彼・伊
己・自・身・躬・親
吾人・吾屬・衆人
誰・孰
此・之・是・焉・諸
此等
玆・斯・此・是
爾・然・若
其・之
彼

（華語）

我
你・您
他・她
自己・親自・親身
我們・咱們・大家・人家
誰
這（個）
這些
這兒
這麼（樣）
那（個）
那（個）・那兒

何
如何・何如
者
所
甚麼・哪兒・怎麼
怎麼（樣）
的
（所）

練習問題（二）——代名詞をマークしながら大體の意味をとれ。

一　以子之矛、陷子之盾、何如？（「韓非子」）
二　人必自侮、而後人侮之。（「孟子」）
三　君子之至於斯也、吾未嘗不得見也。（「論語」）
四　近取諸身、遠取諸物。（「易經」）
五　管仲以其君霸、晏子以其君顯。（「孟子」）
六　不好犯上、而好作亂者、未之有也。（「論語」）
七　寡人以身受命、躬竊憫然。（「戰國策」）
八　孺子可教矣。後五日平明、與我會此。（「史記」）

九　項王見紀信曰、漢王安在。（「史記」）

一〇　事孰爲大。事親爲大。守孰爲大。守身爲大。（「孟子」）

三二——名詞（その種類）英語の文法をおそわつた人は、名詞が、「個有名詞・普通名詞・物質名詞・集合名詞・抽象名詞」などに分けられていたことを思いだすであろう。英文法はラテン文法の引きうつしだから、ずいぶんムダなこともやつているが、しかし英語では名詞の「數」によつて語尾がちがい、それを受ける動詞にもちがいがあるくらいだから、このように分けることもまつたく無意味ではない。ところで、中國の書き言葉、ことに文語體の場あいはどうであろう？——

司馬遷　史記　龍門　達爾文（ダーウイン）　紐約（ニューヨーク）

人家　橋　船　旅館　茶碗　電燈

水　空氣　砂　油　茶　布　衞士忌（ウイスキー）

軍隊　民族　警察　森林　家畜

學問　道德　文章　宣傳　陰謀

——こんなふうに單語をならべ、それぞれの意味によつて部類（class）を分けよ、などと要求するのは意味のないことである。「人」は普通名詞で「水」は物質名詞だといつてみたところで、それがなんの役にたとう？　それは中國の言語、ことに漢文の本質にそぐわないムダなことで、そんなことより、名詞の組みたてを研究することのほうが大事である。

中國の新しい出版物では、人名・地名・團體名・時代名・書名などには左横に線をつけて、それが個有名詞であることを示している。——たとえば「孔子・山東・北京大學・春秋・唐詩三百首」（書名や篇名には波形線を多く用いる）。しかし、文語體で書かれた古い出版物には横線がなく、木版の本になると句讀點さえもついていないのがある。日本人のいわゆる「白文」がそれで、これはよほど訓練された人でも讀みそこなうことがある。（現に中國の新聞も、スペースの關係で個有名詞に線を引いていない。）そこで、個有名詞をおぼえることも漢文學習の一部分になつている。

といつても、俗にいう「本屋學問」で、やたらに人名や書名ばかりを暗記しても、カンジンの中身を知らないでは意味がないが、漢文をやる人が「陶潛」をセトモノの潛水艦だと思つたり、「梨園」をナシ畑とまちがえるようではとまるから、個有名詞とそれにまつわる故事來歷

についても大體のことは知る必要がある。もともと中國人はコリ屋だから、一人で三つも四つも名まえをもつている。たとえば蘇軾・蘇子瞻・蘇東坡・蘇文忠公——これがみな同一人だ。近代人でも孫文・孫逸仙・孫中山などはその例。それから地名にも、時代によつて呼びかたのちがうのがあり、おなじ時代にも別の呼びかたをすることがある。——北京を「燕」といい、河南を「豫」というなどはその例。

現代中國人の姓は三百あまりで、その大部分は一字姓である。二字の姓はごくまれ——たとえば歐陽など——であるが、古代にはいろいろ變わつた姓名の人があるから、ウツカリできない。「論語」にも端木（たんぼく）などという姓の人が出てくる。（この姓の人は現在も中國にいる）。おなじ「論語」に「有子曰…」という文句があるが、これも「有さん」という人名であるから、「子があつて」などと讀んではいけない。

地名も歴史・地理的に重要なものはおぼえるように心がけよう。書名も、古典として名の通つているものぐらいは知つておくがよい。これらは漢文の教科書や中國文化關係の書物、あるいは一般教養書によつてもおぼえられるはずである。

三三——名詞（その構造）

個有名詞以外の名詞は、外來語や新語にすこし問題があるだけで、そのほかは一樣にあつかつてもよかろう。物質名詞・抽象名詞などと分ける必要はない。

——外來語（人名・地名もふくむ）は、中國各地の方言音であらつぽく音譯されたものであるから、日本人ばかりでなく中國人の目にも異樣に見える。新語もまた、外國語の意譯や、すでにあつた語の省略などをふくんでいるので、中國人にさえヤツカイであり、そのため特に「新名詞辭典」ができているくらいである。

個有名詞や新語は、一つ一つを暗記すればそれでよい。しかし、そのほかの名詞は、構造の點で推理の餘地がある。まず長さを見ると、一字のものや二字のものが多く、複合詞になると三字以上のもある。一字の名詞——「天・地・人・山・川・草・木・父・母・子・女」など——は、發生の歴史も古く、字の形も象形文字的なものが多い。これらは中國の書き言葉の材料として重要なもので、その中のあるものは、西洋のギリシャ・ラテン語がヨーロッパ各國語の「語根」になつているように、中國の書き言葉の「詞原質」(logoid) になつている。たとえば「口」という字は、口の形をあらわした古い文字で、現代の中國語ではもはやこの字を具體的な「くち」の意味には使わない——そのためには「嘴」という字を書く——のであるが、それ

でも「人口・口頭・口糧・口紅・口琴（ハーモニカ）」などの複合詞を作るのには「口」という字が大いに必要である。「電報・電話」のような複合詞も、よく見ると「電」「報」「話」という詞原質の組みあわせられたものである。

この「詞原質」（ロゴイド）の原理は、漢文ばかりでなく日本の國語にとつても大事なことで、日本人が西洋の近代的な學問——人文・社會・自然科學のすべて——を取りいれて國家的にこれくらいにまで近代化することができたのには、それらの學問を傳える道具となつた漢語の恩惠もけつして小さくない。英語のアトムを「原子」と譯し、ボムは「爆彈」であらわし、それらを一つにして「原子爆彈」とし、さらに省略して「原爆」とするような藝當は、漢語の「詞原質」にたよらなくてはできないことである。これを純粹の日本語で、「もとの・つぶの・はじける・たま」などといつても、ちつともスゴい感じが出ない。——だからとて、「ピカドン」を物理學用語に入れるほどの勇氣もまだあるまい。

日本の國語は明治以來その發展の方向がだんだん變わつてきて、新しく作られたり、あるいは古い形に新しい意味を持たされた「熟語」を多くふくむようになつた。つまり、書き言葉の性格が變わつてきたのである。その語彙の一部分は中國に逆輸出されて、あちらのいわゆる

「新名詞」になつている。そのうえ、中國自體としてもこの「詞原質」の原理によつて、どしどし多くの新語や新しい用法を考えだしたので、中國の書き言葉の性格もまた大幅に變わつてきた。そして新しい文語體ができたのである。

新しいといつても、その中にはやはり古代からの古い語彙をふくみ、語法も古代そのままの部分が多い。ここにも「漢文の不滅」と、その發展の可能性が見られるのである。「漢文は死語ではなくて符號語、すなわち一種の暗號組織であり、その組織は歷代の文化人によつてすこしずつ變化させられてきた」と見る劉復氏の說の正しいことがここでも證明される。この意見は、現代中國の國語學者として知られた楊樹達氏や陸志韋氏の說とも共通している。

練習問題（三）——つぎの「白文」の中にある個有名詞をひろいだせ。

一　孟子見梁惠王（「孟子」）

二　天下之士雲合歸漢（「漢書」）

三　天下不多管仲之賢而多鮑叔能知人也（「史記」）

四　張君諱汝士字堯夫開封襄邑人也（歐陽修）

五　波茨坦會議——公元一九四五年七月美羅斯福・蘇斯塔林・英邱吉爾(中途易艾德禮)在德國波茨坦會議　(「國語辭典」)

三四——**名詞の同類**　漢文はもともと簡潔な書き言葉がさらに洗練されてできた文體であるから、その構成要素の一粒一粒が、「形・音・義」のすべての方面で相當に重い比重をもつている。この點で漢文は、話し言葉としての中國語が、ある音節のアクセントをうしなつたり、意味が非常に輕くなつたりするのとはちがう。

ところで、漢文の一字一字が大きな比重をもつていることは、その字の獨立性の強さを物語つており、いいかえれば、二字以上の複合詞の見わけを困難にすることになる。たとえば「五柳先生好讀書」という文があると、「五柳先生」は人名だから連語として問題はないが、「讀書」はいつたい「書物を讀む」ことか、それとも「學問」のことであるか?——そう考えると、單語のかぞえかたにも疑問がおこつてくる。

つぎに、漢文の名詞の中には、たとえば「白髮三千丈」「一匹赤馬」「一幅絹」のように、物をかぞえる單語があり、このうち「一・三・千」のように數をあらわすのを、「數詞」と呼ぶこ

とがある。また「丈・匹・幅」のように、物の單位を示して數詞を助けるのを「助數詞」と呼ぶことがある。助數詞はじつはつぎにくる名詞の前ぶれとなり、時には名詞のかわりをするので、「助名詞」と呼ぶこともできる。話し言葉としての中國語では名詞といつしよに助數詞(助名詞)を用い、書き言葉の口語體としての「白話文」ではそれを省略することもあるが、くだけた文章ではたいてい書きあらわしている。たとえば「一匹馬、一頭牛」——漢文ではその性質上、ただ「一馬一牛」とするのが普通である。

「數詞」と呼び、「助數詞」あるいは「助名詞」と呼んだところで、やはり名詞の一種であり、字數もきまつているから、文法上の取りあつかいには差別がない。ところがもう一つ、「名詞相當語」というものがある。さきの「好讀書」もその例で、「このむ」という意味の「好」のあとから意味のおぎないをしている「讀書」は、「ドクショ」という一語にかぞえても、あるいは「書ヲ讀ムコト」と考えても、文法的には「名詞相當語」である。

漢文は語尾變化もテニヲハもない、石だたみ道のような書き言葉であるから、品詞の切りかたにはいろいろ疑問もおこるが、まず個有名詞や、あきらかな複合詞などを取りだしたあとで、殘りの單語の結びつきぐあいを、文全體から歸納して考えればよい。「あきらかな複合詞」

とは、おなじ文字のダブつたもの——「重複複合詞」で、たとえば「天之蒼蒼」の「蒼蒼」など——、おなじ意味の字が二つくつついているもの——「同意複合詞」といつて、たとえば「朋」と「友」で「朋友」——、似た意味の字が二つくつついているもの——「類意複合詞」と呼ばれるもので、たとえば「計」と「畫」で「計畫」——、などである。そのほか、長いあいだの習慣でいわゆる「熟語」になつているもの——たとえば「賢人・夫子・太守・政治・經濟」などは、もちろん單獨の名詞である。

「讀書」のように「動詞・名詞」の形のもの、「赤馬」のように「形容詞・名詞」の形、「兒童」のように「名詞・名詞」の形、「和平」のように「形容詞・形容詞」の形、「擧動」のように「動詞・動詞」の形など、複合名詞の形式は種種雜多であり、その結合の度あいもそれぞれちがうので、たとえおなじ時代・おなじ社會の「通念」をもとにしても、人によつて意見がちがうことであろう。まして古代の、それぞれ非常にちがつた社會の、しかも暗號的な書きものを讀むのであるから、早がてんや獨斷におちいらないように、いろいろの角度から讀みかたを考えてみなければならない。

名詞やその同類の構造については、もつとくわしく書く必要もあるが、この本は文法書では

ないから、あまり深く立ち入らないことにする。

三五——**説明語（descriptives）** 一つの文（sentence）の主體について、そのありさまや動きをのべる語を説明語という。前に主體語のところで「孔子適周」という例をかかげたが、この文の中で「孔子」は主體語、「適周」は説明語である。「適周」（周にゅく）という説明語は「適」と「周」（國の名）の二つの單語から成つていて、「ゆく」はこれまで動詞と呼ばれているもの、「周」は名詞の一種である。動詞はもともと説明語として使われることが多い。名詞は主體語になるのが本すじではあるが、説明語の意味をおぎなうためにその一部分として轉用されることもある。また、「孔子、魯人也」のような構造の文では、「魯人」という名詞がそのまま「説明語相當語」として使われる。

説明語として用いられる單語のうち第一次的なものは、これまで動詞・形容詞・副詞と呼ばれているものである。漢文では形容詞がいきなり主體語のあとにきて、そのまま説明語になることも普通で、その間に西洋語のいわゆる be 動詞を必要としない。また、名詞が説明語の一部または全部として用いられることもしばしばであるから、西洋の文章を解讀するような態度

で漢文を讀むと、正解が得られなかつたり、とんだ誤解が起こつたりする。

見本として、つぎにいろいろな文例を「主體語」と「説明語」の二つの部分に分けてかかげる。ここでことわつておかねばならないが、動詞・形容詞・副詞は主體語（の前）にくつついてその一部分となることも多い。つまり、本來は説明語であるものが、第二次的に主體語の一部分に轉用されたのである。このように、主體語が動詞・形容詞・副詞などをともなつている場あいには、主體語である名詞・代名詞などとそれらをいつしよにして「主體語相當語」と見ることができる。

漢文では花が赤ければ「花紅」と書く。黄色ければ「花黄」とする。「花」は主體語、「紅」または「黄」は説明語である。ところがまた、「紅花　大」とか「黄花　小」と書くこともある。このときの「紅」「黄」は、單語としてはもちろん形容詞であるが、そのあり場所ではたらきから見れば主體語の一部分である。だから「紅花」「黄花」はそのまま主體語相當語と見ることができる。

（主體語）　（説明語）
逐鹿者……不顧兎。

善游者……溺、
善騎者……墮。
詩……言志、
歌……永言。（言ヲ永クス）
舉世……皆濁、
我……獨清。
山氣……日夕佳、
飛鳥……相與還。（相トモニ還ル）
王……好戰。
平生故人……去我萬里。
管子……以禮義廉恥爲四維。
水鳥……浮沈、
雲……斷續。
吾……有大樹、

人……謂之樗。（チヨ）
大江……東去。
狄希……中山人也。

——ここではまだ、とまかい分析をしないで、ただ主體語と說明語だけに分けておく。

三六——動詞（完全と不完全）　世界のすべての物は動いている。われわれがある物の性質だと思つていたことも、じつは運動に過ぎないのだ——と原子物理學は敎える。西洋の諸言語は動詞の變化を一つの特色とし、そのため東洋の學生をなやましてきた。中國の學者の中には形容詞を「靜詞」と呼んだ人たちもあるが、靜詞より動詞のほうが强いことはいうまでもない。

ところで、行動にかならず目的を定めたがる西洋の人たちは、ラテン語文法の形式主義の影響をうけたせいもあつて、動詞を自動詞と他動詞に分けるのがおきまりである。中國人もそのやりかたを取りいれて、「及物」（動作が他の物に及ぶ）と「不及物」（他の物に及ばない）の二種に分け、一つを「外動詞」（他動詞）とし、もう一つを「內動詞」（自動詞）とした。だが、これは

あまりにも飜譯主義のきらいがある。中國語でもそうであるが、漢文でいちいち「自動詞・他動詞」の區別をし、「目的語・二重目的語」などを定めるのは、わずらわしいばかりで、あまり役にたたないことが、近年ようやく認識されてきた。そんなことよりも、動詞そのものの成りたち——はじめから動詞であるものと、ほかから轉用されて動詞になつたものなど——を調べたほうが實際の役にたつ。新しい複合動詞が數多く使われるようになつた現代ではなおさらである。

動詞の例を擧げていてはキリがないが、まず本來の動詞で、それだけで意味の完結しているものを文例によつて示そう——

吾夫死焉。（「禮記」）
管仲囚焉。（トラヘラル。「史記」）
貧乏不能自存。（「戰國策」）
停數日辭去。（陶潛「桃花源記」）
桃花流水杳然去。（杳然として。李白詩）
深林人不知、明月來相照。（王維詩）

山青花欲燃。（杜甫詩）
黄鶴一去不復返。（崔顥詩）
項羽大怒。（「史記」）
天地皆振動。（李白詩）
古來征戰幾人回。（王翰詩）
先從隗始。（まず隗（かい）より始めよ。「戰國策」）

つぎに、本來の動詞でも、それだけでは意味が不完全で、ほかにおぎないの語を必要とするものの例——

古之學者、必有師。（韓愈「師說」）
教化、國家之急務也。而俗吏慢之。（俗吏これをおこたる。司馬光「論東漢教化」）
覺今是而昨非。（陶潛「歸去來辭」）
勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。（君ニススム更ニツクセ一杯ノ酒、西、陽關ヲ出ヅレバ故人ナカラン。王維詩）
昔聞洞庭水、今上岳陽樓。（杜甫詩）

余謫居於黄、過岐亭。（蘇軾「方山子傳」）
不見足下面、已三年矣。（白居易「與微之書」）

——以上の例を見ると、いわゆる自動詞と他動詞の區別はかなりむつかしく、兩方とも代名詞・名詞・名詞相當語を意味のおぎないに使つていることがわかる。この場あい、おぎないの語はたいてい動詞のあとにくるが、關係代名詞「所……」のように動詞の前にくるものもある。——ただし、動詞の前に副詞や助動詞がくるのは、動詞の完全・不完全とは別問題であるから、ここでは取りあげない。

動詞にはまた、意味のおぎないに二つの語を必要とする場あいがある（いわゆる二重目的語）——

下馬飲君酒（馬ヨリオロシテ君ニ酒ヲ飲マシム。王維詩）

——こういう場あいには、まず人がきて、それから物がくる（「飲酒君」とはならない）。もし「酒ヲ以ツテ君に飲マシム」（以酒飲君）、あるいは「君ニ飲マシムルニ酒ヲ以ツテス」（飲君以酒）のように表現すれば、それはもう二字ずつの連語になる。

三七——**繫詞**　英語の動詞 is などは、論理學にいうところの主辭と賓辭をつないで兩方を連結する繫辭（copula）の役をしていることが多い。そこでこれを普通の「述語動詞」とは別にしてコピユラ（繫詞）と見なす文法學者もある。西洋語でさえそうであるから、中國語のように極度に分析的な言語においては、この種の單語をただ「つなぎの語」と見なすのは合理的である。たとえば中國の話し言葉や口語體で——

孔子是魯國的人。

というときの「是」は、漢文の「孔子　魯人也」の空白のところに相當する。中國の文法學者はこの種の動詞を「同動詞」または「準動詞」と呼んで別あつかいにしている。ところで漢文は、中國語とちがつて一字一字の比重が大きく、それぞれの輕重の差がすくないので、これらを特に「繫詞」として區別するほどのこともない。これらの語は、これまでの分類のしかたでは不完全自動詞の中にはいるのであるが、われわれの漢文ではただ不完全な說明語の一種として輕くあつかつておこう——

知之爲知之、不知爲不知、是知也。（コレヲ知ルヲコレヲ知ルトナシ、知ラザルヲ知ラズトナス、コレ知レルナリ。「論語」——是から前が主體語相當語で、是以下が說明語である。）

296663

禮之用、和爲貴。（禮ノ用ハ、和ヲタツトシトナス。世のおきてには、なごやかさが大事。「論語」——爲は、ほとんど「……は……である」と譯してよいことが多い。）

一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。（「書經」——曰は「いう」とか「いわく」と讀むけれども、じつは「である」くらいの意味。）

そのほか、これに似た單語を擧げると、「乃・則・卽」（すなわち）「謂（…という）「係」（…ニカカル。…である。）「非・匪」（…にあらず）「不・否」（…ならず）「有」（あり）「無・毋・莫・末・微」（なし）「猶・由・若・如」（…のごとし）「似」（…に似る）「類」（…に類す）「等（於）」（…にひとし）などがある。

不完全自動詞の中には主體語と說明語の關係の近さをいいあらわすものがあり——たとえば唐の儲光羲の詩にある「滄海化桑田、桑田成滄海」とか、「中庸」にある「好學近乎知」などがその例。とに後者は「類」や「似」とおなじ意味であるから、繫詞といつてもよい——したがつて、不完全自動詞と繫詞の間に限界線をひくことは困難な場あいがある。敎科文法としては、どちらも動詞系の不完全說明語として、大まかにあつかえばそれでよかろう。

練習問題（四）——つぎの文例から動詞系の説明語とその補足語を取りだせ。

一　此之謂大丈夫。（「孟子」）

二　我非魚、安知魚之樂。（「莊子」）

三　此則寡人之罪也。（「孟子」）

四　君之所得民、亡幾何人。（「史記」）

五　唯女子與小人爲難養也。（「論語」）

三八——**助動詞**　漢文において、助動詞の動詞にたいする關係は、繫詞と不完全自動詞の關係に似たところがある。繫詞も助動詞も、漢文という書き言葉の固定性と比重のために、完全に限界線をひいて獨立するところまで行けない事情があるようだ。だから、どちらも動詞系の説明語の一種であると、大まかに見ておけばよかろう。

助動詞は意味によって五つ六つに分類されてきたが、數も多くないから、いちいち分類しなくても、大體において同類のものをまとめておぼえればよい。

可　詩書雖缺、然虞夏之文可知也。（「史記」）

能　非此母、不能生此子。（「史記」）

克　明日有課、不克奉陪。（書簡文。「あすは課業あり、お供できません」）

任　皇帝年在襁褓、未任親政。（「漢書」）

足　是四國者、專足畏也。（「左傳」）

得　王之所大欲、可得聞與。（「孟子」）

——「可」や「足」には「…以」をつけて、「以テ……ベシ」「以テ……ニ足ル」と讀むこともある。どちらにせよ、以上はみな「……できる」という意味の助動詞である。その位置はすべて本動詞の前にあるが、ただ「得」だけは、たとえば——

田爲王田、賣買不得。（「後漢書」）

のように、本動詞のあとにくる場あいがある。しかしこれは、「賣り買い（しようとしても）」「できない」と解すれば二つの部分になり、助動詞と見ないことも可能である。また、「得」は「不得而知」（得テ知ラズ）のように「……而」のつくこともあるが、これは「可以」「足以」の場あいと同様、リズムをととのえるための修辭技巧と見てもよい。

應　君自故鄉來、應知故鄉事。（王維詩）

當　父亦來、喜曰、當如是。（「史記」）

合　宜如舊制、不合瀰移。（「後漢書」）

宜　惟仁者、宜在高位。（「孟子」）

須　須至履歷者。（中國人の履歷書の終りに書く文句。「右ノ通リ」）

——これらは「……べきである」の意味で、今までの漢文では「マサニ……ベシ」とか「スベカラク……ベシ」と二ど讀みしている。現在の日本の新聞論說などにも、「よろしく……すべきである」などという漢文調の文章を見かけるが、「ヨロシク」「マサニ」「スベカラク」などは省略してもよい道理である。

將　孔子曰、諾、吾將仕矣。（「論語」）

——これは「マサニ……セントス」と讀み、「そういうことにする」あるいは「……なる」の意味に使う。

欲　長歌欲自慰、彌起長恨端。（鮑照「東門行」）

願　願得其衆。（「漢書」）

擬　小店擬批發出售。（敝店で卸し賣りしたい。——現代書簡文）

寧　寧爲雞口、無爲牛後。（ムシロ雞口トナルモ、牛後トナルナカレ。「史記、蘇秦傳」）

敢　緜蠻黃鳥、止於丘隅。豈敢憚行、畏不能趨。（「詩經」）

肯　公子欲見兩人、兩人自匿、不肯見公子。（「史記」）

屑　是亦不屑去已。（コレマタ去ルコトヲイサギヨシトセザルノミ。「孟子」）

忍　我不忍殺。（「史記」）

——これらはみな意思をあらわす。積極的手段や過程をあらわす「以」も、この種の助動詞と見ることができる。たとえば——

我藉是以養口體。（宋濂「王冕傳」）

つぎに、受け身をあらわす助動詞として——

被　逃於廁、與妾俱（ともに）被害。（「魏志」）

見　蘇武使匈奴、見留二十年。（「漢書」——見は「…ラル」と讀む）

爲……所……　太祖爲流矢所中、所乘馬被創。（「魏志」——中は「あたる」）

與　吳王夫差……遂與句踐禽。（ツヒニ句踐ニトリコニセラル。「戰國策」）

漢文特有の表現として、「ひま（がない）」の意味のイトマ（アラズ）がある——

暇　奚暇治禮義哉。(イヅクンゾイトマアリテ禮義ヲ治メンヤ。「孟子」)

遑　心之憂矣、不遑假寐。(「詩經」)

三九——**形容詞**　説明語の一種として、物の形態や性質、數量などを示すのが形容詞であるが、形容詞は第二次的には名詞やその相當語を修飾して、主體語や補足語の一部分になることも同様に多い。

形容詞の數は限りもなく多いが、まず完結した説明語になつている場あいの例を示すと——

國富、家貧。

民爲貴、社稷次之、君爲輕。(「孟子」)

しかし、このように本來の形容詞——たとえば「貧・富」「貴・賤」「善・惡」「巧・拙」など——がそのまま説明語になつている場あいはむしろまれである。しかも、この第二の例文の中の形容詞は、じつは形容詞性の名詞とも見られる。また、

干祿百福、子孫千億。(「詩經」)

などの例では、説明語が形容詞から成つているようでも、じつは名詞や數詞で代用されている

ことが多い。

なお、漢文の形容詞やその代用物はむしろ第二義的な、修飾的方面に多く用いられているのが實情である。修飾的方面とは、主體語や補足語の一部分として使われる場あいで、たとえば——

白髮三千丈、緣愁似箇長。(李白歌——「緣」は「…により」)

閣下負超卓之奇材、蓄雄剛之俊德。(韓愈「上于相公書」)

とのやりかたでこねまわせば、いわゆる美辭麗句の封建的な文章や、型にはまつた大げさな詩ができあがるわけである。

是子也、熊虎之狀而豺狼之聲。弗殺、必滅若敖氏矣。(殺さないと、きつと若敖氏をほろぼすであろう。「左傳」)

こんなふうに、具體的な物を借りてきて形容するやりかたは、もはや修辭學あるいは文體論の領分にはいるので、形容「詞」の問題にはならない。しかし「熊虎之」「豺狼之」という形は、この文の構造から見て形容詞相當語にあたり、「之」という、しばしば出てくる語をふくでいる。

「之」は名詞・代名詞・名詞相當語・形容詞のあとについて、それらとつぎにくる語を連結する。——口語體（白話）では「的」がこれとほぼおなじ役をしているが、口語の「的」は意味からも發音からも、前にくる音節の附屬部分（接尾語）といえる段階にまで達している。しかし漢文の「之」は、接尾語というよりは連結語と見るべきであろう。

漢文の形容詞は、字の意味がわかつておれば大體の見當はつく。ただし口語體とちがつて語尾の標識がほとんどない。（「之」もつねに用いられるわけではない）から、たとえばある文句の意味はわかつても、それを構成する單語が一つだか二つだかわかりかねるような場あいもある——たとえば「紅葉」などがそれで、日本人の目には紅葉は一つの概念であるが、中國の文語としては「紅」と「葉」の二つの單語から成る連語と見るのが自然である。

また數をあらわしてある場あいなど、かなり複雜な意味を簡潔に二三字で書き示してあるために、ウッカリすると飛んだ誤解をしてしまう。たとえば、「死者十九」とあるのを「死者十九名」などと考えたら大まちがいで、じつは「死者は十の（うち）九」すなわち十分の九の意味である。また、

願歸農者、十九。

などもおなじ例。しかし、

在外十九年矣。

などは、もちろん十分の九の意味ではない。

練習問題（五）

形容詞の役をしているものを示せ。

一　安危在出令、存亡在所任。誠哉、是言也。（「史記」）

二　之子于歸、遠送于野。（「詩經」）

三　子曰、君子哉若人。尙德哉若人。（「論語」）

四　大行不顧細瑾、大禮不辭小讓。（「史記」）

五　小大之獄、雖不能察、必以情。（「左傳」）

六　民有饑色、野有餓莩。（「孟子」）

七　紅豆生南國、春來發幾枝。（王維詩）

八　春眠不覺曉、處處聞啼鳥。夜來風雨聲、花落幾多少。（孟浩然詩）

九　斯人也而有斯疾也。（「論語」）

一〇　夫二人者、魯國社稷之臣也。（「左傳」）

四〇——**副詞**（その一）　説明語のうち動詞的なものや形容詞的なものに色をつけたり、あるいはさらにその上にかさねて色をつけるはたらきをするのが副詞である。中國の言語においては時相（テンス）や位相（アスペクト）を示すカラクリが簡單すぎるために、そのおぎないとしても副詞が發達することになる。だからシナ語においても漢文においても、ほかの國の言語の副詞に相當する語が非常に多い。中國でわりと廣く讀まれている文語口語共通のある文法の本を見ると、全體で五八〇ページのうち實に二〇〇ページが副詞にあてられている。つまり、文法全體の三分の一の重みを副詞にかけているわけである。この比率はちよつとどうかと思うが——ほかにも助動詞や助詞のように大事なものがある——とにかく副詞の數が多いことは中國の言語の一つの特徴である。

まず、副詞が形容詞に色をつける場あいの例をあげると、

賞太輕、罪太重。（「史記」）

如水益深、如火益熱。（「孟子」）

つぎに、動詞に色をつける例は、

信知生男惡、反是生女好。生女猶得嫁比鄰、生男埋沒隨百草。（杜甫詩「兵車行」）

——「信」は「まことに」と讀む。

風乍起、吹皺一池春水。（馮延巳詞）

——「乍」は「たちまち」と讀む。全文の意味は、「風立てば、しわ寄る池の春の水。」

副詞はまた、ほかの副詞に色をつけることがある。その例、

夫千乘之王、萬乘之侯、百室之君、尙猶患貧、而況匹夫編戶之民乎。（「史記」）

副詞は人によつていろいろに分類される。「時間・空間・原因・結果」というように、論理的に分けたり、程度の差によつて、最もはなはだしいものから最もかすかなものまで順順に分けたり、いろいろやりかたがあるが、漢文學習者としてはそのような理論的な分類法はあとまわしにして、まず比較的多く使われる副詞のうち、日本人にとつて多少ともむつかしそうなものの例をいくつかひろつてみよう。

致（「いたつて」と讀む。「至」とおなじ意味）——致有爽氣。（「世說新語」）

肆　(「はなはだ」の意)——其風肆好。(「詩經」)

酷　(これも「はなはだ」)——酷似其舅。(「宋書」)——日本では「酷似する」という連語をとしらえている。

孔　(「はなはだ」)——德音孔昭。(「詩經」)

絕　(「たえて」と讀んでもよいが、意味は「はなはだ」)——水道多、絕難行。(「漢書」)——日本では「絕好の日和」とか「絕大なる御援助」などの連語にしている。

良　(「まことに」)——美志不遂、良可痛惜。(魏文帝書)

このように、字そのものは見なれたものであつても、訓讀するには全文の意味にふさわしいように讀まなくてはならぬ。つぎの例もそうである——

上有弦歌聲、音響一何悲。(古詩。「一何悲」は「イツになんぞ悲しき」と讀む。)

「痛言人情」(いたく人情を言う)なども、「痛む」という動詞が、程度をあらわす副詞になつたのである。日本でも明治の書生たちは酒を「痛飲」した。

四一——副詞(その二)

前にひき續き、副詞のうち日本人にやや困難なものの例をもうす

とし拾つてみよう——

太　泰　已　以　(みな「はなはだ」と讀むが、「太」以外は多く用いられない。)

逾　愈　兪　(みな「いよいよ」と讀む。)——愈思愈危、不寒而慄。(梁啓超書。この場あいの「愈…愈…」は「いよいよ…ば、いよいよ…」と讀むが、その意味は英語の the more...the more... にあたる。)

時には「愈益」と二語を一つにして用いる——

少年聞之、愈益慕解之行。(「史記、郭解傳」)

尤　(「もつとも」と讀み、「ことに」「とりわけ」の意味)——然是說也、余尤疑之。(ところでこの說は、わたくしは特に信用しない。——蘇軾文。)

滋　茲　茲益　(みな「ますます」と讀む)——賦斂茲重(取りたてがますますひどい——「漢書」)

彌　(「いよいよ」)——弟子彌衆。(「史記」)

轉　(「うたた」と讀み、「いよいよ」、「ことに」の意味)——轉寂寥。

差　(「やや」)——家今差多於昔、……(鄭玄戒子書)

寖　浸　(「ようやく」)——政寖衰而不改。(「後漢書」)

幾（「ほとんど」）——幾二百字。

固　故（「もとより」と讀む）——固無虛言。（もちろんウソではない。）

——吳不亡越、越故亡吳。（「戰國策」）

故（また「ことさら」と讀む）——他物若買故賤、賣故貴、皆坐贓爲盜。（「漢書」——日本ではドロボウから品物を安く買うのを「故買」という。）

畢竟——鶯花啼又笑、畢竟爲誰春。（李商隱詩。——日本では「畢竟」をそのままヒツキョウと讀み、また「ヒツキョウするに」などとして、「つまり」の意味に用いてきた。）

適　會（「たまたま」と讀み、「ちようどこのとき」の意味）——吾亭適成（蘇軾文）。

——會得白鹿（袁宏道文）。

咸（「みな」）——外內咸服。（「左傳」）

只　止　祇　直　翅（みな「ただ」と讀む。）——祇取辱耳。（「史記」）

副詞の數は非常に多いので、それらを一つ一つ系統的にならべて研究することは文法書にゆずるほかない。ここにはただ一部分の例をあげて、副詞としてあつかわれる語の素性や位置をながめてみたまでである。はじめに書いたように、副詞の分類は人によつてちがうが、中國の

學校文法書で試みられているやりかたの一つによれば、「時間・地位・性態・數量・否定・疑問・命令・客套」の八つになつている。念のためそれぞれの例を示すと、

（時間）我永不忘君之惠也。

（地位）友人遠居歐洲。

（性態）幸不死、必有以報也。

（數量）屢戰屢敗。

（否定）己所不欲、勿施於人。

（疑問）君何不快之甚也。

（命令）吾子其無廢先君之功。

（客套）請一試之。

とう分けると簡單なようであるが、すべての副詞がうまく分類されるとは限らない。しかし、いつも文全體の構造から部分を見てゆくようにすれば、どれが副詞になつているかを見分けるのはそう困難でない。

練習問題(六)

副詞を示せ。

一　景帝再自幸其家。(「史記」)

二　天下事大抵皆然。(王拯書)

三　大凡君子與君子、以同道爲朋。小人與小人、以同利爲朋。(歐陽修「朋黨論」)

四　霜露既降、草木盡脫。(蘇軾「後赤壁賦」)

五　當今之世、舍我其誰哉。(「孟子」)

六　故我有善、則立譽我。我有過、則立毀我。(「管子」)

七　仕非爲貧也、而有時乎爲貧。(「孟子」)

八　道也者、不可須臾離也。(「中庸」)

九　晩來天欲雪、能飲一杯無。(白居易詩)

一〇　子奚不爲政。(「論語」)

四二——**連結語** (connectives, その一) 一つの文(センテンス)は、主題となる實體語(すなわち主體語)のほかに説明語があればそれで成りたつ。時には説明語の中にいわゆる補足語(complement)を必要とすることもあるが、大きな目で見ればこれも説明語の一部分である。

ところで、一つの文の部分と部分、あるいは一つの文と他の文を結びつける役わりをする語がある。それは前置詞(・後置詞)、接續詞、などと普通に呼ばれているもので、これらを總稱して「連結語」(connectives)とよぶ。

右のうち後置詞はただ一つ「—之」があるだけで、これは口語體では「—的」となり、時には接尾詞のあつかいを受けているくらいである。「之」は「關係代名詞」として説明されることもあるが、ここでは簡單にただ連結語の一つとしてあつかつておこう。その例——

鴉片爲害人之物。(アヘンは人を害する—ところの—物である。)

無廢先君之功。(「左傳」——先君の功を廢することなかれ。)

西洋語の前置詞のように使われた連結語の例は——

子於是日哭、則不歌。(「論語」)

との場あい、「於是日」は副詞相當語の役わりをしている。連結語の「於」(于) はまた、動作の方向や到着點をあらわし、つぎのような形もよく使われている。——

孟孫氏問孝於我。——「孝を我に問う。」

公伯寮愬子路於季孫。

「於」にはこのほかいろいろな使いかたがある。たとえば、

勞心者治人、勞力者治於人。(「孟子」——「治於人」は「人に治められる」と讀む。)

苛政猛於虎也。(「禮記」——「猛於虎」は「虎より猛し」と讀み、この場あいの「於」は英語の than のようなはたらきをしている。)

於今十年。(「左傳」「漢書」——このときの「於」は「至」の意味で by (now) いうところ。)

さらに他の前置詞の例をいくつかあげて觀察しよう——

春鳥向南飛、翩翩獨翺翔。(魏明帝樂府詩)

山人有二鶴、旦則望西山之缺而放焉、暮則傃東山而歸。(蘇軾「放鶴亭記」)——「傃」は「向」とおなじ意味。)

禍自怨起、福繇德興。(「史記」——「繇」は「…より」)

有一人從橋下走出。(「史記」、張釋之傳」)

擢之乎賓客之中、立之乎群臣之上。(「戰國、燕策」——「乎」はここでは「於」とおなじ。)

自漢初定以來、七十二年、…(「漢書」)

…死于此樹之下。(「史記」)

…於道病死。(「漢書」)

五色五聲五臭五味、凡四類、自然存焉天地之間、而不期爲人用。(「尹文子」)

在陳絕糧。(「論語」)

果予以未時還家、而汝以辰時氣絕。(袁枚「祭妹文」)

當是時、楚兵冠諸侯。(「史記」)

緣溪行、忘路之遠近。(陶潛「桃花源記」)

循海而歸。…循牆而走。(「左傳」)

白日依山盡、黃河入海流。(王之渙詩)

始皇遂旁海西至平原津而病、到沙丘而崩。(「論衡」)

西南山水、惟川蜀最奇、然去中州萬里。(宋濂)

昔日戯言身後事、今朝都到眼前來。（元稹「遣悲懐」）

自天子以至於庶人、壹是皆以修身爲本。（「大學」）

自天子達於庶人、三代共之。（「孟子」）

これらはおもに時間や場所に關係した連結語であるが、この種の連結語はそれ自體がみじかい形であるのと、あり場所の關係で變化がすくないので、なかには非常に口語に近いものもある。

四三――**連結語**（その二）前の項に續いて用例をあげよう――

乘便利時奪取其國、不復顧恩義。（「漢書」）

爲天下興利除害。（「史記」）

吾所以有大患者、爲吾有身。（「老子」）

與君歌一曲。（李白詩「將進酒」――「與」は「…ために」）

因前使絕國功、封鴦博望侯。（「史記」――鴦とは西域の遠い國に使いした張鴦（けん）のこと。）

余以愚觸罪、謫瀟水上。（柳宗元「愚溪詩」序）

由此楊氏與郭氏爲仇。（「史記」）

伯夷・叔齊不念舊惡、怨是用希。（「論語」――「是用」は「ここをもつて」と讀む。）

以上はおもに事の動機や原因などをあらわす前置詞である。

將縑來比素。（古詩。――「縑」は「かたく織った絹。」「將…來…」は「…をば持つてきて」の意味。）

至其時……以人民往觀之者三二千人。（「史記、滑稽傳」――この「以」は日本語の「…として」にあたり、資格や名義を示す。）

不爲酒困。（「論語、子罕」――「爲」は「被」とおなじに使われている。）

吳王夫差……遂與勾踐禽、死於干隧。（「秦策」――「與」は「被」におなじ。）

これらの、いわゆる「前置詞」は、その語のあらわす普通の意味とはちよつとズレている。しかし、その語の本來の意味をよく考えてかかれば、とうてい見當がつかないというほどのことはない。漢文の前置詞とは、けつきよくそうしたものである。發生的にはたいてい動詞で、その意味が分化したり輕くなつたりして前置詞（のよう）になる。

それからもう一つ考えてよいのは、これらのいわゆる前置詞と、そのあとにくる語をいつしよにして、副詞相當語と見ることである。たとえば、

對賓客歎息曰、……（「漢書」）

のような文句において、「對」は前置詞、「賓客」は名詞、などと分析することをやめて、「對賓客」を一つの連語としてあつかい、そのつぎにくる「歎息」という動詞を限定するものと見る。そうすれば「對」の意味の比重は自然に輕くなるから、なにもわざわざ前置詞であるかないかをセンサクするまでもない。

前置詞は代名詞などとちがつて、はつきり分類することがむつかしい。いろいろさまざまな動詞が意味を變化させて前置詞のようになつているのだから、分類しにくいのが當然である。しかし、さいわいなことに日本人の場あいには、それをあらわしている漢字の讀みかた（訓讀）をたどれば、意味をとることは困難でない。

練習問題（七）　連結語としての前置詞はどれか。

一　我於周爲客。（「左傳」）

二　彌子瑕見愛於衞君。（「韓非子」——彌子瑕は人名。）

三　子貢賢於仲尼。（「論語」）

四　君子不以言擧人、不以人廢言。（「論語」）

五　微管仲、吾其被髮左衽矣。（「論語」）

六　范增欲害沛公、賴張良・樊噲得免。（「漢書、項籍傳」）

七　韓說以太初三年爲游擊將軍。（「史記」）

八　仕非爲貧也、而有時乎爲貧。（「孟子」）

九　今秦之與齊也、猶齊之與魯也。（「史記」）

一〇　自其異者視之、肝膽楚・越也。自其同者視之、萬物皆同也。（「莊子」）

四四——連結語（その三）　連結語にはいわゆる前置詞のほかに接續詞がある。接續詞は一つのセンテンスの內部ではたらく場あいと、二つのセンテンスを結びつける場合がある。前者のうち、たとえば——

夫子之言性與天道、不可得而聞也。（「論語」）

この中の「性與天道」の「與」のように、二つの實體語を結びつけるものは、もし上の語に多少の重點を—すくなくとも順序の上で—おいて考えれば、前置詞と見ることもできる。

接續詞にはこのように對等の兩者を結びつけるもののほか、二つに一つをえらぶことを示すもの、前の文句を受けついでゆくもの、前の文句にさからつてゆくもの、話しのキツカケを持ちだすもの、條件をつけてかかるもの、假定をしてかかるもの、樣子を引きくらべるもの、などいろいろある。しかし、それらを論理的にくわしく分類することは理論文法や言語哲學の問題であつて、普通の學習者にとつては分類はあまり必要がない。ここには、だいたい似かよつたものを取りまとめながら例をあげてゆこう――

二者不可得兼、舍生而取義者也。（「孟子」）

天大雷電以風。（「書經」）

予及汝偕亡。（「書經」）

帝曰、「咨、汝羲暨和、……」（「書經」――羲も和も人名。）

君子有酒、旨且多。（「詩經」）

求之與、抑與之與。（「論語」――句末の「與」はここでは疑問の助詞、「…か」。「抑」は「それとも」。「抑」のかわりに同音の「意」を使つた例もある。）

女爲之與、意鮑爲之與。（「墨子」――「鮑」は人名。）

寧與黃鵠比翼乎、將與雞鶩爭食乎。（「楚辭、卜居」――「將」は「ハタ」と讀む。）

朕臨天下二十有八年。（「史記」――「有」は「又」におなじ。）

道善則得之、不善則失之矣。（「大學」）

先卽制人、後則爲人所制。（「史記、項羽紀」）

我欲仁、斯仁至矣。（「論語」）

有財、此有用。（「大學」）

無人之情、故是非不得於身。（「莊子」）

荊軻雖游酒人乎、然其爲人沈深好書。（「史記」）

皆古聖人也、吾未能行焉、乃所願、則學孔子也。（「孟子」）

何曰、「諸將易得耳。至如信、國士無雙。（「史記、淮陰侯傳」――「信」は韓信。）

秦無亡矢遺鏃之費、然而天下諸侯已困矣。（「漢書」）

……然則子之失伍也亦多矣。（「孟子」）

初不中風、但失愛於叔父、故見罔耳。（「魏志、太祖紀注」）

中材已上且羞其行、況王者乎。（「史記」）

夫人必自侮、然後人侮之。（「孟子」）

蓋天下萬物之萌生、靡不有死。（「史記」）

雖君有命、寡人弗敢與聞。（「左傳」）

相如使時、蜀長老多言通西南夷不爲用、唯大臣亦以爲然。（「史記、司馬相如傳」——「唯」のかわりに「惟」を書くことも多い。）

縱江東父兄憐而王我、我何面目見之。（「史記、項羽紀」）

如不可求、從吾所好。（「論語」——「如」は「もし…ば」と讀む。「如」は「若」とおなじに用いられる。）

苟得其養、無物不長。（「孟子」）

今孔丘年少好禮、其達者歟。吾卽沒、若必師之。（「史記、孔子世家」）

禮、與其奢也、寧儉。（「論語」——これは一種の「かかりむすび」で、口語でもこの形が用いられている。）

其言不讓、是故哂之。（「論語」——「是故」はまた「是以」「是用」ともする。このように二字から成る接續詞もかなりの數ある。たとえば「若夫」「至若」「況乎」「而況」「縱使」等等。）

連結語としての接續詞はこれで全部ではないが、以上の例によってそのあり場所や、はたらきが、ほぼわかる。

四五——表情語（ejaculatives, その一） センテンスの一部分を成す助詞と、センテンスのそとにあつて氣分をそえる感嘆詞を表情語とよぶ。どちらも、文の意味に色をつけるものである。漢文は話し言葉とちがい、發音されるとおりに表情語を書きしるす必要はないが、それでも古い時代から用いられている感嘆詞や助詞のなかには擬音的な感じのものが多い。

日本でもついこのごろまで、葬式のときの弔辭に「これ時昭和なん年、……」などとモッタイをつけることがおこなわれていた。また、天子の德をたたえるのに「允文允武」という形容をすることともめずらしくなかつた。

惟十有三年春、大會於孟津。（「書經」）

乃聖乃神、乃文乃武。（同前）

「允文允武」は「詩經」に出ているが、どちらにせよ、こうした文字——惟・允・乃など——には大した意味がないので、「發語辭」などとよばれてきた。それは、これから文句を切りだ

すことの豫告だつたり、單に調子をよくするための合いの手である。

北風其涼、雨雪其雱。(「詩經」)

のように、中途に助詞的なものを入れた例もすくなくない。人の名まえなども、たとえば介之推の「之」はよけいなものだという。しかし、文の中途にはいる助詞で、度數が多くて重要なのは「也」と「者」であろう。

古也墓而不墳。(「禮記」)

古者冠縮縫、今也橫縫。(「禮記」)

有顏回者好學。……不幸短命死矣。今也則亡。(「論語」)

とれらは日本語の分別助詞「…は」に相當する。

聽其言也、可以知其所好矣。(「大戴禮」)

とれは「…(する)と」「…(すれ)ば」に相當する。

地之相去也、千有餘里。世之相後也、千有餘歲。(「孟子」)

とれは「…ことは」の意味で、「…こと」を名詞相當語と見れば、「今也…」の場あいとおなじ。

とういうのは修辭的に用いられた助詞ともいえるが、それよりも文法的に見て重要なのは、やはり文の終りにつく助詞である。文の終りにくる助詞には、それを取つてしまつても意味に變化を生じないものもあるが、それがないと意味の通じなくなるものがある。たとえば——

曾子曰、「可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人歟、君子人也。」(「論語」——「歟」はこの場あい疑問の助詞で、重要な役わりをしている。「也」も、ここでは强意の助詞になつている。)

つぎにいくつか、疑問の氣もちをあらわす助詞の例をあげてみよう——

子禽問子貢曰、「夫子之至於是邦也、必聞其政。求之與、抑與之與。」(「論語」——「與」は「歟」とおなじで、疑問の助詞。「……か?」)

齊宣王問曰、「交鄰國有道乎。」(「孟子」)

足下何以得此聲於梁・楚間哉。(「史記」)

多乎哉、不多也。(「論語」)

天邪、地邪。(「莊子」)

文帝曰、「吏不當若是耶。」(「史記」)

吾歌、可夫。(「史記」)

晩來天欲雪、能飲一杯無。(白居易詩。——「無」はここでは疑問の助詞。)

何爲不去也。(「禮記」)

子張問、「十世可知也。」(「論語」)

女何夢矣。(「禮記」)

既富矣、又何加焉。(「論語」)

然則何言爾。(「公羊傳」)

君言太謙。君而不可、尙誰可者。(「漢書」)

兩君合好、夷狄之民、何爲來爲。(「穀梁傳」)

然則何以兵爲。(「荀子」)

右の例のうち、「何」や「誰」が前にくるものは一種の「かかりむすび」で、最後の語はいわば見かけの上の疑問詞である。

雖欲勿用、山川其舍諸。(「論語」——「舍」は「捨」におなじ。)

この例の「諸」は「之乎」がつまつて一つになつたものである。

其詳不可得而記聞云。(「史記」)

この「云」は疑問詞というには弱いが、日本語の「……とか」「……そうな」ぐらいの、不確實な氣もちをあらわす表情語である。

四六——**表情語** (その二) 文の終りに來て完成や決定——したがつて斷定・强意をも——あらわす助詞の例をあげよう。

城郭不完、兵甲不多、非國之災也。(「孟子」)

天者、人之始也。父母者、人之本也。(「史記」)

晉侯在外、十九年矣。(「左傳」)

(諸侯) 皆曰、「紂可伐矣。」(「史記」)

我欲仁、斯仁至矣。(「論語」)

凡天下戰國七、燕處弱焉。(「史記」)

莊兄弟子孫、以莊故至二千石、六七人焉。(「史記」)

莊王圍宋、軍有七日之糧爾。盡此不勝、將去而歸爾。(「公羊傳」)

前言戲之耳。（「論語」）
口耳之間、則四寸耳。（「荀子」）
夫神農以前、吾不知已。（「史記」）
雖舜・禹復生、弗能改已。（「史記」）
螽斯羽、詵詵兮。宜爾子孫、振振兮。（「詩經」）
世溷濁而莫余知兮。（「楚辭」）
天油然作雲、沛然下雨、則苗勃然興之矣。（「孟子」）
高山仰止、景行行止。（「詩經」）

つぎに、斷定・强意が强くあらわされて、いわゆる感嘆の助詞になつたもの——

君哉、舜也。巍巍乎有天下而不與焉。（「論語」）
甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公。（「論語」）
嗟乎、師道之不傳也久矣。欲人之無惑也難矣。（韓愈「師說」）
美哉、禹功。明德遠矣。（「左傳」）
漢之廣矣、不可泳思。江之永矣、不可方思。（「詩經」）

噫、其可哀也已。（王安石「許君墓誌銘」）
甚矣哉、爲欺也。（劉基「賣柑者言」）
越十年生聚、十年教訓、二十年之外、吳其爲沼乎。（「左傳」）
子路曰、「衞君待子而爲政、子將奚先。」子曰、「必也正名乎。」（「論語」）
舜、其大孝也與。（「禮記」）
唐棣之花、偏其反而。（「論語」）
樂只君子、邦家之基。（「詩經」）
逝者如斯夫。不舍晝夜。（「論語」）
南人有言曰、「人而無恆、不可以作巫醫。」善夫。（「論語」）

日本の漢文訓讀では、助詞を讀む場あいと讀まない場あいがある。もちろん、國語の語法をみだしてまで一字のこさず讀む必要はないが、讀んだほうがかえつて感じの出るときには讀むべきであろう。これまでも、「哉」を「カナ」と讀み、「乎」「與」を「カ」と讀んでいたが、「也」などは人によるとほとんど讀まなかつた。しかし、おなじ「也」という字でもいろいろに使いわけられているから、原作者の氣もちを生かすような讀みかたを考えたほうがよい。それ

でこそ「表情語」といえるわけである。

四七——**表情語**（その三）　のこる一種類の表情語はいわゆる感嘆詞である。感嘆詞はもともと人の聲をまねしたものであるから、それを書きあらわす文字とは發生的な關係がない。そこで、たとえば「アア」などは「嗚呼、烏呼、烏虖、於乎、於戲）などと、いろいろさまざまに書かれてきた。それがだんだん整理されて、ほぼ共通のいくつかが近代まで使われたわけであるが、もともと符號語としての漢文の性質上、話し言葉とちがつて發音のこまかい變化まで書きわけることはしない。まして古代と近代では字音も大幅にちがつているから、古文の感嘆詞を現代の漢字音で讀んでも、それがそのまま古代人の感嘆の聲になると思つたらまちがいである。つぎに、古典に見える感嘆詞の例をかかげよう——

嗚呼、哀哉、嗚呼、哀哉。（韓愈「祭十二郎文」）

僉曰、「於、鯀哉。」（「書經」）

惡、是何言也。（「孟子」）

使者曰、「烏、謂此邪。」（「史記」）

曾子聞之、瞿然曰、「呼。」（「禮記」）

臯陶曰、「吁、如何。」（「書經」）

啞、是非君人者之言也。（「韓非子」）

顏淵死。子曰、「噫、天喪予。天喪予。」（「論語」）

意、仁義其非人情乎。（「莊子」）

已、我安逃此而可。（「莊子」）

從者曰、「嘻、速駕。」（「左傳」）

熙、我念孺子、若涉淵水。（「漢書」）

魏王曰、「誒。」（「戰國、魏策」）

狂屈曰、「唉、予知之。」（「莊子」）

帝曰、「咨、女羲暨和。朞三百有六旬有六日、以閏月定四時成歲、允釐百工、庶績咸熙。」（「書經」）

咨虖、羣公。可不憂哉。（「漢書、王莽傳」）

訾、天下之王有侵君者、臣請以血湔其衽。（「戰國、齊策」）

齊大饑、黔敖爲食於路以待餓者而食之。……曰、「嗟、來食。」（「禮記」）
天子曰、「嗟乎、吾誠得如皇帝、吾視去妻子如脫躧耳。（「史記」）
麟之趾、振振公子、于嗟、麟兮。（「詩經」）
嗟茲乎、聖人之言長乎哉。（「管子」）
嗟乎子乎、楚國亡之日至矣。（「戰國、楚策」）
武帝下車、泣曰、「嚄、大姉。何藏之深也。」（「史記、外戚世家」）
鵷雛仰而視之、曰、「嚇。」（「莊子」）
臯陶曰、「都。在知人、在安民。」（「書經」）
咄、兒過我。我能富貴汝。（「後漢書、袁譚傳」）

感嘆詞は、たとえ現代の話し言葉においてもその數量や性質が單純でなく、ことに方言がちがえば、まったくちがうことがある。おなじ方言の中でも、時と場あいにより聲調を異にするので、とうてい固定的な漢字で書きあらわせるものではない。ただ古典の場あいは、すでに使用されたもの以上にふえることはないわけであるから、一般に使用される、度數の多いものを學びおぼえることにすればよい。

以上で、簡略ではあるが漢文の文法を大づかみに說明しおわつた。もちろん、これは概略であるから、個個の用例についてはそのたびに辭書や教師についてたしかめるほかない。また、これまではわざと「返り點・送りガナ」などのわずらわしさを避けてきた。讀者は例文がよく讀めないとの不滿を感じたことであろうが、著者としては、部分的な讀みかたにとらわれないで全體の組織を知つてもらいたかつたからである。

四八——漢文のテクスト　むかし書かれた漢文の文章はいわゆる「白文」で、「返り點・送りガナ」はおろか、句讀點さえもついていない。それを練習の結果スラスラと讀みとなすのが舊時代の人たちの教養であつた。それでも「符號語」としての漢文の性格のために、たとえ中國人でも頭の中で飜譯しないことには意味がよくわからない。まして言語系統のちがう日本では、專門の學者は別として普通の文化人は句讀・訓點のついたテクストを用いることが多かつた。日本の古文書などを研究した本を見ると、必要がないと思われるところにまで返り點がつけてあるが、そのへんの事情を物語るものであろう。

現在日本の高等學校では毎學年一冊の漢文教科書を讀ませているが、それには句讀・訓點

はもとより、むつかしい漢字の讀みかたまでも示されている。それは學習者が文の形式にかり頭を使つて、内容をよく批判する時間のないことを恐れるからであろう。白文は訓讀練習用としてももちろん役にたつし、專門家はただ目でサッと見て、あるいは中國の音で讀みくだして意味をとることもできるわけであるが、日本の訓讀のように長い年月をかけてほぼ一定した讀みかたをもち、古典や現代文にもそのまま引用されるほどのものは、常識としてもひととおり知つておくことが必要である。そこで、各時代の代表的なテクストをいくつか取りあげ、その讀みかたを示すことにしよう。

そのまえに、もと中國の文語文(符號語)としての漢文と、いわゆる白話文(口語文)としての中國語(シナ語)の文章が、まつたく體系のちがつた二種の言語であり、用語も語法も——まるでラテン語と英語のように——かけ離れていることを、かさねてハッキリと認識しておこう。それがわかつていないと、近世の文章を讀むときに途方にくれる危險があるからである。

ここには「論語」の一節と、それを比較的忠實にシナ語の口語體(白話)になおしたものをかかげよう。「論語」は先生の言葉を弟子が記錄した、一種の語錄であるが、それでさえもこんな

大きな開きがある——

(漢文) 子曰、學而時習レ之、不二亦説一乎。有レ朋自二遠方一來、不二亦樂一乎。人不レ知而不レ慍、不二亦君子一乎。

(華語) 孔子說、「學了又時時地實習、不也高興嗎? 這麼着就有同志的人、由遠方來了、不也更快樂嗎? 就是人家不曉得自己、自己也不彆悶、不也是君子的態度嗎?

兩方をくらべてみると、まず長さがちがうことである。それはそのはずで、漢文は幾十世紀を經て洗練され壓縮された符號語であり、華語文は、話し言葉そのままではないにしても、それに近い、こまごました表現法だからである。(この華語譯はほとんど話し言葉に近い。)

四九——漢文と華語の距離 單語をくらべてみると、「子」は華語では意味がよく通じないから「孔子」(正しくは「先生」)とする。「曰」は全然別の「說」という語に入れかえる。「學而」の「而」はほとんど文語專用で、口語では「了」であらわす。そのつぎに「又」というおまけがくついて意味の通りをよくしている。「時二」と、たつた一字であらわしてあるのが「時時地」と三字になるし、「習」は「實習」と、二字になる。「亦」のかわりに「也」という語が文の頭に

くるが、これは漢文ではけつしてないことである。「說」を「ヨロコブ」と讀み、「悅」とおなじに使うのは漢文だけのやりかたで、華語ではその「悅」さえも使われず、「高興」(はしゃぐ)という全然ちがつたものになる。助詞の「乎」も華語では使われないで「嗎」(または「麼」)という、ヘンな字が出てくる。

そのつぎの「這麼着」は「そうするうちに」という、つなぎの言葉であるが、これは漢文の方法では讀むことができない。「就」は「そこで」とか「すると」という意味の副詞で、原文にはそれにあたる語がないが、華語ではこういう場あい必要である。「有朋」は「有同志的人」となつている——「朋」を「朋友」としてもよいが、「朋友」はただ「友だち」という意味で、友だちの中には「飲み友だち」などという、よくないやつもあるから、それを避けて「同志」としたのである。「自遠方」の「自」は華語では「由」または「從」となり、「自」を使うことはない。「遠方」は日本語でも熟して一語になつているくらいで、中國でも「遠方」で通じるが、これも漢文では二語——遠・方(遠き・かた)なのだから、ほんとをいうと「遠(的)地方」としたほうがよくわかる。「來」のつぎに「了」をつけるのも、華語では「そういう段どりになつた」ことを示して意味をよく通じさせる。「不亦樂乎」の「樂」をもしそのまま華語で使うと「ニヤニヤ笑う」意味になつて

おかしいから、それで「快樂」とする。日本語の「快樂」とは意味あいがちがう。

つぎの「就是」は、ずつと下のほうの「也」と、かかりむすびになつて、「たとえ…ても」という意味。「人家」は不定人稱で、「人さま」とか「だれかが」の意味——これなどは漢字をそのまま讀んだのでは、とんだ誤解をすることになる。

「知」とか「慍」というふうに、たつた一字で手がかりだけをあたえるのが漢文のやりかたであるが、華語ではその場その場で意味を押しひろげて「曉得(自己)」などと適當ないいかたをしなければならない。「彆悶」などは、字はむずかしいが、じつは日本語の「氣がクサる」にあたる俗語。最後に、原文の「君子」は、これまた手がかりで、ほんとの意味の半分ぐらいしかあらわしていないから、華語では「君子的態度」とする。

讀者はこの一例によつても、漢文と華語の距離がいかに大きいか——距離というよりは、それは本質的なちがいであり、まえに「ラテン語と英語ほどにちがう」とのべたことが、けつしてウソやとじつけでないことを知るであろう。

五〇——古代の詩の見本

中國古代の文献の中でも「書經」「詩經」「易經」などは、民族

の歴史、民族の感情、民族の知恵を示している點で重要である。「書經」や「易經」はその性質がすこし特殊であるから、ここにはそれより一般的な「詩經」を取りあげ、その原文によつて上古時代の詩の形を知ることにしよう。この詩は、そのころの庶民階級の中の、ある若い女の運命をうたつたもので、旅の商人についていつてその妻になり、のちに離婚されてもどつてきた人の告白の形になつている。文藝的にもかなりすぐれたものである。(カナは歴史的カナづかい。)

氓(バウ)

氓之蚩蚩、抱レ布貿レ絲。匪二來貿一ヒ絲、來卽レ我謀。
送レ子涉レ淇、至二于頓丘一。匪二我愆一ヒ期、子無二良媒一。
將子無レ怒、秋以爲レ期。

乘二彼垣一、以望二復關一。不レ見二復關一、泣涕漣漣。
既見二復關一、載笑載言。爾卜爾筮、體無二咎言一
以二爾車一來、以我賄遷。

桑之未レ落、其葉沃若。于嗟鳩兮、無食二桑葚一。
于嗟女兮、無二與レ士耽一。士之耽兮、猶可レ說也。
女之耽兮、不レ可レ說也。

桑之落矣、其黃而隕。自二我徂一ヒ爾、三歲食レ貧。
淇水湯湯、漸二車帷裳一。女也不レ爽、士貳二其行一。
士也罔レ極、二三其德一。

三歲爲レ婦、靡二室勞一矣。夙興夜寐、靡有レ朝矣。
言既遂矣、至二于暴一矣。兄弟不レ知、咥其笑矣。

靜言思レ之、躬自悼矣。

及レ爾偕老、老使二我怨一。淇則有レ岸、隰則有レ泮。
總角之宴、言笑晏晏。信誓旦旦、不レ思二其反一。
反是不レ思、亦已焉哉。

(語注) ○氓 たみ。庶民。あの人たち。 ○蚩蚩 ニコニコしている(人)。 ○貿絲 絹と布地を物物交換する。 ○卽我謀 わたしに近づこうとする。 ○子 あなた。 ○淇 淇水(河の名)。 ○頓丘 地名。 ○垝垣 こわれかけた土塀。 ○復關 關所の名(そこからやつてくる人をさす)。 ○卜・筮 龜の甲らを燒いたり、易者にたのんだりしてうらなう。 ○體(うらないの)結果。 ○賄 嫁入り道具。 ○沃若 やわらかく大きい。 ○桑葚 「桑椹」とも書く。ハトがたべると醉うという。 ○說 いいわけをする。 ○食貧 貧乏な生活をする。 ○湯湯 水がゆたかに流れるさま。 ○帷裳 女の乘る車のまわりに垂れさがつた幕。 ○室妻のするしごと。 ○言遂 約束したことははたした。 ○暴 ひどくあつかう。 ○不知知らぬ顏をする。 ○咥 (バカにして)ヒヒツと笑う。 ○靜言 沈默する。 ○隰 澤地。

○泮 きわ。はて。 ○晏晏 のんびり。 ○總角 あげまきの髮(少女時代)。 ○已焉哉 ヤンヌルカナ。なにもかもおしまいだ。

「詩經」は周の首都にいた編修官たちが、各地の民謠などの意味をかれらの書き言葉になおして、目で見る詩の形にしたものである。その當時庶民がこんなシカツメらしい言葉でうたつていたとは考えられない。それは現代中國の、字を知らない民衆の歌を調べてみてもいえることである。しかし、もし上古の歌謠がそのまま記錄されていたら、いまの「詩經」より、もつともつとむつかしいものになつていたであろう。

五一——**古代の論說文** 戰國時代に「諸子百家」があらわれて、いろいろ議論をしたが、これまでの漢學者はとかく儒教的立ち場からものを見て、諸子百家の說を公平に批判する態度があまり見られなかつたようである。そこでここにはわざと變わり型の論文として、楊子と墨子の一節をかかげることにした。

楊子

○楊朱曰、「太古之事ハ滅矣、孰誌レ之哉。三皇之事、若レ存若レ亡。五帝之事、若レ覺若レ夢。三王之事、或隱レ或顯、億不レ識レ一。當身之事、或聞レ或見、萬不レ識レ一。目前之事、或存レ或廢、千不レ識レ一。太古至レ今日、年數固不レ可レ勝レ紀。但伏羲已來、三十餘萬歲、賢愚好醜、成敗是非、無レ不レ消滅。但遲速之間耳。矜二一時之毀譽一、以焦二苦其神形一、要二死後數百年中餘名一、豈足レ潤二枯骨一。何生之樂哉。」

○楊朱曰、「生民之不レ得二休息一、爲二四事一。故一ハ爲レ壽、二ハ爲レ名、三ハ爲レ位、四ハ爲レ貨。有二此四者一、畏レ鬼ヲ畏レ人ヲ畏レ威ヲ畏レ刑、此謂二之遁人一也。可レ殺可レ活、制レ命在レ外。不レ逆レ命、何羨レ壽。不レ矜レ貴、何羨レ名。不レ要レ勢、何羨レ位。不レ貪レ富、何羨レ貨。此之謂二順民一也。天下無レ對、制レ命在レ內。故語有レ之曰、人不レ婚レ宦、情欲失レ半。人不二衣食一、君臣道息。」(「列子」卷七、「楊朱」)

(語注) ○列子 本名は列禦寇。鄭(河南)の人。老子派の思想家。 ○墨子 戰國魯の人。本名は墨翟

(テキ)。 各國をめぐり、宋の國に仕えた。門人が多く、墨家として儒家とならんで勢力があつた。門人の書きのこしたのが「墨子」である。○楊朱 戰國時代の衞の國の人。よび名は子居。書いたものは「列子」や「孟子」の中に引用されているだけである。 ○三王 夏の禹王・商の湯王・周の文王。 ○伏羲 古代の傳說的帝王。 ○間 ちがい。開き。 ○神形 心身。 ○遁人 心にうたがい恐れている人。 ○對 敵對者。 ○宦役人。

墨子

今有二一人一、入二人園圃一、竊二其桃李一。衆聞則非レ之。上爲レ政者、得則罰レ之。此何也。以二其虧レ人自利一也。至下攘二人犬・家・雞・豚一者上其不義、又甚下入二人園圃一竊中桃李上。是何故也。以二其虧レ人愈多一。苟虧レ人愈多、其不仁茲甚、罪益厚。

至下入二人闌廐一取二人馬牛一者上其不義又甚下攘三人犬・家・雞・豚一。此何故也。以二其虧レ人愈多一。苟虧レ人愈多、其不仁茲甚、罪益厚。

至下殺二不辜人一也、拋二其衣裘一取二戈劍一者上其不義又甚下入二人闌廐一取中人馬牛上。

此何故也。以二其虧レ人愈多一。苟虧レ人愈多、其不仁茲甚矣、罪益厚。當レ此天下之君子、皆知而非レ之、謂二之不義一。

今至下大爲二不義一攻也國、則弗レ知レ非。從而譽レ之、謂二之義一。此可レ謂レ知下義與二不義一之別上乎。殺二一人一謂二之不義一、必有二一死罪一矣。若以二此說一往、殺二十人一、十二重不義一。必有二十死罪一矣。殺二百人一、百二重不義一。必有二百死罪一矣。當レ此天下之君子、皆知而非レ之、謂二之不義一。

今至下大爲二不義一攻也國、則弗レ知レ非。從而譽レ之、謂二之義一。情不レ知二其不義一也。故書二其言一以遺二後世一。若知二其不義一也、夫奚說書二其不義一以遺二後世一哉。

今有レ人二於此一。少見レ黑曰レ黑、多見レ黑曰レ白、則必以二此人一爲レ不レ知二白黑之辨一矣。少嘗レ苦曰レ苦、多嘗レ苦曰レ甘、則必以二此人一爲レ不レ知二甘苦之辨一矣。今少爲レ非、則知而非レ之、大爲レ非攻レ國、則不レ知レ非。從而譽レ之、謂二之義一。此可レ謂レ知下義與二不義一之辨上乎。是以知下天下之君子辨中義與二不義一之亂上也。

(「墨子」非攻、上篇)

(語注) ○圃 野菜やくだものの畑。 ○虧 メイワクをかける。 ○攘 くすねこむ。 ○囿 鳥やけものを飼うために圍つた場所。 ○闌廐 圍いや馬小屋。 ○不幸 罪のない人。 ○弗知非 だれも非難しようとしない。 ○奚說 なにもわざわざ議論をして…。 ○辨 わきまえ。區別。

五二——中世の散文の見本

唐の時代に文體の革新を試み、「唐・宋八家」の中心人物である韓愈と柳宗元の文章を讀んでみよう。

雜說　韓愈

世有二伯樂一、然後有二千里馬一。千里馬常有、而伯樂不二常有一。故雖レ有二名馬一、祇辱二於奴隸之手一、駢二死於槽櫪之間一、不下以二千里一稱上也。

馬之千里者、一食或盡二粟一石一。今食レ馬者、不下知二其能千里一而食上也。是馬也、雖レ有二千里之能一、食不レ飽、力不レ足、才美不二外見一。且欲下與二常馬一等上、不レ可レ得。安求二其能千里一也。

策レ之不レ以二其道一。食レ之不レ能レ盡二其材一。鳴レ之而不レ能レ通二其意一。執レ策而臨レ之曰、「天下無レ馬。」嗚呼、其眞無レ馬邪。其眞不レ知レ馬也。

（語注）○韓愈　中唐時代の人。西紀七六八—八二四。よび名は退之。昌黎の人ゆえ韓昌黎ともいう。
○伯樂　馬を見わける人。（それから）人を見わける支配者。　○千里　一日に百なん十里も走る馬。すぐれた人物をもいう。　○駢死　ならんで死ぬ。　○槽櫪　馬小屋。　○一石　日本の五斗五升ぐらい。　○盡其材　その才能をのこらずあらわさせる。

捕レ蛇者説

柳宗元

永州之野産二異蛇一。黑質而白章。觸レ草木一盡死。以レ齧レ人無二禦レ之者一。然得而腊レ之以爲レ餌、可下以已二大風・攣踠・瘻・癘一、去二死肌一、殺中三蟲上。其始、太醫以二王命一聚レ之、歲賦二其二一。募下有二能捕レ之者上、當二其租入一。永之人、爭奔走焉。有二蔣氏者一、專二其利一三世矣。問レ之、則曰、「吾祖死二於是一、吾父死二於是一。今吾嗣爲レ之十二年、幾死者數矣。」言レ之、貌若二甚感者一。余悲レ之、且曰、「若毒レ之乎。余將下告二於莅レ事者一、更二若役一、復中若賦上則如何。」

蔣氏大戚、汪然出レ涕曰、「君將二哀而生レ之乎。則吾斯役之不幸、未レ若下復二吾賦一不幸之甚上也。嚮吾不レ爲二斯役一、則久已病矣。自三吾氏三世居二是鄉一、積二於今一六十歲矣。而鄉鄰之生日蹙、殫二其地之出一、竭二其廬之入一、號呼而轉徙、饑渴而頓踣、觸レ風雨一、犯二寒暑一、呼嘘毒癘一、往往而死者相藉也。曩與二吾祖一居者、今其室十無二一三焉。與吾居十二年者、今其室十無二四五焉。非レ死則徙爾。而吾以レ捕レ蛇獨存。悍吏之來二吾鄉一、叫二囂乎東西一、隳二突乎南北一、譁然而駭者、雖二鷄狗一不レ得レ寧焉。吾恂恂而起、視二其缶一。而吾蛇尚存、則弛然而臥、謹食レ之、時而獻焉、退而甘二食其土之有一、以盡二吾齒一。蓋一歲之犯レ死者二焉。其餘則熙熙而樂。豈如二吾鄉鄰之旦旦有レ是哉。今雖レ死二於此一、比二吾鄉鄰之死一、則已後矣。又安敢毒耶。」

余聞而愈悲。孔子曰、「苛政猛二於虎一也。」吾嘗疑二乎是一。今以二蔣氏一觀レ之、猶信。嗚呼、孰知下賦斂之毒、有中甚二是蛇一者上乎。故爲二之說一、以俟下夫觀二人風一者ノ得上焉。

(語注) ○柳宗元　河東(いまの山西省永濟縣)の人。西紀七七三—八一九。　○白章　白いまだら。○腊　ほし肉。　○餌　榮養劑。　○大風　ライ病。　○攣踠　手足のまがり。　○瘻　ルイレキ。　○癘　惡性のカサ。　○三蟲　人の體内にいる三種の蟲(道教の迷信)。　○莅事者　係りの役人。　○生日蹙　生活が日ごとに苦しくなる。　○號呼　泣きさけぶ。　○頓踣　ぶつたおれる。　○呼噓毒癘　毒氣を呼吸する。　○相藉　あとからあとからとかさなる。　○隳突　あばれてぶつつかる。　○恂恂　ビクビクしながら。　○其缶　じぶんの(ヘビを入れる)燒き物のカメ。　○弛然　のんびりと。　○盡吾齒　いのちのあるだけ生きる。　○熙熙　やすらかに。○旦旦有是　毎日そんな目にあう。　○賦斂　課税。　○人風　人民の風俗(唐の太宗の名が世民だから、わざと「民」風といわない。)

五三——中世の詩の見本　中國の詩が形式・内容ともに完成したのは唐時代である。そこで、唐の二大詩人、李白と杜甫の詩を讀んでみよう。ただことわつておきたいが、唐ごろには音韻の知識も音樂の技術も非常に進歩していたので、詩は相當に嚴格な規則のもとに作られていたし、詩のなかのあるものは、すでに前代にもそうであつたように、音樂に合わせてうたわれて

いた。したがつて、唐詩のほんとうの美しさを味わうためには、ひとまず返り點・送りがなをやめて、なんらかの形の音讀をすることも必要になつてくる。「なんらかの形」といつたのは、なにも現代中國の標準(北京)音によらなくても日本の漢字音でも——リズムや押韻を知る上には——さしつかえないという意味である。現代の北京音ではもはや唐時代の韻と合わなくなつている。

音讀一本ヤリを主張する人もあるが、訓讀にはまたそれ相當の副産物があるので、たとえば返り點・送りガナは、いわば常に漢字の意味のたりないところに補いをつけ、語法のアイマイなところに道しるべを立てているともいえる。中國の人にしたところで詩の意味をとるためには——散文の場あいよりも、もつと甚しく——頭のなかでいろいろに考えながら讀んでいるのである。

もつとも、それだからとて中國の詩を、返り點・送りガナで訓讀しただけの、いわゆる書きくだし文をもつてきて、これで詩を「飜譯」しましたというのはたいへんあつかましい。詩の飜譯とは、そんなお座なりなことですむものではないからである。

將レ進レ酒

李白

君不レ見黄河之水天上來、
奔流到レ海不二復回一。
君不レ見高堂明鏡悲二白髮一、
朝如二青絲一暮成レ雪。
人生得レ意須レ盡レ歡、
莫レ使二金樽空對レ月。
天生二我材一必有レ用、
千金散盡還復來。
烹レ羊宰レ牛且爲レ樂、
會須二一飲三百杯一。
岑夫子、丹丘生、
將レ進レ酒、杯莫レ停。
與レ君歌二一曲一、
請君爲レ我傾レ耳聽。
鐘鼓饌玉不レ足レ貴、
但願二長醉一不レ願レ醒。
古來聖賢皆寂寞、
惟有三飲者留二其名一。
陳王昔時宴二平樂一、
斗酒十千恣二讙謔一。
主人何爲言レ少レ錢、
徑須二沽取一對レ君酌一。
五花馬、千金裘、
呼レ兒將出換二美酒一、
與レ爾同銷二萬古愁一。

(語注) ○將進酒 「酒たてまつらん」という意味で、李白以前からあつた樂府(ガフ、うたう詩)の名。 ○李白 よび名は太白、號は青蓮居士。西紀七〇一—七六二。盛唐の玄宗時代の大詩人。詩仙、酒仙または謫仙とよばれる。 ○青絲 黑い絹糸。 ○岑夫子 岑(シン)先生。詩人岑參のことともいう。 ○丹丘生 丹丘くん。李白の友人で元丹丘という道士。 ○饌玉 玉のようなよいたべ物。 ○陳王 魏の陳思王曹植(チ)。曹操の子。 ○斗酒十千 一斗一萬錢の酒。 ○五花馬 黑毛と白毛のまざつた馬。

兵車行

杜甫

車轔轔、馬蕭蕭、
行人弓箭各在レ腰。
爺娘妻子走相送、
塵埃不レ見咸陽橋。
牽レ衣頓レ足攔レ道哭、
哭聲直上干二雲霄一。
道傍過者問二行人一、
行人但云點行頻。
或從二十五一北防レ河、
便至二四十一西營レ田。
去時里正與裹レ頭、
歸來頭白還戍レ邊。
邊庭流血成二海水一、
武皇開レ邊意未レ已。

君不レ聞漢家山東二百州、千村萬落生二荆杞一。
縱有三健婦把二鋤犂一、禾生二隴畝無二東西一。
況復秦兵耐二苦戰一、被レ驅不レ異二犬與レ雞。
長者雖レ有レ問、役夫敢申レ恨。
且如二今年冬一、未レ休二關西卒一。
縣官急索レ租、租稅從レ何出。
信知生レ男惡、反是生レ女好。
生レ女猶得レ嫁二比鄰一、生レ男埋沒隨二百草一。
君不レ見青海頭、古來白骨無二人收一。
新鬼煩レ寃舊鬼哭、天陰雨濕聲啾啾。

(語注) ○兵車行 「行」は歌の意味で、樂府の詩によくある題のつけかた。唐の吐蕃(チベット)その他との戰いに民が苦しめられるのを見た杜甫は、漢の武帝の匈奴との戰爭を題材にしてこれを作つた。 ○杜甫 杜子美、また杜少陵、杜工部ともよばれる。西紀七一二—七七〇。玄宗時代に李白とならぶ大詩人。詩聖の名がある。 ○咸陽橋 咸陽の西南、渭水にある橋。長安から西に

ゆく人をここまで見送つた。 ○點行 軍隊の召集。 ○便 スナハチ。そのまま。 ○防河 黄河(上流)を守る。 ○里正 百戸(一里)の村長。 ○裹頭 黑絹で頭をつつむ—一人まえの青年になつたしるし。成年式。 ○山東 華山から東、中原の土地。 ○荆杞 イバラやクコ。 ○隴畝 畑。 ○無東西 まとまりがない。まばら。 ○秦兵 關中(陝西)の兵。 ○被驅 追い使われて。 ○隨百草 草葉のかげに埋もれてしまう。 ○鬼 亡者。 ○煩寃 罪なく死んだことをなやむ。

五四——近世の文語文

中國では唐末・五代の佛教變文や宋時代の講談本、さては朱子ら新儒教學者や禪宗の僧の語錄などによつて、思想と文藝の兩方面にわたつて口語文(白話)が發達し、元時代の戲曲はそれをさらにたくましく育てあげた。しかし、よそ行きの文章はやはり古典とおなじ文語體で書かれていた。

日本ではシナ文學といえば漢・唐の詩や文、せいぜい宋・明の文語文に限られていて、元曲や宋の語錄はむしろ專門中の專門と見られ、明・清の白話長編小說が大學の講義に取りいれられることもまれであつた。文語文にしても明・清時代のは學校で教えられることがすくなく、

文學的なものはなおさらであつた。たとえば明の「剪燈新話」や清の「聊齋志異」のたぐいがそれである。これらの小說は唐の「傳奇」とおなじく、完全な文語體、すなわち漢文で書かれているから、それが漢文の教科書に取りいれられてわるかろうはずはない。ここには、ちかごろ日本でも新しく飜譯の出ている「聊齋」の文例をかかげよう。

種レ梨

蒲松齡

有二鄉人一、貨二梨於市一。頗甘芳、價騰貴。有二道士一、破巾絮衣、丐二於車前一。鄉人咄レ之而不レ去。鄉人怒、加二以叱罵一。道士曰、「一車數百顆、老衲止丐二其一一。於居士一亦無二大損一。何怒爲。」觀者勸下置二劣者一一枚一令也去。鄉人執不レ肯。肆中傭保者、見二嗤詬不レ堪、遂出レ錢市二一枚一付二道士一。道士拜謝、謂レ衆曰、「出家人、不レ解二客惜一。我有二佳梨一、請出供レ客。」或曰、「既有レ之、何不二自食一。」曰、「吾特需二此核一作レ種。」於レ是掬レ梨大啗。且盡。把二核於手一、解二肩上鑱一、坎二地上深數寸、納レ之、而覆以レ土、向二市人一索レ湯沃灌。好事者、於臨レ路店索二得沸瀋一。道士接浸二坎處一。萬目攢視、見下有二勾萌一出上。漸大、俄成レ樹、枝葉扶疎。倏而花、倏而實。碩大芳馥、纍纍滿レ樹。道人乃卽二樹頭一、摘賜二觀者一、頃刻而盡。已乃以レ鑱伐レ樹丁丁、良久乃斷、帶レ葉荷二肩頭一、從容徐步而去。

初道士作レ法時、鄉人亦雜二衆中一、引レ領注目、竟忘二其業一。道士既去、始顧二車中一、則梨已空矣。方悟、適所二俵散一、皆己物也。又細視二車上一、一靶亡。是新鑿斷者。心大憤恨、急跡レ之。轉二過牆隅一、則斷靶棄二垣下一。始知、所レ伐梨、本卽是物也。道士不レ知二所在一。一市粲然。

(語注) ○聊齋志異 「聊齋」(「たいくつ庵」)の主人が集めしるした(志は誌におなじ)四百あまりのふしぎな民話。 ○蒲松齡 よび名は留仙、號は柳泉。清のはじめ山東省の人。西紀一六四〇—一七一五。 ○道士 道教の坊さん。 ○破巾絮衣 (絮は古綿)破れズキンにボロ着物。 ○咄 コラッという。 ○顆 まるい物をかぞえる助數詞。 ○老衲 わし(僧がじぶんをいうことば。衲はころも)。 ○一枚 まるいものをかぞえる助數詞。 ○傭保者 使用人。 ○嗤詬 ガヤガヤいう。 ○沸瀋 煮え湯。 ○攢視 集まつて見る。 ○勾萌 めばえ。 ○扶疎 のびしげるありさま。 ○卽 …から。 ○丁丁 木をきる音。 ○帶葉 葉もいつしよに。 ○車

上　車そのもの。　○靶　たずな。　○垣　低いへイ。　○一市　町じゅう。　○粲然　大笑い。

五五——現代の文語文

文語體は現代の中國においてもなお廣い分野にわたつて使われている。最近は文藝作品ばかりでなく學術書もほとんど全部いわゆる口語體（なん十パーセントか文語の混合したもの）で書かれているが、民國初年にはまだ、活字本でも文語體のものが多かつた。ここにはまず、中國の文體改革の「一時代の」功勞者であつた胡適の文章をかかげよう。かれのこの文章も、論じていることは新しいが、文體の本質は韓愈・柳宗元のそれと共通である。

文學革命

胡　適

文學革命、在吾國史上非創見也。即以韻文而論、三百篇變而爲騷、一大革命也。又變爲五言・七言之詩、二大革命也。賦之變爲無韻之駢文、三大革命也。古詩之變爲律詩、四大革命也。詩之變爲詞、五大革命也。詞之變爲曲、爲劇本、六大革命也。何獨於吾所持文學革命論而疑之。

文亦幾遭革命矣。孔子至於秦・漢、中國之文體始臻完備。六朝之文亦有絕妙之作。然其時駢儷之體大盛、文以工巧彫琢見長、文法遂衰。韓退之「文起八代之衰」、其功在於恢復散文、講求文法、此亦一革命也。唐代文學革命家、不僅韓氏一人、初唐之小說家皆革命功臣也。「古文」一派、至今爲散文正宗。然宋人談哲理者、似悟古文之不適於用、於是語錄體興焉。語錄體者、以俚語說理記事。此亦一大革命也。至元人之小說、此體始臻極盛。總之、文學革命至元代而登峯造極。其時詞也、劇本也、小說也、皆第一流之文學、而皆以俚語爲之。其時吾國眞可謂有一種「活文學」出世。儻此革命潮流不遭明代八股之劫、不受諸文人復古之劫、則吾國之文學必已爲俚語的文學、可無疑也。但丁之創意大利文、郤叟之創英吉利文、馬丁路得之創德意志文、未足獨有千古矣。

（語注）　○文學革命　民國六年一月ごろ在米留學生胡適らの始めた文學革新運動。　○胡適　よび名は適之。安徽省績溪の人。一八九一年に生まれた。口語文學をとなえ、古典を整理し、また駐米大使を

つとめた。この文は一九一六年四月五日の日記である。　○三百篇　「詩經」をさす。　○騷　屈原らの「離騷」。　○詞　宋ごろの歌詞。　○曲　元ごろの戲曲。　○持　主張する。　○駢儷　四字六字の對句をならべた「四六文」。　○文法　文章の格式。　○八代　東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋。　○「古文」　韓愈・柳宗元らの文章や、それとおなじ態度の人たちの文章。○正宗　本すじ。　○俚語　日常の口語。　○八股　官吏試驗の形式的文章（八つの部分にわかれている）。　○劫　災難。いためつけられること。　○但丁　ダンテ。　○卻叟　チョーサー。　○馬丁路得　マルテイン・ルッター。　○獨有千古　永遠のほまれを獨占する。

つぎに、文學革命を實行に移して、かがやかしい成功をおさめた魯迅（周樹人）の文語文をかかげよう。「阿Q正傳」その他の革命的小說を創作したこの文學者も、日常生活では——平易な文體ではあるにしても——あいかわらず漢文を使つていたことは興味が深い。

魯　迅

致施蟄存函

蟄存先生、十日惠函、今日始收到。近日大熱、所住又多蚊、幾乎不能安坐一刻。筆債又積欠不少。因此本月內恐不能投稿、下月稍涼、當呈教也。此復、並請著安。

迅啓上　七月十八夜

（語注）○施蟄存　浙江杭州の人。よび名は安華。一九〇三年生。小說家で、飜譯もある。　○魯迅　浙江紹興の人。本名は周樹人。周作人の實兄。多くの筆名を使つた。一八八一—一九三六。　○積欠　とどこおる。「欠」は借りになること。　○呈教　お手もとにさしだす。○請　著安　相手が著述家だからこういう。行をかえて書くのは相手を持ちあげる（尊敬の）氣もちをあらわす。

つぎにもう一つ、これはごく最近の北京市政府の「通知」として新聞に出たものの一節である。

五月一日爲國際勞動節。屆時首都各界人民將在天安門廣場舉行盛大慶祝集會。爲維持大會秩序、保證大會順利進行、起見、特規定下列各地區、無大會發給的通行證的車輛一律停止通行。（下略）

これを見ると「的」という白話用の文字が二カ所使われているほかは本質的に見て漢文（文

語體)である。この種の文體を日本では「支那時文」と稱して、明治以來一部の學校でも教え、實務に從事する人たちも練習してきた。

五六——**日本漢文の見本**　日本のお役所がすこし前まで使つていた「出頭相成度」や、民間の手紙文の「被下間敷候哉」などは、いくら漢字ばかりで書いてあつても漢文ではない。しかし江戸時代の漢學者などは、文を書くといえば漢文であつたから、中國の文章をよく勉强し、まねして、相當のところまでいつたことは事實である。日本漢文は文法に合わないところが多くてダメだ、などとケナす人もあるが、その道に年期を入れた人の文章はそれほどバカにしたものではない。西洋の宣教師などは現地にやつてきて話し言葉を身につけた上で漢文を書いたものであるが、日本人は鎖國時代にタタミの上にすわりながら、ただ文字の知識だけで漢文の法則を身につけたのだ。

先哲叢談　　原善

元祿中、文教大熙、家讀戶誦。先レ是所レ未レ有也。初羅山、剏二先聖祠一于

忍岡一。鳳岡、奉レ旨、移二之湯島臺一、其經營規畫更加二弘麗一。大君親書二「大成殿」三字一揭レ之。又賜二宅地于郭內一、以便二朝參一。

蓋吾邦、在昔文學稱レ盛。保・平已降、皇綱解弛、區宇雲擾、士大夫皆投レ筆、從二事金革一。於レ是文藝爲二僧徒之物一、其事壹歸二五山一。及三國家致二隆平一、儒者別立レ家。然猶目爲二制外之徒一、禿二其顱一、不レ列二士林一。此戰國之頹俗、未レ及レ革也。

鳳岡、慨然以爲、「儒之道、卽人之道。人之外、非レ有二儒之道一。而斥爲二制外者一、可レ謂二敝俗一矣。」時、大君崇二儒術一。蒙レ命種レ髮、稱二大學頭信篤一。此爲二元祿四年正月十四日事一。其餘列國儒者、盡改レ名變レ形以入レ士。至レ今、人無二賢愚一、知三儒教主二世用一、實鳳岡之力也。

(語注)　○先哲叢談　文化十三年(一八一六)刊行。近世日本儒學者の傳記や話題が集めてある。○原善　よび名は公道、號は念齋。林大學頭述齋に引きたてられた。文政三年死、四十七。○忍岡しのぶがおか(今の上野公園)。○鳳岡　林鳳岡。德川家綱から吉宗まで仕えた。享保十七年死、八十九歳。○大君　德川將軍をさす。ここでは五代將軍綱吉。○保・平　保元・平治。

○五山　京都の天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺。

明暦丁酉正月十九日、郭北失レ火。弟子報、「不レ可レ免。」羅山首肯、讀レ書ヲ不レ輟。又報、「延燒剝膚。先生盍レ去乎。」於レ是手ニ其所ヲ讀ム、上レ轎。轎中讀レ之猶不レ輟。既而至ニ郭外別業ニ。神色自若、讀者如レ故。少焉有ニ一人ニ馳報、「第宅盡爲ニ焦土ニ。」羅山曰、「及ニ銅庫ニ乎否。」曰、「共爲ニ烏有ニ。」羅山慨然仰レ天嘆曰、「多年所ニ力蓄ニ者、一旦爲ニ祝融ニ奪ニ。可レ惜、可レ惜。」是夕、鬱鬱不レ適、越五日、奄然長逝。

（語注）○明暦丁酉　明暦三年。西紀一六五七。　○羅山　林羅山。名は忠または信勝。髪をそり、道春といった。徳川家康以後四代に仕えた。○如故　モトノゴトシ。あいかわらず。○烏有　無。イヅクンゾアラン。どこにもない（漢の司馬相如が「烏有先生」という架空の人物をこしらえた）。○祝融　火の神。　○奄然　にわかに。

このくらいの漢文を書くのは、當時一人まえの學者にとつてはなんでもないことであつたら

しい。もつとも、書いてあることはどうも感心できない。つまり、かれら儒者たちが、じぶんたちだけのギルドをこしらえ、いわゆる「一味の廣場」を形づくつて、門閥・閨閥以外の者をしりぞけ、孫子の代までも一家一門の利益を守り續けようとしたことである。林羅山のはなしにしても、「先哲叢談」の筆者はほめたつもりであろうが、今から見ればまつたく逆効果になつている。なんとくだらない學問のしかたであろう！

責められてよいのは過去の漢學者であつて、漢文そのものではない。漢文は殷・周時代のむかしから中國の——また東洋の——こんにちただいままで、文化の一面を持ち傳えてきた一つの有用な道具である。

——「責められてよいのは過去の漢學者」といつたが、じつは現在においてもその行動において過去の漢學者とおなじように封建的で利己的なやからがいる。たとえば公共の地位にじぶんの一族や門人を配置し、あるいは國民の稅金によつてまかなわれる費用をもつて他人を利用するなどはその一例で、そのような人間はいくら現代の學問を研究していてもまつたくの封建人であり、現代において指導者顔をするのはあつかましい限りである。

（以下は漢文學習者の大部分にとつて常識として必要な中國文學史の大要である。ごく大づかみに、平易に書いてはあるが、とれまでこの本で體系的にあつかわなかつたことが多少は補われるであろう。）

五七——中國人と文學　まず「文學」にたいする中國人の考えかたをのべよう。なぜなら、中國人は長いあいだ、いまの世界の人たちとは違つた考えかたをもつていたからである。現代中國の「國語辭典」にも、つぎの四とおりの説明がしてある。

第一は、「文章博學」のことで、「孔門四科の一つ」であるという。「論語」のなかで、孔子が、じぶんの主な門人七十二人のうち特に「德行」（道德）・「言語」・「政事」（政治）・文學の四つの科目にすぐれた人たち十人の名をあげた。そのなかで子游と子夏のふたりは、古い書物、たとえば「詩經」や「書經」のことをよく知つているので、文學がうまいといわれた。つまり、かれらは古い書きものについて「博學」すなわち廣くまなんで、もの知りになつていたのである。いまの日本や西洋でも、古い書物のことをくわしく知つている人を文學者とよぶことがある。しかし、ほんとうの意味の文學者はそうではないと考える人も多い。

第二には、文學的才能のことをいう。中國では、「あの人は文學がとてもよい」などという

が、そういうときの「文學」は、別に詩人や小説家でなくても、手紙がうまく書けたり、むかしの詩や文章をおぼえていて話したりすればよいのである。しかし、そんなお手輕なことが文學といえるだろうか。

第三に、むかしの中國では、文章を書いたり古典を教えたりする役人のことを「文學」といつた。漢の時代からずつと、中央にも地方にも「文學」という名の役人が置かれた。わが日本でもそれをまねして、たとえば加賀藩のお抱え學者がじぶんのことを「加賀文學」などと書いている。しかし、役人にならなければ文學ができないという法はない。

第四に、人間がなにかを想像したり、なにかに感動したりして、そのことをうまく書きあらわすこと、あるいは書きあらわしたものを文學という。これが現代人の考える文學である。しかし、「うまく書きあらわしたもの」（藝術作品）ばかりでなく、「大事なことの書いてあるもの」（文献）までもふくめて文學と呼ぶことがある。英語で文學のことをリテラチュア literature というが、それは同時にまた「文献」をも意味する。

中國では書物を「經（けい）・史・子（し）・集」（儒教の古典・歷史地理・思想書や技術書・文藝作品）のように大きく分類したが、封建時代には「經」がいちばん重く見られ、それは思想でもあり文學で

もあると考えられてきた。そのほか、歴史の本やいろいろな思想の本も、りつぱなものは文學の書物としてあつかわれた。だから哲學や歴史と、ほんとうの意味の文學のさかい目がハッキリしなかつた。西洋のある文學者が、「文學には二種類、知的なものと情的なものがあり、知的な文學のつとめは教えること、情的な文學のつとめは感じること」といつた。つまり廣い意味の文學と、狹い意味の文學を區別したのであるが、中國人はただよい文章でさえあれば文學だと考え、そのうえ儒教の古典ばかりをありがたがるくせをつけられたので、ほんとうに文學の意味をさとつた人はあまり多くなかつた。

五八——殷・周の時代　「中國は三千年の文化を有する」などといつても、三千年前のことは傳說でしかなかつた。ところが一八九九年河南省で、三千年以上むかしの殷の時代のものといわれるカメの甲らやケモノの骨が掘りだされ、それに漢字が書いてあつたので、中國にはそのころもうかなり高い文化をもつた人たちのいたことがわかつた。いまでは迷信といわれている「子・丑・寅…」などの年のよびかたや、そのころの王さまの名、それから山でとつたシカやトラの數などが、古い形の漢字で書かれている。こういう記錄を甲骨文という。甲骨文はバ

ラバラの記錄だから文學ではないが、字を知つているくらいの人たちならばきつと歌もうたつただろうし、藝術品をつくることもできたであろう。天地のいろいろなふしぎさに、目を見はつたことであろう。

しかし、むかしの中國人の感じたり想像したことが文學の形で殘つているのは、殷をほろぼした周の時代（前約一〇二七—前二〇二）のなかごろからである。周の人たちは「周」の字の示すように、田を耕して農業をし、キビの神さまをお祭りしていた。はじめは王さまが國をうまく治めていたが、のちには世が亂れて春秋・戰國時代となり、民はいろいろ苦しい目にあつた。「詩經」にはその苦しみをのべた詩がある。

周はいまの山東省あたりに古代國家の一つの手本をつくり、有名な教育家の孔子もこの土地に生まれて、のちにはかれの教えが中國の國教のようになつた。「書經」や「詩經」を編集したのも孔子であるといわれるほどだが、「書經」などは民族の記錄の集まりであり、「詩經」も民の歌がおもな部分になつている。「國風」といつて、北中國にあつた十五の國の歌を集めたのがそれである。しかし民は字を知らなかつたし、知つていたとしても記錄する役目ではなかつたから、その歌は周の都にいた役人が書きとつた。それもただ歌の意味を傳えただけで、うた

われるとおりに書いたのではない。だから「詩經」の文句をよく見ると、やさしい言葉のところもあるが、とてもむつかしくて、耳で聞いてもサッパリ意味のわからないところが多い。ただ長さだけはたいてい一行が四字で、キチンとしている。

いつたい中國人は四という數がすきである。また、奇數よりも偶數がすきである。文章を書いても、おしまいを引きのばしていう詩や歌は別として、ふつうは二字の單語、四字の連語、六字の文といつたように、偶數に書くことをこのむ。「詩經」の文句はそのよい見本である。

「詩經」が北國らしいひかえ目なところのあるのにたいして、南方に起こつた「楚辭」は字數も不そろいだし、內容にもはげしい氣もちがこめられている。「楚辭」の作者屈原(前三四三—前二九〇)は、自然の風景や草木・動物などを詩の形でスケッチするように見せて、じつは心のくさつた貴族たちを風刺している。

孔子(前五五一—前四七九)から屈原にかけての時代は春秋の末から戰國の時代で、國と國との競爭がはげしく、人間の生きかたも困難であつたので、政治の理論や人生論を說く人がたくさん出た。「諸子百家」というのがそれで、なかでも孟子・莊子などは文章の强さや美しさで有名である。狹い意味の文學の本ではないけれども、中國の文章の形式を完成させ、內容に哲

學的な深みをもたせた點は大きな手がらである。

五九——漢・六朝(りくちょう)

秦の始皇帝は、じぶんの政治に反對させないために書物を燒きはらい、學者を殺した(前二一三—前二一二)が、そのあとの漢の時代(前二〇六—後二一九)には、學問が重く見られ文章も盛んになつた。いまでも「漢文」という言葉がそれを物語つている。漢は中國ではじめて組織のととのつた帝國で、まわりの國ぐにとも交涉があつたから、いまでも文學上の語りぐさとなつている多くの事件を生んだ。劉細君という女が烏孫(うそん)という未開な國の王さまのところにやられたり、蘇武という人が匈奴(きょうど)に使いに行つてとらえられ、十九年たつてやつと歸つてきたり、蘇武の友だちの李陵が匈奴に降服したり、張騫(けん)や班超が西域(さい)にまで遠征し、蔡愔(いん)が西域に佛敎を求めたり、大臣の娘蔡琰(えん)(文姬)が匈奴に十二年間とらえられ、生んだ子どもと無理に別れて歸るなど、のちの世の小說や芝居のタネになるようなことが多かつた。

しかし漢時代にはまだ小說や芝居もない(現在に傳わるほどのものはなかつた)。ただ文章のほうで、「賦(ふ)」という特別の文體がはやつた。賦は詩と文の中間にあつて、「うたわないで、となえるもの」である。感情にばかり走らず、具體的な物のスケッチによつて氣もちをあらわす。

賦の作者は屈原の「楚辭」をまねした點が多い。屈原の後輩の宋玉（前三三二？—前二八四？）は戰國時代にもう賦を作つたし、漢よりずつとのちの、宋の蘇東坡の「赤壁の賦」も有名である。賦では、同じような文句を對にしたり、終りの字のひびきを合わせて「韻をふむ」など、手のかかることもするが、漢の枚乘（ばい）や司馬相如、揚雄らの作品を見ると、美しい文章のかげにヒニクな氣もちも隱されていることがわかる。

漢のあとは「三國志」で有名な三國時代（二二〇—二八〇）で、その一方の大將である魏の曹操は、むすこ二人とともに文學一家を成し、その曹操と戰つた蜀（漢）の軍師諸葛亮（孔明）は「出師（すいし）の表」で知られている。表とは家來から王さまに申しあげる文書のことであるが、いくら名文でもそれつぽちでは文學というにはものたりない。

魏からあとの六朝時代（二八〇—五八九）、ことに晉が北にいられなくなつて南京に移つたころには、動亂のせいもあつて佛教思想や道教的生活が人の心をとらえた。法顯（ほつけん）はインドにお經取りに行くし、インドからはクマラジユウ（鳩摩羅什）というえらい坊さんが、北中國を占領している未開人のなかに來て教えをひろめた。こんな時代だから、あの陶潛（淵明）が役人をやめて、いなかに隱れたのである。しかし一般の民衆は、とても菊を作つたり酒を飲んで

くらすゆとりはなかつた。このころできた「世說新語」という本には、「竹林の七賢」をはじめいろんな人たちの生活ぶりが記されていておもしろい。飾らないで、すなおに書いてあるところが、ほんとうの意味で文學的である。

しかし、六朝時代の文章の中心は「駢（べん）文」または「四六文」という、散文ともつかない奇妙な文體であつた。それは四字や六字の文句を對にならべ、時には「韻をふんで」ひびきをよくしたもので、ある意味では中國人のものの考えかたによく似あい、中國語の性質にもかなつたものであるけれども、あまりにも不自然で、つい心にもないウソを書きとばしてしまう危險がある。

六〇——唐の文と詩　唐（六一八—九〇六）はその前に約三十年間、隋というつなぎの時代をもつたので、北と南の文化、古い物と新しい物をいくらか調和させて出發することができたけれども、文章のほうではまだ六朝時代の見せかけ本位から拔けきつていなかつた。それを革新したのは、ようやく中唐時代に出た韓愈（七六八—八二四）らである。かれらは儒教の古典である「五經」や、前漢の司馬遷の書いた「史記」、後漢の班固の書いた「漢書（じよ）」などを參考にし

て、すこしもしばられない、自由でちから強い文體を作りだした。むかしふうの文章だから、「古文」とよばれる。古文運動の選手には韓愈のほかに柳宗元があり、のちの宋時代の歐陽修・蘇洵・蘇軾(—東坡)・蘇轍・曾鞏・王安石を加えて「唐宋八家」という。

韓愈らは六朝時代のお飾りを捨てて内容のある文章を書き、一種の文學革命をやつたが、それにはもう初唐のころ陳子昂や張説らがお手本を示していた。もうひとつヒニクなことには、同じ初唐のころに四六文の小説「遊仙窟」が書かれ、それには俗語が平氣で使われている。(この小説は遣唐使が日本にもつて歸つて、奈良朝このかたたいへんはやつた。) 四六文でさえそうであるから、ふつうの文章に俗語をまぜることはなんでもない。唐から五代にかけて、特に佛教物語りにはそれが多く、學者はこの文體を「變文」とよんでいる。

唐の時代にはまた、現代の小説や童話に近い物語りが文語體で書かれ、いまでも讀まれている。たとえば、龍王の娘を助けて龍宮に行き、たいへんごちそうになつた話しとか、ふだんあまり威ばつたバチで、とうとうトラになつてしまつた人の話し、それから、ちよつと眠つているまにアリの國に行つて、そこの王さまの娘のおムコさんになつていた話しなど、いろいろおもしろいものがある。中國文學ではこれらを「唐の傳奇」という。

唐はこのように、ただの文章にも特色があるが、唐を代表するのは、なんといつても詩である。まず初唐のころには王勃・陳子昂・盧照鄰・駱賓王などが、六朝時代のような古風なところのある詩を作つた。やがて玄宗皇帝の、盛唐の時代になると、世界的な大詩人李白(七〇一—七六二)や杜甫(七一二—七七〇)をはじめ、王維・孟浩然・高適・岑參など多くの詩人が出て、中國詩の黄金時代であつた。皇帝の玄宗も、反亂のため四川に逃げる途中、きさきの楊貴妃を殺すほかなくなり、のちに中唐の詩人白樂天(七七二—八四六)が「長恨歌」にうたつたような悲劇を起こした。詩人李白はいつも空を見てあるく人のように思われているが、じつはこまかくやさしい氣もちがあり、杜甫はいつもうつむいてブツブツいつているようで、じつはなかなか氣の強いところがあつたらしい。王維は詩のほかに畫もうまく、佛教を信じ、菜食主義者であつた。この三人を詩の「仙・聖・佛」という。

三藏法師がインドに行つてきてから、佛教は中國でいよいよ盛んになり、唐の時代の思想界は儒教よりも佛教・道教が支配していた。坊さんのなかにも、りつぱな詩のつくれる人が多くいたし、お經もどしどし譯された。

中唐の白樂天(本名白居易)は、やさしい言葉で大衆的な詩を作り、その友人韓愈が貴族的な

のと對照される。白樂天はひとりで三千八百首以上の詩を作つて、多いことでも唐ではいちばんであるが、特にだれにもよくわかることを心がけ、「いなかのおばあさんに讀んで聞かせて、わからないところは書きなおした」とまでいわれている。かれは漢時代からあつた「樂府」という種類の、うたわれる叙事詩をさらに發展させて「長恨歌」や「琵琶行」を作つた。こういう行きかたは中國詩の正面には立たなかつたが、大衆のあいだにおなじ種類のものが發達して現代まで續いていることに注意しなければならない。

晩唐の時代に有名になつた詩人は杜牧（八〇三—八五二）である。そのころは唐の天下も亂れて、役人は惡いことをし、どろぼうも多くなり、生活が不安だつたので、李白や杜甫のような落ちついた詩はできなかつたが、杜牧は色どりの目に見えるような、小ぎれいな詩を書いた。「千里ウグイスないて綠くれないに映ゆ」とか、「霜葉は二月の花より紅なり」などの文句によつてもそれがわかる。日本の俳人松尾芭蕉はこの人の詩を學んだ。日本からは、唐のほろびるすぐ前の八九四年まで遣唐使が中國にだされていたから、唐以前の文學はまるでじぶんの國の古典のように愛讀されて、日本文學にいろいろな影響をあたえた。七五一年には「懷風藻」という、日本人ばかりの漢詩集もできている。

六一——宋・元時代

唐のあとの「五代」という時代（九〇七—九五九）には、天下が亂れ道德は衰え、まともな文學はなかつたが、ただ「詞」といつて、行の長さが不そろいで、韻をふみ、音樂に合わせる特別な詩が發達した。五代のうち、南唐の王さま親子の「詞」は有名である。やがて宋の時代（九六〇—一二七六）になると、「詞」はますます盛んで、ちようど唐時代の詩のように代表的な文學になつたから、「宋詞」とよぶこともある。しかし「詞」は唐時代にもあつたし、詩のくずれたもののようにも見えるので、これを「詩餘」とよぶ人もある。

中國詩の發達を形式の點から見ると、まず「詩經」や、陶淵明のある詩のような四字一行のもの（四言詩という。たとえば「關關雎鳩」）、それから漢・六朝ごろの「古詩」とよばれる五字一行のもの（五言詩とよばれ、たとえば「行行重行行」）、李白や杜甫のころの七字一行のもの（七言詩といい、たとえば「峨眉山月半輪秋」）などがあるが、もちろん李白や杜甫は一行五字の五言詩もたくさんつくつている。ただ、ハツキリした「詞」になると形式も特別で、內容にも詩とはちがつた味がある。だから「詞」は「詩の餘り」と見るより、まつたく新しい種類の詩と見てよかろう。たとえば「風乍起、吹皺一池春水」（風立てば、しわ寄る池の春の水）など、ちよつと俳

句のような心境である。「詞」はこのように、一行の文句の字數がまちまちなので、「長短句」ともいう。また一首全體の長さによつて「小令（小うた）・中調・長調」などの區別がある。

宋の時代には「詞」のほかに、むかしからの詩や文を作つた有名な人たちがある。いちばんよく知られているのは北宋時代の蘇東坡（名は軾、一〇三六—一一〇一）と、南宋時代の陸游（號は放翁、一一二五—一二一〇）で、蘇は大らかな明かるい詩を作り、陸には杜甫をサバサバさせたようなところがある。蘇はまた「詞」も作つた。

宋の時代に忘れてならないのは、庶民のための口語文學が頭をもたげたことである。宋が北のほうの金の國に攻められると、都を河南の開封からいまの浙江杭州（臨安とよばれた）に移したが、この南宋の時代に町で講談をやつていた人たちの種本が、（唐・五代ころの「變文」とともに）中國大衆文學のはじまりになつた。これらは短編小說の一種であるが、のちに明の末ごろに編集されたのが二百編以上もあり、そのなかのあるものは江戸時代の日本に輸入されて、「讀み本」という庶民文學の材料になつた。日本で有名な「紺屋高尾」という女の話しなどは、中國のこうした講談本からの燒きなおしだといわれる。宋から明を經て現代に傳えられたこれらの短編口語小說は、中國でも「今古奇觀」という選集になつて、長編小說とともに有名である。

宋はとうとう北からきた元（一二七六—一三六七）にほろぼされたが、元の民族は蒙古人で、中國の古典文學はよくわからなかつたから、目で見る芝居を盛んにやらせた。中國の演劇は、唐の玄宗皇帝が「梨園教坊」という歌劇學校を開いてから本格的になり、北宋時代には專門の役所ができて、「詞」の大家の周邦彥が長官に任命された。もともと「詞」の發達の原動力は音樂であつたが、それが演劇と結びついたから理想的である。そして元時代になると、「詞」が變化して「元曲」という、りつぱな演劇の體系になつた。元曲はまた「雜劇」ともいう。

元の時代に芝居の台本を書いた人は、たいてい北方人で、北方の言葉で歌を作つたから、これを「北曲」という。ふつう元曲といえば北曲のことである。「曲」（芝居の歌）はもともと「詞」から出たので、「詞餘」ともよばれる。北曲にたいして、明の時代に南方で盛んになつた芝居を「南曲」または「明曲」という。北曲は音樂も歌もはげしいが、南曲は清くやわらかである。南曲はまた「崑曲」ともよばれ、明・清時代の貴族的な人たちにもてはやされたが、いまは「京劇」（北京芝居）に押されて勢力がない。

中國人は芝居がすきで、しろうと芝居などもなかなか上ずである。お祝いごとや、お正月などには、すぐに芝居をやる。政治が變わつても、この趣味は變わらないらしい。時には社會的

な不滿を芝居にかこつけてぶちまけたような事實も、演劇の歴史に見えている。

六二——明・清の小説

ほかの國でもそうかもしれないが、中國においては、あるひとつの時代を代表するようなすぐれた形式と内容をもつたものがあらわれると、そのあとはもうその上に出るほどのものはあらわれてこない。唐の詩でも、宋の「詞」でも、元の「曲」でも、それがその時代に、比較的みじかい時間のうちに、高いところまでのぼつてしまうと、あとはくだり坂になつてゆくようである。

明（一三六八—一六四四）と清（一六四四—一九一四）の時代をいつしよにして、それを代表する文學の形式は何かといえば、まず小説であろう。それも非常に長い長編小説がいくつもあらわれている。そのなかの主なものを取りあげてみよう。

〔三國演義〕 日本では大衆小説家や兒童文學者が「三國志」というものを書いているが、もともと「三國志」は晉（しん）の時代にできた正式の歴史書であつて小説ではない。小説のほうは口語體をすこしまぜ、話しに尾ヒレをつけて長く引きのばしたもので、「三國志演義」または「三國演義」あるいはただ「三國」とよぶ。漢の末に天下が亂れ、魏と蜀と吳に「三分」されて、

たがいに爭つたことがすじになつているが、このことはもう唐時代から講談になつて語られていたらしい。宋になると、それ專門の講釋師もできた。元のころには繪入りの讀み物が出版され、芝居（元曲）にも取りいれられた。亂暴な曹操、知惠のある諸葛孔明、いさましい關羽や張飛のすることに、むかしの中國の人たちもどんなにか胸をおどらせたことであろう。

ところで、「三國演義」が現在のように、日本語にして二千ページもの長編小説になつたのは、いくら早くても明のはじめごろであろう。いく人もの大衆作家たちが、つぎからつぎに書きたしたりけずつたり、分けたりくつつけたりしてできたもので、はじめから終りまでひとりで書いたのではない。これは中國の、ほかの長編小説についてもいえることである。だから、内容にもまとまりのわるいところができたりするが、とにかく人氣があり、新しい小説とならんで讀まれている。日本には元祿年間にもう紹介された。

〔水滸傳〕 この標題は「水邊の物語り」という意味である。北宋の末に山東の梁山泊という湖のほとりの山に立てこもつて、時の政府の軍隊と戰つた人たちのことが書いてある。作者や年代はよくわからないが、いまの形になつたのは、やはり明のはじめか中ごろであろう。文章は古い口語體で、たいへん齒切れがよく、「三國演義」より段ちがいによい。中國が世界に誇

ることのできる大衆文學の傑作で、外國語にも譯されている。封建時代には、この小説のなかの人たちを「盗賊」だといつてきたが、じつは役人や世間の人たちの道德がすたれてワイロをとつたり黨派の利益ばかりを考えていると、どんな結果になるかというのがこの小説のテーマであるようだ。どちらにせよ、ずいぶんおかしなことや亂暴なことなどもたくさん出てくるおもしろい小説で、日本でも德川吉宗のころ、岡島冠山という人が紹介してからたいへん廣く讀まれ、いまでも新しく譯されている。

〔西遊記〕 だれでも子どものころ、あの孫悟空の漫畫を見ておもしろがつたことであろう。その孫悟空と、ブタの猪八戒と、もうひとりの沙悟淨という、三人の弟子たちが、三藏法師という坊さんのお供をして、インドにお經とりに行くのが「西遊記」のすじである。サルの孫悟空が知惠をしぼつて、いろいろな困難と戰つて行くところは、おもしろいばかりでなく、なにか人生のことを物語つているようでもある。この小説も、もとはみじかい傳記や旅行記であつたのが、だんだん雪ダルマのように大きくなつて、とうとう明の中ごろの人吳承恩(一五〇〇?—一五八二)が、いまのような長いものにしあげた。

この「西遊記」でも「三國演義」でも「水滸傳」でも、およそ中國の長編小説はものすごく

長いので、むかしとちがつて讀まねばならぬ本の多い現代の人には、なかなか全部を讀むことはむつかしい。文章も取つつきにくいし、話しにも道ぐさが多くて、おもしろいといえばおもしろいが、たいくつだと感じる人もあろう。

〔儒林外史〕 明や清の時代には、試驗によつて役人を採用したので、だれもがそのために學問をするようになり、ただ試驗に受かりさえすれば、道德的にどうであろうと社會のためになるまいと、いつこう平氣なような人もたくさんできた。清のはじめごろの人吳敬梓(一七〇一—一七五四)は、「これはくだらないことだ」と思つたので、この「儒林外史」(學者の內幕)を書いて、みんなが役人になりたがるのをヒニクつた。

〔紅樓夢〕 これは、清朝の初期のころの作品であるが、內容から見て「中國の源氏物語」といつた長編小説である。封建時代の大金もちの家庭のことを、寫實的なこまかい筆で書いている。作者はそのころの「斜陽族」で曹雪芹(一七一九—一七六三)という人、この小説は未完成のまま死んだのを、ほかの人があと三分の一書きたした。

〔聊齋志異〕 これはむつかしい文語體で書かれた四百あまりの、ふしぎな話しの本である。キツネが人間のお嫁さんに化けたり、人間がコオロギになつたり、鳥がかたきうちをしたりす